にはそれ〴〵專門工場が設けられて作業を行つてゐる。以上は勃海化學工業公司の組織であるが、その他の各工場も大體同樣である。西安・太原方面の小工場では、鉛室硫酸を出してゐるが、工務等は何等區別を設けてなく、單に經理と會計係との區別と、それに若干の職工がゐるに過ぎない。

三、機械の設備　製酸機械では硫酸・硝酸が比較的複雜であるが、鹽酸は幾分簡單である。大規模のものには燃化爐・蒸汽管・集酸筒・揚酸機等がある。硫酸製造には打礦機・燒礦爐・電解槽・反應塔・吹送機・吸硝器等がある。硝硫製造の場合も略々同樣で、ただ大量製造の場合はその裝置が更に複雜となるが、機械は硫酸製造の場合と殆ど異らない。蓋し硝酸の製造は、硝石を硫酸中に加へて蒸溜すれば得られるからである。小工場の設備はまことに簡單で、單に燒礦爐・鑄鐵鍋・鉛室等を設けてあるに過ぎない。又單に鹽酸のみを製造する工場には、僅に土製燒爐・蒸氣管及び陶器製甕があるに過ぎない。

四、製造の順序　硫酸は西歷八世紀に既に發見せられ、十八世紀に至り始めて硫黃による硫酸の製造法が發明された。近時は普通に鉛室製造法を用ひる者が多い。卽ち硫鐵鑛石を爐に入れて燒き、亞硫酸瓦斯を發生せしめると同時に、一方硫酸に硝石を加へて硝酸瓦斯を發生せしめ、氣管を通じてこれ等を高塔に導く。この塔の頂上には受器が設けられ、こゝに於いて更に適當の處置を講じて、亞硫酸と硝酸とを上部から噴出する水蒸氣に混合せしめて、然る後一號鉛室に入れると濃化して硫酸が製造せられる。こゝでまだ濃化されない時には下方より更に導管を通過せしめ、再び第二號鉛室に入れる。更に尙ほ濃化されない場合は、三號鉛室に入れて硫酸を造る。さてこの鉛室の形は、以前は多く角形のものを使用してゐたが、西歷一九〇〇年獨逸人マチュールが圓形鉛室に改良してより後、角形のものはあまり用ひられなくなつた。何となれば圓形の生產量は角形より遙に多いからである（註一）。

硝酸は西歷七〇〇年頃既に發見され、硝石を以て硝酸を製造する方法は一八〇〇年頃始めて發見せられた。硝石を使用して製造される硝酸は、初めは粗製品で、比量は一・四であるが、これを蒸溜器にて更に蒸溜すると純硝酸が得られる。最も濃厚なる硝酸は HNO_3 を九九・五%—九九・八%を含有し、普通の硝酸は HNO_3 三〇%—六五%である（註二）。

鹽酸は西歷十五世紀に始めて發見され、當時は食鹽及び綠礬を蒸製して造つてゐた。十六世紀中葉に到つて始めて硫酸に食鹽を加へて製造される樣になつた。鹽酸は食鹽から曹達を製する際多量に得られる。卽ち學理上鹽素と水素を混合して日光に接觸せしむれば直ちに生成し得る。工業上鹽酸を製造するには、食鹽中に硫酸を加へて分解せしめ、種々の反應を經て鹽酸を生ずる。この際夾雜物があつて純粹でないものは、種々の藥品を加へて除去する（註三）。

五、原料　三酸の原料は極めて簡單である。卽ち硫酸製造は、酸黃或は硫鐵鑛を主要原料とし、硝酸製造には硝石、鹽酸製造には食鹽が主要原料をなしてゐる。近年西安の集成三酸工廠の如きは、單に硫黃と硝石の二種の原料を用ひて三酸を製造してゐる。卽ち硫黃にて硫酸、硝石にて硝酸を製し、更に硝酸製造に際して生じたる殘渣と、硝石精製時の殘渣とを用ひて鹽酸を製造する。從つてその原料は相互に利用され、全然廢棄される部分が無くなる。又山西省太原の華晉酸廠では滿水（苦汁）を加熱して濃液となし、更に木炭灰を加へて鹽酸を製造してゐる。蓋し該地方は食鹽を得る事が比較的困難で、この方法によつても酸を製造して工業用に供する事が出來るからであるが、但しこの土法原料を使用するのは、小規模の製造には適しても大量生產を行ふことは不可能である。その他別種の製品を兼製するために他の原料を使用してゐるものもあるが、それはその製品の必要とする原料によつてきめられる譯で、一概には言へない。

六、製品　製酸工場の製品は、主として硝酸・硫酸・鹽酸の三酸である。然してこの三者には各々工業上相互に利便があり、他種の工業用原料を兼製するものがある。例へば鹽酸製造の場合に、漂白粉・各種の曹達・硝石・苛性曹達を兼製するものもあり、又、泡花碱（髮洗ひ粉）・炭酸マグネシゥム・カルシウム等を兼製するのもある。上海の天原廠、北方の勃海化學公司等が卽ちこれである。各工場の製品の內では今日では硫酸・鹽酸が比較的多く、硝酸は梧州の兩廣省辦硫酸廠にて製造してゐるが、その產額は大したものではなく、又西安の集成工廠は一日の生產量僅かに數百封度に過ぎない。硫酸の濃度は普通四十八

度乃至六十六度で、種類には室酸・塔酸・蒸濃酸等の別がある。鹽酸は普通二十一、二度、硫酸も三十度乃至四十八度が普通である。但し濃厚なる純硝酸では HNO_3 を九九・五%—九九・八%含有のものをも製造することが出來る（註四）。

七、用途及び販路　硫酸は無色無臭の强酸液體で、比重は溫度の高低に依つて差異があるが、大體一・八四二乃至一・八五四である。種類としては水化硫酸・二水化硫酸の別がある。工業上の用途に於いては曹達の製造、石油・コールタールの精製等の重要なる材料をなす。又ステアリン蠟燭・硫酸曹達・硫酸加里・硫酸礬土・明礬・膽礬・綠礬・ニトログリセリン・棉火藥等々の製造にも供せられる（註五）。硝酸の粗製のものは多く淡黃色を帶びた不透明の液體で、大低亞硝酸沃素・硫酸・鹽酸及び鐵分を夾雜し、その比重は一・三三乃至一・四である。通常 HNO_3 三〇%—六〇%を含有し、最も濃厚なもので九九・八%を含有してゐる。工業上の用途は極めて廣範圍に及び、最も重要なものとしては火藥及びその他の爆發物・硫酸の製造、色素花火・金銀の分解等の用に供せられる（註六）。鹽酸は純粹の狀態に於いては、透明無色の液體であり、刺戟性の臭味を有し、比重は一・二〇乃至一・二六である。通常の鹽酸が黃色を呈してゐるのは、鹽化鐵・鹽素及び有機質を含有してゐるからである。工業上の用途の廣さは硫酸・硫酸に次ぎ、即ち鹽素・鹽素酸・カリウム・滿砂・アンチモニー及びその他種々の鹽化物の製造に須臾も缺くべからざるものである。冶金術に於いても骨炭の精製に供せられ、近來染料の製造及び金屬の溶解等に供せられるものも又少しとしない（註七）。販路は大體支那國內で、梧州の硫酸・硝酸は多く廣東・廣西兩省內に賣捌かれ、太原及び西安の製品はそれ〴〵山西・陝西省內にて消費されるものが多い。たゞ上海及び北方の工場に於ける製品は產額は少いが、支那各都市に普及してゐる。勃海化學公司の製品は更に南洋等に賣捌かれることもある。

八、その他　硫酸・硝酸・鹽酸の內、工業上最も用途の廣いものは硫酸である。然しながら軍事工業上に於いては、硝酸が第一位を占める。即ち今日製造せられる爆發藥及び爆彈等の原料は悉く硝酸である。獨逸は歐洲大戰當時、智利硝石が輸入不可能に陷り、硝酸の主要原料の來源が遂に杜絕した時、偉大なる科學の進步により、種々の方法を用ひてこれを生產するに至つた。即ち液態空氣より得られる窒素と、水の電解によつて得られる水素とを化合しても硝酸を製造することが出來る。歐洲大戰當時、獨逸には酸化アンモニヤの製造工場が非常に多く、一年間の生產量千二百萬瓩に及ぶ大工場だけでも三十を算してゐた。そこで上述目的のため、各工場とも戰時大いに擴張せられ、最大の來源が杜絕したにも拘らず、硝酸の原料には毫も影響を蒙らなかつた（註八）。硝酸に次いで軍需工業の重要原料となるものは硫酸である。獨逸は歐洲大戰前、硫酸製造には黃鐵鑛を原料とし、その大部分は西班牙より來てゐたが、大戰當時聯合軍の封鎖によつて黃鐵鑛の來源も同樣杜絕するに至つた。こゝに於いてライン河畔の黃鐵鑛の貧鑛、ハンガリーの黃銅鑛、シレジアの硫亞鉛鑛等を採掘したが、尙ほ需要の量には滿たなかつた。そこで曹達を製造する場合、使用する硫黃の回收法を勵行し、又石膏・硬石膏等をコークスと共に灼熱して硫化カルシユームを生ぜしめ、これによつて得る硫黃を以て硫酸製造を行つたので、何等原料の缺乏を憂慮する必要もなくなつた（註九）。かくの如きは、蓋し獨逸の化學が極めて發達してゐたため、かゝる危急の際にあつても能く學術を利用して救濟する事が出來た好例である。これらは國防上多大の注意を拂ふ價値がある。工業上需要される酸類には、單に硫酸・硝酸・鹽酸の三種のみでなく、その外に炭酸・燐酸・ステアリン・醋酸・タンニン酸・硼酸・木酸・油酸・硅酸等の如きは皆それ〴〵工業の特定部分に於いて必要とされるものであり、その他にも種々あるが、枚擧に遑がない。但しその用途は何れも硫酸・硝酸・鹽酸の廣汎にして且つ重要なるに及ばず、而も軍需工業上にも直接の關係は少く、支那では現在のところ製造不可能のものや、或は萠芽期にあるに過ぎないものもあるから、茲には省略する。

註一より註七まで——日文『科學智識辭典』・『理科辭典』・『工業藥品大辭典』等參照

註八及び九——日本『東洋學藝雜誌』第四四七號「獨逸の工業と戰爭」參照

第二十三章　石油精製工業

一、沿革　石油が近世に於ける燃料中の重要地位を占めてゐるのは、衆知の事實である。近代戰爭の主因は石油の爭奪にあるとさへ言はれてゐるが、まことにその通りである。

支那に於いては陝西省の石油埋藏量の豐富なることは、世人の注目する所であるが、惜しむらくは徒らに地中に死藏せられ、未だに採掘されるに至らないのは慨歎に堪へない。然るに石油の需要量は年々增加し、民國十九年の海關報告によれば、廣東省に於ける輸入石油は九百萬海關兩以上に及ぶといふ。海外に流出する正貨の巨額なることは實に驚異に値する。當時外國爲替下落のため石油價格は更に騰貴し、支那商人はこゝに鑒みる所あり、遂にこれが救濟案を立てた。卽ち外國から二等品の柴油原油を購入してこれを原料とし、工場を設けて精製することになり、試驗的に實施した結果、頗る好績を擧げることが出來た。蓋し支那の勞銀は比較的低廉であるから、油量度の低い原料を用ひることは相當利益を擧げることになる。卽ち民國十九年頃には石油精製工場が雨後の筍の如く設立せられるに至つた。廣東全省では總計百六十餘工場の多きに上り、その分布地域は大部分廣州附近で、この方面のみで約百三十餘工場である。爾餘は南海・番禺・中山等の地方に分布して居り、實に支那國內工業中發展の最も迅速なる新興工業である。然るに、その後外國商人はこの精製石油の販賣狀況の極めて旺盛なるを見て、その販路を奪ひこれを消滅せしめんと計つた。卽ち最初は柴油の價格を引上げて、製造者の原價を重くし、更に引續き石油のダンピングを斷行した。民國二十二年三大洋行が相繼いで奧地に工場を設立して精製事業に從事し、價格を安くして支那系工場に對抗して來た。從つて、資本薄弱な支那系工場はこの打擊を受け苦境に瀕せざるものはなく、續々と停業するに至つた。これ等はその後政府の補助を得て幾分恢復したが、完全に復業したものは僅に三、四十工場に過ぎない。今日政府は財政困難の關係から右補助取消の議が出てゐるが、これが一旦實現されることゝなれば、石油精製工場の存在は更に困難となるであらう

二、組織　石油精製工場では、中國煤油公司が最大である。該工場は中山唐家灣地方にあり、株式會社で資本金は百六十萬元である。然しながら、同社も外國品の競爭により影響を受けて停業を布告した。その他は大部分合資組織で、規模も大ならず、資本も多くて數萬元、少いものは僅かに五百元である。普通三千元から五千元のものが多數を占めてゐる。內部の組織に關しては、卽ち株主中より經理一名を推薦し、製造及び營業の事項を統轄せしめる。石油事業は比較的單純であるから、工場內も各部に分けずに、僅かに會計一名、職員數名、出入貨物勘定の管理及び記帳係りを置くのみである。

三、機械の設備　石油精製の主要機械は蒸溜鍋・吸油機・水汲機・冷却機（卽ち風扇）等であつて、この外では僅かに沈澱槽及び貯藏タンク位である。これに利用する動力は、大體に於いて石油機關が多い。卽ち設備が極めて簡單で、容易に開業する事が出來るので、石油精製業はかくの如く多い譯である。

四、製造の順序　石油の精製方法は、先づ柴油を蒸溜鍋內に入れて適當の熱度に蒸煮し、吸油機にてこれを蒸溜鍋より吸出し、冷却器中にて風力を以て攪拌しつゝ熱を除いて冷却せしめる。これを更に油槽に注入し、硫酸で油中の硫磺及び水分を分析し、然る後輕酸化ナトリウム液を以て油中の酸性を除去し、再び酸性土（俗に漂油土と稱す）を用ひて油中の夾雜物を沈澱せしめ、吸油機にて上部の澄んだ部分を吸收し、これを濾過してはじめて石油が出來上る。殘留した混濁物は燃料に供し、或は烏烟に製造される。烏烟は墨を製造する原料となる。

五、原料　石油精製の原料は Solas Oil で、普通柴油と言つてゐる。最初はスタンダード・亞細亞及びテキサスの三大會社より、二十九度乃至三十度の低度の柴油を購入してゐた。一噸約香港貨幣四、五十元で、一噸の柴油から精製し得る石油は五十二、三聽である（一聽は五ガロンをいふ）。然るにその後、右の三大會社の操縱する所となつて、柴油は一噸七、八十元に騰貴し、

且つその内に往々コパール油（Copal 一種の硬質樹脂）質を混合してゐるので、その精練が困難となり、各工場は多大の影響を蒙るに至つた。民國二十年冬、南中煤油渣公司が成立してよりは三十八度乃至四十度の高度柴油を採用するに至つたが、この高度柴油ならば一噸にて石油五十七、八聽を製造することが出來る。その大部分は米國より購入するが、同國より運送するために要する運賃は一噸につき約十餘元、關稅二・九金單位であるから、低度柴油の使用に比して幾分利益である。かくて漸く各工場は息をつく事が出來た譯である。現在廣州の柴油仕入業者は、南中・中亞・裕華・普華・永康・華南・和興・中源等合計十餘に上る。石油精製に用ひる主要配合料は硫酸及び曹達の二種である。一噸の柴油には硫酸約二十五、六斤を要し、この硫酸は梧州の兩廣硫酸廠及び廣東建設廳の經營する硫酸工場の製品であつて百封度約十一、二元である。今日石油精製工場の衰落と共に該兩工場も頗る影響を受け、廣州の硫酸工場の停業もこれに原因してゐる。曹達は英國製で一石約十餘元である。一噸の柴油に曹達約二十斤内外を用する。

六、製品　石油精製業は從來外國商人の販路爭奪の影響を受け、工場數は漸次減少したが、その生産量は年々幾分增加しつゝある。民國十九年の石油精製額は八、一一八、〇〇〇ガロンで、石油總額の二六・二％を占め、民國二十年の産額は一二、二三二、五五〇ガロンで、總額の三四・六％、民國二十一年は一八、五二八、六七五ガロンで四四・六％、民國二十二年は三二、九三二、九〇〇ガロンで七一・九％を占めてゐる。生産量の上では增加を示してゐるが、その賣價は日を遂ふて低落して居り然も外國商人のダンピング政策は、依然として續行されつゝあるので、石油精製業の前途はまことに樂觀を許さない狀態にある。蓋し原料騰貴のために、精製石油一聽につき原價約二元餘を要し、營業稅が大洋一元五角であるから、これのみでも既に四元に達する。この外更に包裝等に要する諸費用が加算される。廣東省政府に於いて一聽に一元の補助を與へてゐるとは言へ、それも辛じて現狀を維持し得る程度に過ぎず、しかも今日補助費取消の議が出てゐると聞くが、若しも不幸にして一旦これが實現することになれば、この新興工業も遂に終熄を見なければなるまい。

七、用途及び販路　各工場より産出する精製石油は燃料・燈用に供せられる。蓋し奥地に於いては品質の如何に對しては嚴格でなく、單に價格の低廉を要求してゐるから、精製石油は奥地向の販賣が最も得策である。從つて販路も極めて廣く、廣東省内の外、廣西省方面にも販賣されるがその數量は多くない。精製石油の賣價は民國二十年には一聽五元四角で、最低が四元九角、同年の外國石油は一聽六元四、五角であつた。民國二十一年に至り、精製石油の價格は一聽約四元七、八角、外國石油も低落して五元七、八角になつてゐる。民國二十二年四月には外國商人が奥地に工場を設けて對抗して來たので、精製石油の價格は三元に下落してゐる。競爭の激烈なることはこれに依つても窺はれる。今日精製石油と奥地に於いて精製される外國系石油とは、賣價が大體相等しく、就れも三元四角内外である。但し上等外國系石油は依然六元八、九角に騰貴してゐる。

第二十四章　護謨工業

一、沿革　支那の護謨製造工場は最初廣州に起り、次いで上海に設立された。その他の省には殆んど見られない。最も早く開業したのは廣東兄弟橡膠廠で、廣州河南鰲洲沙基に設けられ、支那商人莫興なるものが民國七年に創業したもので、製品は護謨靴であつた。當時は護謨靴の需要が甚だ廣く、且つ一工場で獨占して製造を行つてゐたから、一時は需要が供給よりも多いといふ狀態で、從つてその利益も頗る巨額に上つた。かくて民國九年には、更に合資組織で大一家膠廠を廣州の河南相公巷に增設するに至つた。同年平安福橡膠廠も成立し、又時を同じくして上海模範工廠も亦護謨製造に從事するやうになつた

民國十一年にはこれに次いで馮强製膠廠が起り、工場を廣州の河南海珠橋地方に設立した。この工場は規模が大きく製品の産額もなか〳〵多く、こゝに至つて護謨工業も終に支那の一新興工業となつた。たゞ上海模範工廠の製品は質が劣り、民國十三年には一時停業を餘儀なくさるゝに至つた。民國十六年石芝珊なる者が、上海に義昌膠廠を創設したが、遇々南洋護謨が外

人の操縦を受くるに至り、上海・廣州の各護謨工場は何れも大打擊を受け、義昌膠廠は遂に正泰の經營に歸する事になつた。民國十七年薛福基が大中華橡膠廠を上海徐家匯に創設したが、この時南洋護謨の價格も正常に復し、上海・廣州兩地の工場は再び振興して來た。當時は製品の賣價が極めて高く從つてその利益も大きかつたが、利の在る處衆爭つてこれに趨くの理にして、新規に護謨工場を開設する者が踵を接して現はれた。民國十七、八、九年の三年間に上海・廣州の兩地に新設された護謨工場はその數實に二十餘工場の多きに上つた。但し進歩が餘りにも急速度であつたため、一時市場は供給が需要より多いといふ現象を呈し、廣州の新設各工場は何れもその影響を受けて、遂に相前後して停業するの止むなきに至り、創業以來相當歴史の古い工場の如きも營業と休業相半するの狀態であつたが、たゞ上海の各工場だけは販路も幾分佳良で現狀を維持してゐた。民國二十年南洋のゴム價格が暴落するに及び、これ等停業しつゝあつた護謨工場も漸次再び恢復して來た。廣州の各工場の製品はすべて海洋を販路としてゐるが、近時劣等品のグンピングの影響で從來の獨占市場は殆んどこれを失ひ、而も雲南・廣西・福建・廣東諸省の農村は經濟力が衰弱して殆ど購買力は無くなり、從つて廣州の護謨工場は目下尙十八工場を算してゐるが、いづれも辛じてその經營を維持してゐるに過ぎない。これに對して上海の護謨工場は逐年增加し工場數も約三、四十工場に及んでゐる。蓋し同地は東部に位し中北支那にも販路を有してゐるため、同じく劣等品のグンピングに影響されてゐるとは言へ、廣州に於けるが如く市場の全面的打擊を蒙るやうなことは無いからである。

二、組織　護謨工場の資本組織は、大體個人資本、合資及び株式會社の三種で、就中合資組織が多數を占めてゐる。その內部組織は上海・廣州の工場何れも大體同じであり、卽ち株主に於いて經理一名を選任し、これをして全工場の事務を統轄せしめる。經理の下は工場・營業の二部に分ち、各部に主任一名を置く。營業部は販賣事務を掌りその內部を會計・貯藏の二股に分け、各股に職員二、三名を配して會計及び營業事務を掌らしめる。工場部は原料配合・護謨製造・製靴・貯藏・會計室等に分れる。配合では經驗ある技師一名を招聘して專ら配合作業に當らせるか、又は廣州の各工場の如く熟練工に擔任せしめることもある。護模製造室では專門にその製造に當り、その內部は正副の係員二名を設けてある。係員とは實際は職工と同一作業をする。製靴室には管理員一名を設け、往々助手數名を置いて管理作業を補佐せしめることがある。貯藏室には管理員一、二を設け貯藏事務を管理せしめる。收發室は專ら靴布その他各種原料の收發事務を掌り、收發員二名を設く。會計室は全工場の會計事務を掌り、會計主任一名、同じく補助職員四、五名を置く。以上の外にも尙機關室及び修理室がある。この兩室には大體その長一名宛を置き、機關及修理事務を管理せしめてゐる。製靴室に於いて元來必要なる型取・截斷・裁縫等の作業は普通外部の臨時雇工をこれに充てゝゐる。卽ち原料の配給を受けた臨時工はこれを家庭內に於いて作業し、完了後工場に納付する。かくすれば工場側は職工の過多となるを免れ、又職工は自由な作業が出來て、兩者共大いに便利となる。

三、機械の設備　護謨工場に使用する動力では蒸氣發動機が大部分を占め、凡そ輾軋機二機で、大體に於いて護謨製造機二臺に三十五馬力乃至六十馬力を配する。然し亦六十馬力以上を出して護謨製造機及び底皮壓搾機を運轉せしめる者もある。この二機は護謨靴製造の主要機械で、何れも環筒（Cracker 原料破搗機）式である。前者には二箇の滾筒を設け、時に三箇設備せるものもある。滾筒の大きさは短徑約十二寸、長徑約十八寸のものが多い。筒の兩端には蒸氣管が裝置してあつて、滾筒の必要とする熱度を供給する。底皮壓搾機も大體これと同じであるが、その滾筒が比較的細長い。この兩種の機械は最初は日本製を採用してゐたが、今日では支那各地の機械工場で製造する事が出來るやうになつたので、各護謨工場で使用する機械はいづれも支那製である。以上述べたものゝ外、夾布機・糊付機・蒸靴機等がある。夾布機は表布と裏布とを併せるのに用ひられる。この夾布機は大工場では殆んど皆設備して居り、小工場では大工場にその作業を委託する。糊付機は糊液を付けるに用ひる。蒸靴機は護謨靴の蒸製に用ひ、一機に靴八十足乃至百二十足を入れることが出來るが、これは勿論機の大小によつて異る。蒸氣機關も護謨靴製造の重要機械である。蓋し護謨製造機、底皮壓搾機及び蒸靴機は、共に蒸氣力にて生護謨を軟化し又は作業を行ふからである。製靴室內の作業は多く手工具を使用する。例へば鋏・護謨鑪の類、木製の臺や腰掛等を準備して職

工の作業に供するに過ぎない。各工場内部の設備は大體類似してゐるが、たゞ工場の規模の大小によつて、その使用する機械數の多寡が分れる。

四、製造の順序 製靴順序には約十餘の段階があつて頗る繁瑣であるが、大體次に述べる八工程に分つ事が出來る。卽ち

(一) 夾布　表布と裏布とを二重に併せる。

(二) 型書　鉛粉にて表布上に靴型を描く。

(三) 裁斷　描いた靴型の通りに裁斷する。

(四) 縫合　縫合すべき箇所を縫合して靴の甲を仕上げる。

以上が靴の甲の製造順序である。

(五) 原料配合　生護謨とその他の原料とを配合する。

(六) 護謨製造　配合した原料を製造機に入れ、柔軟な凝固體となつたものを更に底皮壓搾機にて數回壓搾して底皮を造る。

(七) 底皮切斷　出來上つた底皮を、鋏で靴皮の寸法に切斷する。

以上が護謨底の製造順序である。

(八) 粘着　薄護謨液を用ひて、先づ靴尖に薄く塗布し、且つ跟を粘着した後、鋼鐵製の靴型に依つて、靴の甲と底との縫合部を更に薄護謨で粘着する。これで靴が出來上る。これを更に蒸靴機に入れて、七〇封度の汽壓（攝氏一五八度、華氏三一六度）の熱力を加へ、約三十分間蒸してからこれを取出して冷却し、然る後靴型を除去して完成する。これが紙箱に詰めて賣出される。

以上が大體の製造の工程である。

五、原料 護謨の原料は縮み護謨（クレープ）と生護謨の二種に分れ、大部分は南洋一帶に產出する。廣東省南海縣にも產出するが產出量は極めて少い。縮み護謨といふのは一種の半製品で、色は淺黃色で、その面には縞紋がある。故に白色縮とも云ふ。一封度の價格四角八分乃至五角八、九分である。質が優美であるから、上等の護謨靴底に使用される。生護謨は又樹護謨とも稱する。一種の粉末で、その他の原料を配合して、始めて護謨を製造することが出來る。この護謨粉は上中下の三等級に分れ、その價格は上級が一封度五角七、八分、中級が約四角六、七分、下級が約二角四、五分である。配合材料には第一に亞鉛華がある。別名を五德粉ともいひ、一樽の重さ四百二十斤、價格約八十餘元である。次に石粉は一噸約四十五、六元、炭酸カルシュウムは一噸約九十餘元である。硫黃の市價は元來低廉であるが、廣州では專賣品となつてゐるため、價格も稍々高く、一擔約二十三元である。促進劑は一名快熱粉ともいひ、一瓩約七元である。滿俺粉は一噸の價格約六十元、滑石粉は一噸約百元である。配合の方法に關しては、各工場とも祕密にして外部に洩らさない。その配合する分量は各々異るが、大體の比率は生護謨三六%、亞鉛華二〇%、炭酸カルシュウム二〇%、滿俺粉二%、滑石粉二%、石粉一五%、硫黃と促進劑とは共に一・五%を占めてゐる。配合分量九五%以上のものは中等品としてゐる。

六、製品 護謨工場の製品は、販賣地域に從つて製品も幾分異る。廣州の各工場では護謨靴製造が多く、上海の各工場ではオーバーシューの製造が多く、往々熱水袋（譯註　湯を入れて冬期手を暖める護謨袋）及び玩具の製造も兼ねてゐる。上海の製品は民國十八年五工場で年產額約六十萬ダース、民國十九年には十六工場に增加し、年產額約三百萬ダース、最近は三十二工場に增加して、產額は二倍に增加を見てゐる。各工場の最近三年間の營業狀態は何れも極めて好調を示し、缺損を來すやうなものなく、新設工場でも三割乃至四割の利益を擧げてゐる。上海の各種工業の中でも、この護謨工業の如く目覺しい發展を遂げたものは外にない。廣州には最近十八工場あつて、年產額約八百萬乃至九百萬ダースであるから、產額としては少くないが、賣價が下落し、各種の護謨靴も以前は一ダース約二元餘であつたが、最近では最高一元內外、最低僅に半元で、平均七角といふ暴落を示してゐるため、その利益は非常に薄く、辛じて現狀を維持してゐる狀態である。

七、用途及び販路　廣州の各工場で製造する護謨靴の内、男子用靴は上海各工場の製品と大體同樣であるが、女子用の靴は表面に花模樣の裝飾を施し、頗る美麗であり、晴天用である。男子用靴は俗に跑靴（運動靴と稱せられ）、同じく晴天用である。販路は以前南洋方面がその約半數を占めてゐたが、今日では劣等品のダンピングや外國關稅の引上げによつて、その販路は單に廣東省及び雲南・廣西・福建の諸省の範圍となつた。上海の各工場で製造するオーバーシューは普通雨天用で、跑靴は晴天用である。その販路は支那の各省に普及してゐて、特に區域を分述することは出來ない。

第二十五章　琺瑯器具工業

一、沿革　支那に於ける琺瑯工業の起源は甚だ古く、北京前門景泰藍は琺瑯工業の一である。この琺瑯引器具の製造が發明せられたのは、明代景泰年間であつたから、從つてこれを景泰藍と稱する（註一）。民國初年に至り、始めて新式の琺瑯器具工業が上海へ傳來した。前清時代支那に輸入してゐた琺瑯器具では、獨逸製のものが最初で、日本製のものがこれに次いだ。然るに民國初年に至るや、斷然日本商品が輸入品の大多數を占めるやうになつた。つまり當時の獨逸製品は多く高級品で、從つてその價格も相當高價であつたのに對して、日本商品は普通品が多く、その賣價も從つて低廉であつたから、支那の社會各層に普及する事が出來たので、當時既に琺瑯器具の輸入額は關平銀三百萬兩の多きに上つてゐた。この時に當り、米國人マツク・グレゴリーが支那に向けて販賣される琺瑯器具が日に增加する點に着目し、上海閘北・顧家灣に廣大といふ琺瑯工場を設立した。これは小規模の製造に當り、簡單な小器物の製造を專門とし、又租界の門標や街路上のガソリンスタンド標識等を試みに製造して賣出した。然るに間もなく資本に不足を來し、支那商人の徐稻孫及び顧吉生の兩名と合資しその規模を擴張し、同時に改組して鑄豐搪瓷工場とした。これが卽ち支那商人にして琺瑯器具工場を創設せる最初である。その後民國十一、二年に至り、支那側と外國側株主との間に意見の不一致を來し、その結果、全工場を童世亨に讓渡し同時に鑄豐通記搪瓷公司と改めたのである。これと時を同じうして協豐・兆豐・中華等の三工場も相繼いで閘北・南市の二ケ所に設立せられ、更に民國十五年から同二十年に至る間には、華豐・上海・久新・立豐等の諸工場が相前後して成立し、陸續として商品を製出するに至つた。これ等の內では華豐廠が最も資本が充實し、規模も最大であるが、その他は何れも小規模の組織を有してゐるに過ぎなかつた。その後民國二十一年上海事變勃發以來、上述の各工場で營業を維持する事の出來たものは、僅かに華豐・中華・協豐の三工場のみであつた。やがて上海事變終末を告げるや、約十五、六の工場は再び作業を繼續するに至つた。以上が上海に於ける琺瑯器具工業の經過である。上海の外では、主として天津・漢口・廣東の三都市にも斯業の發展を見る事が出來る。先づ天津には中成・德記・三同の三工場があり、就中中成の設立が最も早くして民國十七年の創設である。德記・三同は同二十二年に設立せられた。次に漢口に於いては、かの大水災以後、永豐・寶豐・裕豐の三工場が開設せられたが、近年營業不振のために前二者は既に閉鎖された。但し裕豐も開業してゐるといふばかりで、實際は每月日數にして三分の一の作業をしてゐるに過ぎず、その製品も門標の如きもの位に過ぎない。蓋し各種用品の如きは殆ど上海から入つて來るものが多く、かゝる規模の組織では、到底太刀打が出來ないからである。又廣州に於ける琺瑯器具工業は、極く最近萠芽を見たもので、卽ち民國二十二年始めて廣東・廣州の兩工場が開設せられたが、その內廣東の方は株主の間に意見の不一致を來し、遂に民國二十四年五月停業したから、現在僅かに廣州一工場のみで、洗面器を專門に製造してゐるが資本も一萬元に及ばない。つまりこれ又小規模工場で試驗的なものに類し、到底上海の大工場と比較することは出來ない。

二、組織　琺瑯器具工業の內部組織は、會社の性質を有するものは會社法の規定に準據して事務を處理してゐる。卽ち全權を握るものは理事長で、次は經理及び工場長である。工場長の下には事務部・工務部・會計部（工場內に於ける會計で庶務を兼ねることもある）・材料部（原料を管理する）・包裝部等が設けられてあり、その他琺瑯粉を自製する工場では更に製粉工場を設置

する。以上は大工場の設備であるが、小規模の工場に於いては、工場内の設備もかゝる複雜なものではなく、僅かに材料貯藏處・鐵器製造部（機工部とも稱する）・燒成部等の小區別があるに過ぎず、自身で鐵器製造を行はない場合には單に琺瑯掛け・模様附け・燒成等の操作を行ふに過ぎない。その場所も工場家屋の大小により一室或は二室であり、事務の方も經理・會計・販賣係の如き職目を有するのみである。大工場の事務部は或は總務部とも稱し、工務部は機工組と美術組とに分れてゐる所がある。機工組では專ら各種鐵器の製造や動力の管理に當り、又美術組は琺瑯掛け・模様の貼布・吹付・押付・燒成等の各小部分に分れ、その內には美術を以て獨立せる一部を成すものがあり、專ら各種模様の設計や試驗等を行つてゐる。又材料部には各種の原料を管理する者及び原料を機工組に分配する者等がある。

三、機械の設備　琺瑯器具工業の用具としては、大工場に於いては機械を使用して製造を行ふ場合が多く、鐵器製造に於ける重要なる工作機械は、鐵板を所要の大さに切斷する切斷機あり、次に鐵板を各種器の型に壓搾するための壓搾機（撞床機とも稱する）があり、この壓搾された鐵器の表面を磨いて凹凸を除くための磨光機・鐵器の緣邊の不要部を除く裁斷機、鐵器の緣邊の不齊一なるを整へる緣曲機、更に形の出來上つた鐵器に環や柄等の附屬物を熔接するための熔着機等が設備される。次に琺瑯粉製造の機械で重要なるものとしては、燒成機・製粉滾桶等があり、色素製造を兼ねる者にあつては、更に籠が設備せられる。琺瑯掛けの部分には模様吹付器・描線器等があつて、これには動力によつて作業するものもある。燒成部には籠・琺瑯粉甕・鐵叉等の道具が設けられてゐる。その他動力の種類には重油發動機と電氣モーターの二種が最も多く、尙蒸氣機關も稀に使用せられることがある。

四、製造の順序　琺瑯器具製造の順序は鐵器製造・琺瑯粉製造・琺瑯掛け・燒成の四種に分つ事が出來る。先づ鐵器製造の順序は最初に黑鐵板を切斷機（剪鐵機とも稱す）によつて切斷し、用途により圓形・長方形・正方形等の大小の鐵板に切斷する。大型のものは洗濯盥或は新式の深底洗面器等の製品に使用せられ、小さいものは碗・平皿・散蓮華等に製造される。次いでこの各種大小の鐵板を器皿の模型を裝置してある壓搾機の中に入れ、これを壓搾して各種器具の型を備へた鐵器にする。然るに元來鐵板は平面片狀のものであるから、高壓を受けて各種大小方圓の凹凸器具となるに際しては、往々表面に皺を生ずることがある。この場合磨光機を使用してこの皺を平滑に磨く。この時鐵器の緣邊は凹凸が不齊で、動もすればその鋭い刺で手を傷け易いので緣曲機（捲線車、邊機ともいふ）を使用して外邊を曲げ込み平滑にする。琺瑯器具とする鐵器の製造はこれで完成するが、これに環や柄等の附屬物を取附ける場合は、電氣熔着器を用ひて熔接する。琺瑯粉製造作業には下引粉（下掛釉）と琺瑯粉（下掛釉）の別がある。下引粉は琺瑯粉と鐵板を粘着せしめる媒介劑であつて、これも一種の鑛物質である。蓋し鐵板と琺瑯粉とは直接粘着しないので、その中間にどうしても下引粉の媒介を必要とする。各種の琺瑯粉はいづれも始めは鑛物質で、これを機械で磨碎して極く微細な粉末とし、然る後種々の色素をこれと調合し、更に機械に入れ水を加へて十分攪拌研磨したものを使用する。尙ほ琺瑯粉の種々の色は隨時配合の色を變へて試驗を行ひ、且つこれを使用して描寫する模様も屢々變更して、嶄新なる趣向を試みることが肝心であるが、これは皆美術部の職務に屬する。また次に製造する品物の種類によつて、使用すべき様式及び模様色等を決定したならば、先に製造した鐵器を輕度の硫酸液を入れた容器中に浸して、附着してゐる塵埃・鐵屑等を洗滌し然る後に琺瑯掛の職工に引繼ぎ、最初下引粉を塗付した後更に各種の色の琺瑯粉を塗付し、これを別々に爐の中に入れて乾燥せしめ、それに模様の貼布、押付、吹付等の作業を必要とするものは、又それ〴〵職工の手に渡り、これを高溫度の爐の中に入れて、適當の時間に燒成を行つてから取出す。これで琺瑯器製造の過程が全部終る譯である。

五、原料　琺瑯器具製造の原料も亦鐵器製造と琺瑯粉製造との二部に分れる。前者に要する原料はたゞ鐵板一種のみで、この鐵板は黑色を呈してゐるから俗に黑鐵皮と稱して居り、その多くは米國製品で、就中黃鷹印のものが最も優良とされてゐる。尙ほこの外にも日本品や英國品が使用せられる場合もある。後者に要する原料としては最も重要なのは、酸化硅素・アンチモニー・水晶石・粘土・長石・螢石・曹達・硼砂・智利硝石・炭酸マグネシウム等であり、その他各種の酸化金屬品がある

が、その内でも酸化コバルトが最も高く、一封度につき約十數元を要し、最も低廉なのは酸化マンガンで、一封度僅かに一角前後である。その他美術部で使用される模様紙も原料の一種である。酸化硅素は大連或は廣東・惠州から採取せられるものが多く、アンチモニーは湖南省産のものもあるが餘り適當でないから、各工場に於いて使用してゐるものは、矢張り大部分外國品である。水晶石・硼砂・智利硝石等も亦外國商品が多く、曹達は卜納門と永利の兩公司製品を併用し、炭酸マグネシュウムは現在國産品で使用し得るものが出來てゐる。又粘土と長石とは多く日本よりの供給を仰ぎ、螢石は浙江省に産出がある。酸化金屬品は獨逸・ベルギー兩國産のものが多く、就中獨逸品が最も優秀である。模様貼付用紙の大半は依然として日本より輸入せられてゐるが、近時中華・益豐等の工場に於いては右の用紙の自製に努力しつゝあるといふが、使用に適するや否や明確でない。

六、製品　琺瑯製品の名稱は甚だ繁多で、これを技術といふ點から分類すれば、無地・色物・字入、又は模様押付・模様貼付・模様吹付等の三種とする事が出來、又物品について言へば、バケツ類・手提食器類・料理皿類・洗面器類・茶器類・醫學用器具類・尿瓶類・花鉢類・洗濯盥類・杯類・飯碗及び鍋類・痰壺類・門標・街路標・看板類等に分類する事が出來、その他小物としては石鹸箱・灰皿・スープ用匙・調味用小皿・電燈笠等があるが、この外各種の用品を特に誂へて製造するやうな場合は、一層複雑で到底枚擧の暇がない。又その形の上から分類すれば方形・圓形・長方形・扁平・平緣・曲緣・有蓋・無蓋等の各種に分れる。各種製品の大小は何れもその口徑を糎で計るが、最大のもので大體五、六十糎、最小のものは僅か三、四糎のものもある。各地琺瑯器具製造工場にあつては、その規模の大小に拘らず、全部純粹の琺瑯製品のみを製造してゐる。たゞ廣州の廣州家具製造廠のみは琺瑯器具の外に鋼鐵製の器具をも製造してゐるが、但し目下の所製品は出てゐない。

七、用途及び販路　琺瑯器具の用途は、各製品によつて異る。即ちバケツ類・食器や料理皿・洗面器・飯釜はそれ〴〵の用に使用せられ、その物品名によつて用途は定まつてゐる。その販路は製産地が中心をなしてゐるが、更に製造地からその省全體へ賣出される場合もある。天津・漢口・廣州の三ケ所の内、廣州と漢口には僅かに現在一工場があるに過ぎず、且つその製品は大體に於いて普通品或は低級品であるから、殆ど全部がその地の中流或は下流社會に消化せられてゐる狀態である。天津の二工場の製品は比較的高級品で、大部分が黄河流域の各省に販賣せられてゐるので、それでも一部の新式商品は矢張り上海各大工場よりの供給を仰いでゐる。この外沿海・沿江各省の都市及び奥地各村にして、凡そ交通便利なる所であれば、殆ど上海工場の製品が進出してゐない所はなく、更に遠く南洋群島にまで販路が延びてゐる。民國二十年に至り上海の所謂四豐（即ち鑄豐・益豐・兆豐・華豐の四工場）が一つの共同販賣機關を組織し、名稱を國産搪瓷營業所と稱し、所在地は江西路愛多亞路口であつた。即ち上海各工場に於ける製品は一旦すべてこの營業所を經由して卸賣せられる樣になり、同時に他省の各地にも分營業所或は特約代理販賣所を開設し、遠くはシンガポール迄及ぶといふ甚だ大きな勢力を有するやうになつた。但し中華工廠だけは全然この團體に加入してゐない。これは即ち該工場の製品は社會的に絶大の信用を有してゐるから、かくの如き團體の力を必要とせず、充分獨立營業の能力を有してゐるからで、その他小工場の製品は多くは普通で、販路も上海及び附近各縣の區域内に過ぎず、稍遠いものでもせい〳〵江蘇・浙江兩省迄の範圍に限られてゐる。尙幾分高級な品物を購入せんとするやうな場合には、平素はその準備のあるものは少いから豫め注文をする必要がある。

八、その他　琺瑯器具製造工場は直接軍事上の關係は餘り無いやうに見えるが、然し間接的に相當需用される所がある。即ち行軍の際必要なる各種の飯食器具は磁器製であると破損し易く、陶器製も重量が嵩む爲に携帶に甚だ不便であるが、琺瑯器具ならば行軍用携帶品として最も適當であり、價格は低廉にして且つ容易に破損することがない。從つて近來上海の各工場に於いては、專ら湯呑と飯碗の二種のみの製造を行つてゐる所があり、軍隊方面に納入するものも少くない額に上つてゐる。高級品は上流社會へ販賣されるが、この方は數も大して多くはない。上海各工場に於ける産額は近年逐次增加してゐる。民國初年に於いては殆ど産額といふ程のものは無く、外國品の輸入額が當時毎年開平銀で三、四百萬兩もあつた。民國十三年から同十

五年にかけて上海各工場の年產額は百萬兩前後に過ぎなかつたのが、次いで同十八、九年頃には年產三百萬兩に達するやうになり（註二）、更に同二十二年頃には一躍して二倍となり、單に上海のみでも既に六百萬兩に上る產額を見ることゝなつた（註三）。これに對し外國製品の輸入額を見るに、民國十七年頃には二百萬兩の多きに上つてゐたものが、同十八年には百七十萬兩に減少し、同十九年には百三十餘萬兩に同二十年には百萬兩程度にまで減少した。この點より見ると國產琺瑯器具工業の發達と、外國製品輸入額の減少とが密接な關係を有することがわかる。天津には現在小工場が三ケ所あるが、年產合計三十餘萬元に過ぎず、その他漢口・廣州にも各一工場づゝ存在してゐるが、何れも小工場であることは言を俟たない。職工の待遇狀況は各工場によつて異るが、大部分は職工長をして職工を募集せしめる。たゞ華豐工廠のみは初め一般に受驗者を募集する方法を取つてゐた爲、職工の本籍地の如きは殆ど支那各省に亙つてゐた。次に作業時間は普通十時間であるが、注文が殺到した場合は夜業を行ふ事もあり、この場合には勿論別に手當が與へられる。華豐工廠の燒成部は特に夜勤の者があり、その作業時間は晝間勤務のものと同一である。工賃の支拂は毎月約二回であり、男工の內機械工や小頭の如きが月給四、五十元を與へられてゐる外、その他鐵器製造方面の機械工は毎月高級者で三十元、最低十三、四元を支給せられ、琺瑯掛方面の技術男工は毎月最高三十元以上、最低約二十元である。美術方面の男工の內模樣の吹付及び描線作業工は琺瑯掛作業の場合と同樣であるが、模樣の貼付及び押付作業は皆女工であつて、出來高拂ひが多く、貼布の工賃は釐を以つて計算し一個平均約二釐半であるが、これによつて一人每日約七角前後から最低三角前後を手にしてゐる。又押付工の工賃は一個につき高いもので八、九分、安いもので約三、四分までゞあるが、一人で每日六、七件を仕上げる事が出來るから、工賃は一人每日平均三角乃至四角を得る。次に燒成作業はすべて男工であるが、その給料は月給制で約二十元乃至三十元であり、又包裝作業の職工は一人每月二十元前後を手にし、その他各部分の補助工は一人每月十元乃至十四元であるが、いづれも宿舍と食事がついてゐない。以上は各工場に於ける普通の狀況であるが、たゞ華豐のみは職工の待遇狀況が多少異つてゐる。卽ち同工場では職工全員に食事を供給して居り、又見習工にして初めて工場へ入る者には寢具や制服等の如き物も皆工場側より支給し、每月一元の手當を與へる。かくて入社後滿六ケ月を經過してから第一回の選拔があり、これに合格した者は月二元に昇給し、更に六ケ月後の選拔に合格した者は技術工に昇進する。技術工には一・二・三の等級があり、各等は更に一・二・三級に分れてゐて、初めて技術工となつた者は最低の一級に入れられ、手當として每月三元を支給せられる。その後、成績優秀な者は逐次進級すると共に、その俸給も漸次增加し、最高級（卽ち一等一級）に至れば每月二十元の手當を支給され、それ以上は普通の技術工と異るところはない。又作業上に於ける賞罰の制度としては、半ケ月間皆勤者に對しては二工分の工賃を增し、一箇月間無缺勤のものには四工分の工賃を加へるのが普通である。これに反して、作業上不合格の者は、罰俸若くは解雇せられることもある。これらは、何れも市政府の規定した辨法に準據して取扱ふものである。小工場に於いては、日曜日も休業しないところがあるが、大規模工場では每月一日と十六日を公休日とするところが多く、又十の日を以て休日としてゐるところも時に見受けられる。最後に工會（勞働組合）の組織は、工場に依つて設置されてゐるものもあり、組織されてゐないものもあるが、大體勞資間の感情が融和してゐる工場では、工會組織の無いものが多い。

註一　『北京市工商業概況』北京市社會局刊行

註二　民國二十年、統計局の調査に依つて得た數字である。

註三　國際貿易局出版『中國實業誌、江蘇省』六〇七頁所載

第三編　地方別概要

第一章　緒言

本書の後に附した統計表は工場詳細表・工場略表・工業別概算表及び調査員自身の手によつて記錄せられた工業事業別調査表の四種の材料を根據として綜合編製したものであるが、その中、詳表・略表及び事業別調査表の三種に於ける適用方法及び範圍に就いては、第一編で既に說明を加へたから玆では贅述を避ける。地方別概算表は以下に列擧する標準によつて應用した。

一、概算表を作成するには、その土地に於ける機械工業の概況を明瞭にしなければならないが、その調査の要領を明らかにするには、先づ如何なるものを工業といひ、又如何なるものを非工業となすかを辨別する必要がある。概算表の裏面には、下記の諸事項を非工業として揭げ、調査記入を要せずと定めた。

(一) 自身には何等製品を出すことなく、單にその技術を以て他人に代つて作業をなし、これによつて生計を營む者、例へば大工・左官裁縫業・銅細工職・鍛冶屋の如きがそれである。

(二) 單に勞力のみを有し、全然製品を出さない者、例へば轎舁・人力車夫・船頭・人夫・仲仕等の如きがこれに屬する。

(三) 自身商品の製造に從事することなく、單に商品の賣買のみをなす者。

(四) 物品を顧客に供給し、その場で、或は即時に消費する者、例へば料理屋・茶館・菓子店等の如き場所をいふ。

(五) 天然に產する物品を採取し、全然加工製造を施すことなき者、例へば鑛業・土石採取業・農業・養蠶業の如きものをいふ。

二、凡そ選定せる一定地域内に於いて、機械を應用するところの工業は、その數の多寡に拘らず、各工業別に逐一調査の上記入することとした。こゝに所謂機械とは、必ずしも原動力を應用する物たるを要しないが、普通外國から輸入した機械、又はこれによつて國内で模倣製作せるもの（但し工具卽ち Tools は除く）にして、支那從來の手工業に於いて使用してゐたもの以外は何れもこれに屬する。卽ち綿織物業や絹織物業の如きは、支那に從來から存在してゐた工業であるが、舊式織機は布面の幅が甚だ狹いので、新式織機を使用する場合には、その機織であると手織であるとを論ぜず、すべて機械工業と見做した。尙ほ今回の調査に於いては更に廣義の解釋をなし、單に新式機械を使用してゐるものゝみならず、新式原料を用ひるもの、或は製造方法や製品が外國商品を模倣してゐるやうな場合でも、すべてこれを概算表の中に加へた。

三、機械使用のものであつても、次の如き狀況にあるものは、概算に入れることが極めて困難であるから、これも除外した。

一　家庭内にあつて製造に從事し、工場名や店名等全然使用しないもの、例へば、家内織布業・同靴下製造業の如きものがそれである。

二　小規模の製造を行ふのみで、工場名或は店名等を有するも、その製品が單に小賣せられるに過ぎないもの、例へば靴屋の如きは縫合機械を設備してゐるから、機械工業の定義には適合してゐるが、規模が餘り小さい爲に、外面上は大體普通の商店に異らず、これを概算表に加へる譯にいかない。

四、同一工業にして、その一部分には機械を應用し、他の一部分には全然機械を使用しないもの、卽ち染物業・精米業・製粉業等の如き工業もあり、又一部分は工場組織のもので、他の一部分が家内工業或は小賣業に屬するもの、例へば針織業・綿織物業等の如きものもある。

このやうな場合は何れも單にその合格せる一部分のみに就いて概算を行ひ、別々に見積ることが不可能なる場合はこれ等を一括して記入した。

この概算表は九月の調査方法修正後から、始めて應用したもので、九月以前に調査終了の各縣市には僅に詳細表と略表の二表があるのみであつたが、調査員の大部分は既に各地各工業の工場總數に就いて明瞭なる調査を行つて居り、或は自身で工業業別調査表を作成してゐる者もあつたので、これに依つて後から概算を行ふことが出來た。又或る一工業に屬する全工場が何れも標準に合致してゐるため全部詳細表内に記入されてゐるもの、或は標準に合致しない工場の總數に就いて調査の方法が無いやうな場合は、詳細表の材料を採用した。

然し業別調査表及び詳細表・略表に記入せる項目と、この概算表に記載せる項目との間には多少の出入があり、その中最も著しいものは概算表中の（子九）の一項である。これは本業製品の販賣地點分配に關する百分比であつて、他表中には全然無い項目である。從つて各調査員に對して出來得る限り補塡するやうに通達して置いたが、尙ほ遺漏の點あるを免れなかつた。

又時としては某鎭に詳細表の標準に合致する工場が存在する爲、原定計畫に基き調査に赴かしめたところ、全縣内を通じてその他の機械工業が全く無い場合、勿論概算表の作成は出來ない。しかしこの外に少數の小規模工場が存在しないと確認出來ないが故に、かくの如き僅か一鎭の統計を以てその縣全體を代表せしめるといふやうなことは出來ない。從つてかゝる場合に於いては、縣名の後に鎭名をも註出してこれを明らかにしたが、實際上は例へば鳳陽縣に於ける蚌埠、獲鹿縣に於ける石家莊或は寧河縣に於ける塘沽・漢沽の如く、當該縣全體を通じての代表的工業と見ても差支のないものである。

こゝにこの統計表中の各項目について、多少說明することにする。

一、販賣地點分配に關する百分比は、大部分その土地に於いて同工業を營む者の見積を根據とした。尙ほ製造工場がその製品を上海・天津或は漢口の商人に賣渡す場合には、これに依つて上海・天津或は漢口を販賣地と認めて計上した。然し事實上はこの製品を買入れた商人は更にその商品を他地方或は外國へ轉賣してゐるかも知れないが、然し調査員は他の各業についても詳細に調査せねばならない譯であるから、一々この商品の實際の最終的販路を追求する暇が無かつた。從つてこの表中の百分比は決してその商品の最終的分配を代表してゐるものではない。

二、本書所載の統計表は何れも詳細なる審査を加へたもので、苟くも原料と製品、作業機と製品、製品と製品價格、職工と作業機等の數字が相互に合致しないやうなことがあれば、必ず各調査員をして再度調査せしめた。尤も各地の製品は、その大小や品質の差が甚しくて到底比較にならない場合も多く、又作業機にしてもその性能に良否があり、型式に新舊があつて、これ亦相違が甚だしいから、事實上到底一律に論ずることは出來ない譯である。更に又たゞ一種の原料から多くの製品を製造してゐる場合には、表には單に一、二の主要なものゝみを記入するに止めてあるから、普通兩者間の比例は一致しないとことになる。

三、時としては、第三表に主要製品の數量があるにも拘らず、第二表に於いて製品の總價格の概算が出來なかつた場合もある。この原因としては、假令主要製品の價格の概算が出來ても、これを以て製品全體を代表するに足らないやうな場合とか、或ひはその主要製品の價格さへ概算することが不可能な場合等に於いて、止むを得ず缺如したまゝに殘した。

四、概算表に於ける分類は、詳細表のそれとは必ずしも同一ではない。何となれば詳細表に於ける分類は、中國經濟統計研究所の詳細なる審査の結果、その表中に記入せる狀況を根據として、明細なる分類を行つたが、これに反して概算表の分類は調査時に於いて行ふから、どうしてもその土地の習慣に順應せざるを得ない。即ち一例を擧ぐれば、詳細表中の機械類製造工業は、各工場に於いて製作せられる機械の種類について、極めて詳細な分析を行つてゐるが、調査員が實地に見積る時に際しては、到底詳細表の如き詳細なる分類は不可能である。更に又綿織物業と染物業とは本來全然別個のものであるが、一工場に於いてこの二者を兼營してゐる場合詳細表の分類中にあつては別に綿織兼染煉業なる名稱を設けてゐる。然るにその土地の工

商界では、これと綿織物業とを混同することも往々あり、時には染織業なる名稱を以て特に區別することもあるとは言へ、綿布產額の概算に際して、これを別々に計算することは極めて困難な場合が多い。この外にもこれに類する事が甚だ多いが、調査員に於いて概算を行ふ場合には、たゞその土地の習慣に從ふ外に適當な方法が無い。

五、 詳細表中には鑄造業・機械業及び鑄造鐵工業（卽ち鑄造と共に機械製造をも兼ねるもの）の三種に分類してゐるが、概算表では、後の二種類は區別出來なかつた場合が多く、結局一律に鑄造鐵工業と呼んでゐる。從つて第二、第三兩篇に於ける統計中、業名の同一なものでもその內容は必ずしも同樣でない。

六、 詳細表中に記載せられる工場は、その規模に於いて當然比較的大なるものばかりであるから、從つて原料・製品及び作業機等の種類も多い譯であるが、概算表のものは單に小工場ばかりであつたり、或は大小混同して記入してあつたりするので上述の各項目の分類も比較的簡單であり、且つ時には詳細表とは同一でない事もあるが、これ亦事實上の制限を受けた結果である。

七、 地方の工業種類が餘りに多い場合は、その中の重要なものを選んで概算を行つた。大體に於いて特殊工業を除く外、概算表の中に加へたものは、豫め指定された五十餘の工業の範圍內に於いて行つた。

八、 ある地方は元來某工業を以て著はれてゐるにも拘らず、目下のところ閉鎖してゐる爲、結局概算不可能の場合もあつた。例へば、徐州の卵粉工業や鎭江の製油業の如きがこれである。或は又一般工業で未だ閉鎖する迄に至つてゐないものでも、概算の出來ない場合もあり、斯かる際には已むを得ず割愛した。

九、 ある縣が元來某工業によつて特に著名でありながら、統計表の中に現はれた製品の總額が極めて少ない場合がある。これはその工業の大部分が機械工業でないか、或はたとひ機械を使用してゐても家內に於いて製造せられてゐるか、又は小規模の小賣を行ふに過ぎないやうな場合、概算不可能のため表中に記入しなかつたからである。

十、 本書の統計表は各地方の工業概況を表示する爲のものではあるが、上述の各原因からして、必ずしも完全なる代表性を有するものと見做すことは出來ない。例へば各地方工業の資本・勞働者數及び工業製品の總價格の如きは、この理由からしてその地の資本・勞働者或は製品の總數とすることは出來ない。

十一、 調査員が出張して調査を行ひ概算表にも一應記入したにも拘らず、實際は機械工業でなかつたため全部削除した所が數縣あつた。卽ち四川省の內江の如きがそれである。

十二、 本書の統計表は總計百五十縣市を包含してゐるが、地方概況略說を編製するに當つては、これらを一々記入出來なかつた。從つて、その中の重要なる市縣合計十四ケ所を選び、工業地方概況調査表の項目を斟酌して、次の順序により說明を加へることゝした。

（一）位置及び交通狀況
（二）市場概況
（三）勞働者の狀況
（四）金融狀況
（五）燃料及び動力

第二章　南京

一、位置及び交通狀況　南京は揚子江の下流に位置し、東は鎭江を距ること四十五哩、西は蕪湖を距ること五十哩、古來金陵・秣陵・建業・建康と稱してゐるのは皆この地の事である。三國の孫吳（孫權）、六東朝の晉・宋・齊・梁・陳、五代の南

唐及び明の初期は、いづれも嘗てこの地に都を奠めた。江寧と言ふ名稱は南唐に肇り、その後別に改名したり或は舊稱に復活したりしてゐたが、清代迄は依然として江寧と稱して府治が置いてあつた。民國元年臨時政府がこゝに成立したが、一年餘りで又府を廢して縣を置き上元に合併せられるに至つた。民國十六年國民政府がこの地を首都と定め、同十七年には南京を特別市區に制定し、城内外に從來からあつた區域及び八卦洲を暫くその境界とした。即ち西南には大勝關・江心洲一帶を、東北には烏龍山一帶を編入し、一方堯化門より上方門迄は城壁を以てその境界とした。大江を前にし鍾山を背にして、實に古人の所謂「虎踞龍蟠」の語も決して虛語ではない。

民國十三年の調査に於いては、城内の全人口合計三十九萬八千餘人であつたが、同二十五年春季の調査によれば、全市の人口は既に七十二萬六千餘人となつてゐる。

昔は城内の街路はすべて狹隘であつたが、近年市政府の鋭意改革の結果、各方面の道路は隨時修築擴張せられ、更に子午路中山路等を以て全城内を縱横に貫通して交通の便利を計つた。市内に寧垣鐵道がある。これは又南京市鐵道とも稱せられ、俗に小火車と呼ばれてゐり、中正街より直接下關に達してゐる。又バスも下關と夫子廟との間を往復してゐる。この外に民間の貸自動車業者があつて、城内外に於ける乘客運送を營業し、又馬車や人力車の數も極めて多く隨時隨意に雇ふ事が出來る。以上は南京市内に於ける車輛交通の狀況である。市外交通としては、揚子江を隔て浦口の商埠地に對し、津浦鐵道は該地を終點として毎日北方行の列車がこゝから出發し、北京に直通してゐる。北部の儀鳳門（興中門）を出れば即ち下關で、滬寧鐵道の終點となり、毎日數回南京・上海間を往復してゐる。該鐵道の沿線には武進・無錫・蘇州があるが、これ等は或は盛んな商業の都會であり、或は工業發達の地區である。更に内外各汽船會社の船舶は定期に上海・漢口間を往復し、毎日南京へ寄港するから、これによつて乘客や貨物を運送する事が出來る。

公路即ち自動車道路は近年鋭意その建設に努力中で、既に竣工を見た縣道には中山門より湯山に至る京湯路があり、麒麟門より棲霞山に至る麒霞路がある。省外に延びてゐる公路には南京市區から安徽省蕪湖に至る京蕪路、浙江省杭州に至る京杭路がある。その他建設中或は建設準備中のものには、京陝幹線の浦烏段（浦口—烏衣）、京魯幹線の浦天段（浦口—天長）、京滬幹線の京鎭段（南京—鎭江）がある。この外京桂（南京—雲南—西康）、京藏（南京—西藏）等の如き各線も計劃中である。以上は南京市と他地方との水陸交通概況である。尙ほ航空會社の滬漢線は毎日上海・漢口間を往來してゐるが、途中南京にも着陸し、上り下り共に切符を發賣してゐる。郵便には總局竝に支局が市内各所に設置せられ、航空郵便や速達の取扱も行つてゐる。又電報局は城内に三ケ所設けられ、隨時發信に利用する事が出來、又電話は市内市外共に通じ、長距離電話は直接上海その他の地に通じてゐる。無線電信局も二箇所設けられてゐる。以上は南京市及びその附近に於ける交通及び通信の一般狀況である。

二、市場概況　南京市に於ける市場の狀況は、城内と城外との二ケ所に分けて說明するが便利である。先づ城外にあつては下關が最も繁華である。その位置は揚子江々岸に位し、京滬鐵道の終點をなし、對岸は江浦縣浦口鎭で津浦鐵道の起點である。故に下關は南北二大鐵道の境界にあり、兩鐵道聯絡の要點をなしてゐる。すべて北方から來る貨物や、或は上海・漢口から運ばれる貨物は、何れもこの地を集散地とするので、從つて市場の狀況は相當に活潑であるが、たゞその貨物は多く當地を通過するに過ぎないもので、完全にこゝで消費せられるものでは無く、又道路もあまり多くない爲に、多少その間に大商店が存在してゐるとは言ふものゝ、實際上は未だ充分なる發達を遂げてゐない。

汽船の碇泊する所は官設埠頭の外に、怡和・太古・美最時・招商・日清等の各埠頭があつて、こゝで集散されるものゝ内輸移出向の土地の物產品では農產物が最も多く、就中米・麥・豆及び豆粕・落花生及び落花生油・瓜子・胡麻・大麻・冷凍卵・牛肉等がその主要なものである。次に工業品としては從來南京緞子・雲錦等が極めて有名であつたが、近年その販路が衰落し製品が減少したので、輸出される數も甚だ少い。一方輸入せられる外國品としては、石油・顏料・卷煙草・ガラス・紙・海產

物・砂糖・布疋・西洋藥品・金屬製品等が主要なもので、その他零細な物品も亦少からざる數に上る。又國產品にして、他省より南京市及びその附近各地へ移入せられる物は、必ず一應當地に集中せられて後再び各地に運ばれる。從つて運送業も亦その需要に應じて出現し、現在下關に於ける運送會社は全部停車場附近一帶に見られ、大中華公司以下三十有餘を算してゐる。

次に城內の市況を見るに、最も繁華なのは南門一帶の府東街・三山街等で、現今では中華路及び承恩寺街等が大商店櫛比の地區で、西洋雜貨・呉服太物商・兩替業等が最も著しい。この外花牌樓は文具書籍業の集つてゐる所であり、北門橋一帶及び國府街・鼓樓前附近の各街巷も漸次繁昌しつゝあり、又白下路・中正街・益仁巷等は銀行業の集中地點である。貢院街・夫子廟・桃葉渡等一帶の地域は娯樂場・遊戲場及び小飲食店等が蝟集してゐる場所である。

要するに南京市は首都と定められて以來、道路建設工事が極めて進歩してその交通も非常に便利となり、各種の機關が櫛比して、あらゆる貨物は需要に應じて輻輳しつゝある狀況にある。從つて市場の狀況が年を逐つて殷賑に赴くのは蓋し自然の趨勢である。

三、勞働者の狀況　南京は本來工業區域に屬するものではない。從つて新式工業は、近年當地が首都と定められて以來、始めて萌芽を見たものであり、その中では印刷業・煉瓦・瓦業等は比較的に發達してゐる。その舊式工業としては、元來雲錦や緞子製織業が最も著名であつたが、近來新式綢緞の賣行が極めて活潑であるから、この種舊式織物業は既に淘汰されて、その職工も大いに減少するに至り、僅かに家內織布業のみが尙ほ到る處に存在し、靴下製造業も間々これを見受けるといふに過ぎない。一般に馬車や車を御するを以て生業とする者或は日傭人夫等の如き者は非常に多い。調査の結果に據れば新式工業の中にあつては、製粉業が比較的規模の大なるものであり、機械による煉瓦製造業及び印刷業がこれに次ぎ、鐵工業と精米工業とは比較的小規模のものが多い。この外石鹼・製氷等の工場は何れも中小規模組織のもので、又舊式の絹織綿織工業の如きはすべて家內工業の性質を有してゐる。

各方面の職工の工賃は、平均して印刷工場が最も高く、個人で最高給を得る者は製粉工場の技術工頭で、約八十元から百元の給料を取るものがある。その次が五、六十元、普通の職工は十元乃至二十元であるがこれには宿舍や食事は給與されない。次に印刷業の職工中技術者には每月六十元を得る者があり、次が四十元で、普通の職工は十五元乃至二十元であつて、更に宿舍及び食事を支給せられる場合が多い。これ等はいづれもその工場の規模の大小に依つて、工賃にも自ら高低の不同が生ずるのは勿論である。煉瓦及び瓦製造工場は普通請負が多く、先づ職工頭を除く外の日傭人夫等の工賃は、生瓦又は生煉瓦の數量を以て計算し、各人は一日普通四角乃至五角を得てゐる。又鐵工業に於ける職工頭は每月約三十元乃至四十元で、普通の技術工は二十元前後を與へられ、いづれも食事及び宿舍を支給せられてゐる。その他例へば製氷業や卵粉業の職工等は普通約二十元乃至三十元、精米職工は給料約十元の外に別に食事や宿舍もついてゐる。手工業の職工の所得は、每月大體十元乃至二十元位が普通である。この他自動車運轉手・挽馬業者、人力車夫等では、每月の所得は運轉手が最も多くて大約三十元前後であり、挽馬業者は幾分少い。人力車夫は元來江北地方の泰興・鹽城一帶の出身者が多く、その數は冬季が夏季より比較的多い。これは夏季農繁期には鄉里に歸つて農業に從事するからである。平時每日の收入は多い者で約一元前後、少い者では大體四、五角見當である（人力車賃借料を差引いた計算）。又その生活狀況については最低每月一人當り約十元乃至十五元を必要とする。卽ち南京が首都となつて以來、急に家賃が暴騰し、物價も多くこれに隨つて騰貴した。從つて衣食住三者の中糧食が近年幾分低落した外、その他一切の物價はいづれも從前に比較して高漲し、就中家賃に至つては奠都以前に比較して二倍前後の騰貴を示してゐる。以上は南京市に於ける近年の勞工狀況の大略である。

四、金融狀況　南京は支那の東南部の一大都會ではあるが、金融機關は從來あまり發達してはゐない。洪秀全・楊秀清（太平天國）以前にあつては、僅かに山西商人にして、票號（爲替及び金貸業）を營む者があつたに過ぎない。同治年間に始めて錢莊兩替店の設立を見たが、然しその資本は極めて薄弱で、規模も亦狹小で、到底他地方の同業者と爲替取引をなすことは不可

能であつた。その後幾何もなく鎭江の錢莊組合が南京に進出して營業を始め、こゝに於いて他地方の錢莊と相互に取引することが出來るやうになり、前清末期には錢莊業は隆盛を極めるに至り、大同行（匯劃莊）が三十餘軒、小同行（母換莊）は百軒以上の多きに及んだ。

その前後より銀行も漸くその萠芽を見せ、大清銀行・交通銀行等が相繼いで設立された。民國元年以來中國・江蘇・上海・金城・鹽業・大陸等の銀行がいづれも下關に事務所を設け、その後も引續いて東南銀行等二・三の銀行が設立されたが、驢齊・盧の衝突（譯註　民國十三年の江蘇督軍齊燮元及び浙江橋軍盧永祥の浙江の地盤爭ひ）が勃發した結果、これ等金融業者の蒙つた影響も少くなかつた。國民政府の成立後は上海の銀行業者にして南京に來て活動するものが陸續として出現し、その結果一時分行を設立した者が二十ケ所に上り、錢莊業も漸く舊態を恢復した

次に民國二十五年南京に所在する各銀行及び錢莊を列擧して參考に供する。

中央銀行（建康路）　中國銀行（大行宮口）　交通銀行（中正街）
上海商業儲蓄銀行（建康路）　大陸銀行（四象橋）　金城銀行（中正街）
鹽業銀行（中正街）　中南銀行（黑廊大街）　中國々貨銀行（新街口）
中國實業銀行（中正街）　國華銀行（白下路）　四明銀行（楊公井）
江蘇銀行（建康路）　浙江興業銀行（白下路）　中國農工銀行（白下路）
中國農民銀行（戶部街）　市民銀行（坊口）　中國墾業銀行（土街口）
聚興誠銀行（新街口）　中國通商銀行（新街口）　郵政匯業儲金局（大行宮）
四行儲蓄會（白下路）　河南農工銀行（富民坊）

次に錢莊には庚源・通仁・泰昌記・謙益・福利・順康・福大・聚和・頤康・通和・保餘・寶餘・怡康・厚康・愼康・長和・勤康・榮和・德餘・德和・益大・通裕・裕豐・同和・慶豐・同興等の二十餘ケ所あり、各處に散在してゐるが、中でも上新河及び水西門大街の二つの地點が比較的に多い。この外質屋が十餘軒あるが、これ亦社會上に於ける金融と相當關係を有するものである。

上述の各種銀行のうち、中央銀行が國立銀行であるが、これ以外では中國銀行が國庫を代理し得る。その他の各銀行の業務では預金・擔保・貸付・貸越・貯蓄・同業者間の取引・爲替等を行ふのが普通であるが、たゞ中國實業・國華・浙江興業等の銀行に於いては、信託業務をも併營し、又市民銀行は市金庫を代理してゐる。各銀行中紙幣の發行權を有するのは中央・中國・交通・中南・中國實業・四明・中國墾業・通商・浙江興業等である。又市內に於いて流通してゐる硬貨には孫頭（譯註　孫文の顏を刻むもの）、袁頭（譯註　袁世凱の顏を刻む）の二種が多く、その他北洋（譯註　光緒年間北洋大臣の鑄造せしもの）・造幣（譯註　天津造幣廠の出した銀貨）・大清（譯註　光緒時代北京戶部の造りしもの）・鷹洋（譯註　メキシコより輸入せる銀貨で表面に鷹を刻む）等も亦相當多く流通してゐる。この外補助貨幣の種類には雙角（二角）と單角（一角）とがあるが、普通市內で多く使用せられるのは雙角の方であり、又特に習慣として民國八年に鑄造せられたものが尊ばれる。銅元は單枚がよく通用し、雙枚は浦口では通用するが南京市內に於いては全然通用しない。

利息は舊曆の三・四月と九・十・十一・十二月等が最も高く、夏季がその次で、正月・二月は最も低いといふ。

五、動力及び然料　南京市の工業は從來手工製造のものが多かつたが、新式工業も近年漸く發展して來た。その種類としては印刷業・煉瓦及び瓦の機械製造工業・製粉業・冷凍卵業・精米業等があり、その他各種の小工業の數は少くないが、大部分は小規模組織で、これに必要とする動力もあまり重要なものはなく、現在各工場に設備せられてゐる動力は大半電氣モーターと石油機關との二種で、蒸氣機關や瓦斯機關等を使用してゐる所は電氣會社以外には餘りない。各種工業中印刷業の如きは電氣モーターを使用する者が多く、鐵工業・精米業・煉瓦製造業及びその他零細な工業には多く石油機關を使用してゐる。卽ち規

模の比較的大なる製粉工場及び水道會社に於いて、その原動力として約六、七百馬力までを必要とするものは、すべて石油機關を使用してその運轉を行つてゐる。

蓋し南京市は上海より相當離れてゐるにも拘らず、水陸の交通が極めて便利で、燃料を運輸するにしても、朝上海を出發すれば夕方には南京に到着し得る。從つて各工場は多く柴油を使用して經費節約を計つて居り、石油を使用するものは單に煉瓦製造の燒窯で、毎年中興・開平などの塊炭一萬噸餘を必要とする位である。この外で石炭を比較的多く使用するものとしては鐵道と船舶の二種を擧ぐべきであつて、その使用量はまだ見積りを行つてゐないが、少からざる額に上るであらうと思はれる。

第三章　上　海

一、位置及び交通狀況　上海は、揚子江が海に入らんとする所に位置してゐる爲に、揚子江或は海岸近くを航行する船舶はいづれもこの地に碇泊し、又陸上の運輸としては京滬及び滬杭甬の兩鐵道を有してゐる上に、近年又京滬・滬杭等の公路建設を見、その他水陸の電線・長距離電話及び航空便等に至るまで、悉く具備せざるものなく、從つてその交通の至便なること實に支那全國に冠たるものがある。

然してこの數年來、毎月の平均氣溫は常に三十四度乃至八十四度、濕度も七十二度乃至八十八度であつて（註二）、これは一般工業に丁度適し、南支那の如く氣溫が餘りに高く濕度も高過ぎて工場設立に適しないといふが如き自然的現象は、全くない。

上海の重要工場地帶は、元來楊樹浦一帶で、現在のところ工場數は依然としてこの地區に設立せられてゐるものが多い。然し閘北及び曹家渡も工業が甚だ發展して居り、閘北一帶は上海事變の戰禍に遭つて工場の損壞せるものも少なくないとは言へ、この二、三年以來その後の復興振りは頗る目覺しきものがあり、今尙上海に於ける主要工業區域の一たるを失はない。高昌廟は製造局や造船廠の所在地であるが、工業の勃興は最も早かつたにも拘らず、發展が極めて遲く今尙ほその工場數は餘り多くない。規模の比較的小さい工場は却つて城外附近の地方に集中し、徐家匯とか日暉港一帶は別に一工業區域を形成してゐるが、勿論工場の數に於いては到底滬東・滬西・滬北の三區域には及ぶべくもない。

二、市場概況　民國十八年世界的經濟恐慌が現出したが、支那は貨幣本位が異る爲二十年九月始めてその影響を受けるに至つた。即ち第一にその衝に當つたものとしては上海の製糸業者がある（註三）。生糸は國外の販路が極めて重要であるが、外國の商業が衰微しその購買力が薄弱となれば、支那生糸の販路は甚大なる影響を受けることゝなる。その後一般の商工業も漸次不景氣に陷り、地價も亦百分の二、三十に下落した。紡績業は、元來支那及び上海の工業中最重要の地位を占めてゐるが、世界市場に於いては棉花が高く綿糸が安いといふ現象を呈してゐる上に、滿洲地方に於ける綿布の販路を失ひ、從つて蒙つた打擊は殊に甚だしいものがあつた。昨年（民國二十四年）あたりは、各工場共人員陶汰の一途を取らざるを得ない狀態で、外棉の輸入も亦大いに減少し、僅か民國二十一年の輸入總額の半數に過ぎなかつた。これから見ても當時上海市場が如何に不景氣であつたかゞわかる。

併しながら、同時に新式工業も發展し、例へば護謨工場の如きも漸次增加して遂に四十餘の多きに達し、ベークライトの如きも舶來の原料を使用してはゐるが、支那商人の手によつて直接工場を數ケ所設立して、盛んにその製造に從事してゐる。これより先上海の製糸業は、中孚絹廠を除く外は何れも繰糸のみで紡糸は行はなかつたが、最近二、三年以來、屑糸を利用して毛糸或ひは綿糸と交織してゐるものもある。

統計について言へば、民國十八年度の市社會局調査では、本市の內外工場總數は大小合計一千七百八十一に上り（註三）、こ

の外に別に五、六百工場が見積られてゐるが、その工場名や所在地等は調査を行ひ得なかつた（註四）。民國二十年の中國經濟統計研究所の調査結果によれば、支那系工場は合計二千餘に上り、その中、工場法の適用を受けるものは六百七十六工場であると言ふ事であるが（註五）、實業部の見積も大體これと同樣である。民國二十五年になつてから、研究所が調査したる所に據れば、上海の工場總數は既に四千に及び、工場法の適用を受けるもののみでも千二百二十九ケ所に達してゐるといひ、市社會局に於ける簡單な普通調査の結果も同じく四千前後であつた。卽ちこの兩三年以來大工場は丁度二倍の增加を示してゐるのでこれより見るも上海の工業が依然として發展の過程にあり、かの世界經濟恐慌の影響により物價低落の爲、經濟上の退化を來してゐないといふことを察知することが出る。その原因は種々あるが、關稅稅率の增加により、工業が保護を受くるに至つたことがその一である。舶來品の外國に於ける市價が大いに下落してもこれを銀に換算するに際しては、その低落の程度が大いに輕減される。例へば米國の卸賣物價指數は一九二六年を一〇〇とすれば、一九三三年二月には六〇に落ちてゐる（註六）。然るに上海に於ける輸入物價指數は一九二六年以來引續き增加して、一九三一年（卽ち民國二十年）には殆ど一六〇に達してゐる。次いでその翌年は常に一四〇前後で、二十二年には多少低落したとは言へ尙ほ一三〇から一四〇までの間であるから、一九二六年の基準指數に比較すれば依然として高く、一般の物價も亦一〇〇から一一〇までの間を示してゐる譯である。次に上海の工場に於ける製品は、製紙業・紡績業製品以外は國外に輸出せられるものが極めて少數で、從つて輸出物價が世界市價の影響を受けて八〇前後に低落しても（註七）、上海の工業は別に大した關係は無い。これがその第二の原因である。

然し商業の方は衰落が幾分甚だしく、一概にこれを論ずる事は不可能である。

三、勞働者の狀況　上海に於ける職工の總數は、民國十八年、市社會局が千七百餘工場に就いて調査し、尙六百餘工場について見積計算を行つた結果に據ると、總計二八五、七〇〇人で、その內男工が八四、七八六人、女工は一七三、四三二人、少年工二七、四八二人であつた（註八）。次いで民國二十年度に中國經濟統計研究所に於いて、二千一工場について調査を行ひ、その中から原動力を應用してゐる工場及び職工數十人以上の工場千六百六十を選擇して整理したる結果、職工總數二一二、八二二人、その內男工七二、三一六人、女工一一七、三三四人、少年工一三、七六一人、見習工九、四一一人であつた。今次調査の結果は、時間に制限された爲、市縣別に職工總數を統計する餘裕に惠れず、その上調査を實施した工場は工場法の適用を受けるものゝみに制限したから、見積表中に記載した工場は更に少い。

次に勞働者の生活程度は、上海は他の奧地より遙かに勝つてゐるが、單にこれに就て述ぶれば、民國十五年の生活費指數を一〇〇とすれば、民國二十年は一二五・九となつてゐる。その內の衣食住三項の增加は僅かに七％或は八％であるが、これに對して燃料費は三三％の增加を示し、雜費が八七％で、平均四分の一の增加を見てゐる。然し幸にして民國二十二年には衣食の兩項がいづれも安くなり、燃料や雜費も同樣下落を示したので、平均して生計費指數は一〇七・二に復し、民國十五年度の基準との差が幾何もなくなつた（註九）。

工賃率は各工業に依つて異るのみならず、同一工業に於いてもその高低は一致してゐない。次に上海市社會局の民國十八年度調査の結果による數字に基き、その主要工業を選んで一日の平均工賃率を揭げて參考に供する（註一〇）。

當時男工は每日五角四分乃至一元二角六分で每月約二十餘元を得て居り、女工は二角四分乃至八角九分、少年工は二角乃至四角二分の日給を手にしてゐたが、近年の工賃は幾分從前より低下し、男工は每月僅か十餘元に減少した。

上海の勞働組合（工會）は他の地方より多く、民國十八年市社會局が失業者の調査を實施した際、列擧した各工業の勞働組合は、總計百八十五に及んだ（註一一）。然しその後總工會が解散したので、この種の團體も漸次減少した。

勞資關係は市社會局の調停を經て近時著るしく好轉を見せ、罷業の如きも既に從前より大いに減少してゐる。上海は各地方人の雜居してゐる所であるが、職工だけは江蘇・浙江兩省出身の者が大多數を占めてゐる爲に、武漢地方の如く統制に困難を感ずるやうなことはない。上海の工場がかくも多く、武漢に設立される工場の少いのは、勞工の性質の不同がその主要原因を

なしてゐる。

上海の主要工業に於ける平均工賃率（民國十八年、社會局調査）

業別	男工	女工	少年工
製鑄造材	〇・六二元	—	—
機械及金屬製品	〇・七七	—	—
造船	〇・七八	—	—
硝子	一・〇二	—	—
石鹼	〇・六七	〇・三二元	〇・三二元
燐寸	〇・五四	—	—
琺瑯器具製糸	〇・八〇	〇・二四	〇・二〇
綿糸紡績	〇・五五	〇・四二	〇・三二
絹織	〇・七三	〇・五四	〇・三三
綿織	一・二六	〇・四五	〇・三〇
針織	〇・五五	〇・八九	—
漂染	〇・七二	〇・五五	〇・三六
皮革	〇・八二	〇・六三	—
製粉	〇・四七	—	—
搾油	〇・五六	—	—
卵粉	〇・六〇	—	—
煙草	〇・六二	〇・四六	—
製紙	〇・八二	〇・五八	〇・四二
印刷	〇・六六	〇・三五	—
	一・二三	〇・八三	〇・四二

四、金融狀況　上海は支那金融業の中心をなし、內外各銀行は何れも皆この地に集中してゐる。殊に國民政府が南京に都を奠めてより以來、中國銀行及び交通銀行の二大銀行がその總管理處をこの地に移したのを契機として、私立各銀行も漸次その本店を北部より上海に移し、一方新に中央銀行及び票據交易所（譯註　手形交換所）の設立を見た。從つて上海は金融上至便なることに於いて全國第一に推される。

近年奧地方面にあつて農村が續々と破產し、その結果遊資はすべて上海一ケ處に集中せられる爲、工業の發展に對しては便利となつた譯であるが、惜むらくは工業投資の方法が極めて舊式で、僅かに工場及び貨物等を擔保とするか、或は銀行や錢莊に於ける當座貸越があるのみで、この種の借款方法は、期限が極めて短いため、工場の設備擴充の用に供すること能はず、從つて工場發展の趨勢は小規模工場の增加のみに偏してゐて、大工場の設立は極めて困難な狀態である。

上海の商工業に於ける主要貨幣は元來申規元（上海銀兩）で工場の資本金や製品の價格は多くこれを單位としてゐたが、民國二十四年銀兩を廢止して以來一律に國幣を以て計算する樣になつた。海關に於ける輸入稅は海關兩で徵收し、補助貨幣には大

洋紙幣・二角小洋及び十文銅元の三種があり、他の地方に比較すれば割合に統一されてゐる。

五、燃料及び動力　上海の工場は電力を使用するものが大多數を占め、紡績工場・製粉工場等から、小は一般小規模工場に至るまで、何れも電力の方が經濟的である點から好んでこれを使用してゐる。例へば或る種の機械を運轉しようと思へばスイッチ一つで直ちにそのモーターが動き、作業を中止する場合は何時でも隨意に停止する事が出來るのみならず、これに要する電氣料は甚だ低廉であるからである。即ち佛租界電力公司に於いては三百キロワット以内は一キロワットにつき銀兩四分、三百キロワット以上になれば一キロワットにつき銀兩三分五厘の料金を徴收してゐる(佛租界及び共同租界の上海電力公司に於いて規定してゐる電氣料金は、元來銀兩を單位としてゐるのであるが、然し銀元二割八分五厘引にて受取ってゐる)。その他の三大公司に於ける電氣料の標準は次に表示する。

會社別	一五〇キロ以内	一五〇キロ乃至二五〇キロ	三五〇キロ乃至三五〇キロ	三五〇キロ以上
上海電力公司	〇・〇四五兩	〇・〇四一兩	〇・〇三六兩	〇・〇三〇兩
華商電氣公司	〇・〇二元	〇・〇五五元	〇・〇四八元	〇・〇四二元
閘北水電公司	〇・〇七〇元	〇・〇六三元	〇・〇五六元	〇・〇四六元

浦東・吳淞・眞茹等の電氣會社は何れもこの華商電氣公司と閘北水電公司へ電流を送つてゐるが、その料金も大體に於いて右表と同一である。上海電力公司が先般發表した數字に據れば、該公司に於いて一ケ年間に出して居る電力は六九五、一七三、四〇三キロで、この數は英國の商工業都市たるマンチエスター・リヴァプール・バーミンガム等を遙かに超過してゐる。この一事を以てしても、上海に於ける電力使用量が如何に多いかといふことがわかる。

石炭を使用してゐる工場は、調査の範圍内には約三、四百工場あるが、これを原動力として使用してゐるものとしては、例へば製糸工場に於いて蒸氣機關に應用し、その動力を供給する際同時に煮繭用の湯を沸かすに利用してゐる位のものであるが、然し此處で使用せられる石炭は皆低級品で、淮南や大通等の種類が大部分である。硝子工場に於いては多く日本の次島炭を使用してゐる。この石炭は相當高價ではあるが、原料を熔解するのに頗る適當してゐるからである。鑄造工場ではコークスを使用し、鐵工所は中興炭を以て鍛鐵用にしてゐる。この外漂染・琺瑯器・石鹼製造等の工業に於いても亦石炭を燃料としてゐるが、動力に直使用してゐない。各工場に於いて使用せられる石炭は上述の諸種の外開平・華東・長興・撫順・日本・安南等のものもあり、いづれも消費される額は少くないが、就中開平炭が最も多い。

註一　『上海市統計』第二十二表

註二　『上海繅絲業』中國經濟統計研究所出版、英文

註三　『上海之工業』

註四　『上海之工資與工作時間』

註五　『上海之工業化』中國經濟計研究所出版、英文

註六　Kemmerer "On Money" 五二頁

註七　上海各種の物價指數は何れも民國二十二年十二月號の『上海物價月報』所載のものによる

註八　『工資與工作時間』三四頁

註九　註七に同じ

註一〇　『上海之工資與工作時間』

註一一　上海市社會局『十八年度業務報告』

第四章　青　島

一、位置及び交通狀況　青島は山東半島膠州灣を扼する一海港でその背後に山を控へて氣候も極めて溫和である。青島の正確なる位置は北緯三十六度四分、東經百二十度十九分で、東北方には即墨縣、西南は日照縣、西北は膠縣に接し、東北は黃海に面してゐる。港內は水深が深くて、而も一年中凍結しないから海運が阻害されることもなく、誠に北支那の良港といふ事が出來る。青島から天津までの距離は四百七十五海里で約五十九時間を要し、上海までは三百三十五海里で四十二時間、芝罘は二百三十九海里で約三十時間、海州は九十六海里で大體十時間を以て到達し得る。又膠濟鐵道は山東省の中央部を橫斷し、濟南を經由して海口に達してゐる。相距ること三百九十三・二四粁、この鐵道を利用すれば十一時間にして達する事が出來る。かくの如く海陸の交通極めて至便にして、その地理的條件の優越せるは、上海に對して多少の遜色を認め得るのみで、現狀より觀察すれば、直接天津・廣州等の大都會とその美を競ふものである。而も日・獨兩國人が前後して開發に努めた結果、開港以來今日まで僅々三十餘年にして、商工業の發達は實に目覺ましい勢を示した。

青島に於ける工業地帶は市區北部の滄口・四方・臺東鎭一帶で、華新紗廠・四方鐵道工廠及び日本商人經營の公大・富士・寶來・大康・內外・隆興等六大紡績工場の如きもすべてこの地帶に集中してゐる。

二、市場概況　民國十一年以前に於いては、青島は獨逸及び日本の經營するところとなつてゐたため、商工業の實權はすべて外國商人の手に握られ、而も支那商人にして事業に投資してゐる者の數も少なかつた。民國十一年支那が青島の主權を接收してから、投資する支那商人の數も漸次增加し、工場數を單位とするならば、華人經營の工場數は既に外國系工場數を少からず超過してゐる。即ち青島市社會局の民國二十一年度調査に據れば、青島に於ける外國系工場數は總計四十九工場で、華人經營のものは既に百二十五工場の多きに上つてゐるといふ。かくの如き目覺しい進步を示してゐることは、以て自ら慰むるに足るものではあるが、惜しい事には支那系工場はいづれも資本が極めて薄弱な爲に、到底外國系工場と競爭し得る力はない。即ち社會局が同年に調査せる結果を見るに、支那系工場の資本總額は、不明の七工場を除いて約千七百餘萬元であるが、これに對して外國系工場はこれ亦九工場の未詳の分を除いて、七千六百餘萬元の多きに達して居り、實に支那側の四倍以上の數字である（註一）。かくの如き巨額の資本を擁して、以て市場を壟斷してゐるから、支那工場の發達の容易でないのは當然で、單に紡績工場のみに例を取つて見ても、全市七工場の內六工場は日本人によつて占められ、その製品は廣く山東全省に販路を有するのみならず、河北の滄縣、江蘇の徐州・宿縣に迄その手を延し、又青島の需要する綿布も亦多くは滄口・四方等の日系紡績工場より供給せられるから、國外に流出する正貨の莫大なるは推して知ることが出來る。然しながらこの數年來、支那商人の努力の跡も亦抹殺することの出來ない實に驚くべき成績を收めつゝある。

最近數年來青島に於ける商工業の發達狀況を觀察するに、表面上は甚だ活況を呈してゐる如く見えるが、實際は各地農村が破產して人民の購買力が極めて薄弱となり、加ふるに滿洲事變以來滿洲の主要販路を失つた結果、その製品の賣行惡しく、市場も次第に疲勞の色を見せてゐる。

三、勞働者の狀況　青島には各種の工場が林立し、實に工業が全市の大企業となつてゐる爲に、これに從事する勞働者の數も甚だ多く、民國二十二年一月の市社會局の調査に據れば內外各工場に於いて各種の業務に從事してゐる勞働者の數は總計四二、七一七人で、その內直接生產に從事してゐる者は男工二八、七一四人、女工三、七〇〇人、合計三二、四一四人であつて、その他一〇、三〇三人は貨物の運搬・積卸等の勞働に從事する苦力及び郵便配達夫・車夫・小使等である（註二）。

最近勞働問題が盛んに論議せられてゐるが、青島に於ける勞資雙方は相互に協調してゐて、紛糾の如きも殆ど見られない。即ち資本家側より勞働者側に對する敎育・貯蓄等各種の優待方法も漸次實施せられつゝあり、全市內の職工補習學校も既に七

ケ所に及び、又職工の子弟を教育する學校も既に六校に達してゐるし、一方貯蓄に關する組織も六ケ所開設されてゐる。

又作業時間は一日平均約十一時間前後である。次に工賃は普通の職工で月給十元乃至二十元を支給され、その生活費を控除しても尙毎月數元の貯蓄をなすことが出來る。青島に於ける勞働組合の組織は、正式に成立したもので十九團體を算し、その中職業公會七團體、產業公會十二團體である（青島では工場の職工が組織してゐる工會を產業工會と稱し、その他ペンキ職・裁縫業・屠殺人夫・貨物運搬夫等によつて組織せられる工會を職業公會と稱してゐる）。その內、東鎭にある紡織業產業工會は鈴木絲廠が停工したため、又油漆職業工會及び製氷業產業工會は責任者が無い爲、何れも一時停頓した形になつてゐるが、これ等を除くその他の各工會は順調に進行しつゝある。

四、金融の狀況　青島の銀行は現在既に二十に近く、その內、國立銀行には中央・中國・交通の三銀行があり、又支那商人の經營してゐるものには上海・東萊・大陸・中國實業・明華の五銀行があり、更に山左・匯豐・麥加利・德華・正金・中魯・朝鮮・正隆等の外國經營の八銀行がある。全市の貿易はその對外たると對內たるとを問はず、大半は外國銀行に依つて操縱せられてゐるといふ狀態にある。金融界には銀行の外に尙三十餘の錢莊業者があり、非常な信用を有してゐる。

銀行や錢莊に於ける借款利息は、最高一分三厘から最低一分まで、その借款の條件としては擔保或は信用貸付等がある。市中に流通してゐる貨幣は、銀貨は袁頭及び中山紀念貨が最も多く通用し、紙幣は中央・中國・交通・實業等の諸銀行に於いて發行せられ、且つ青島の印を捺してゐるものが通用し、近來山東省庫券も市內でよく流通してゐる。

この外質屋も總計三十五軒に上り、その日本人經營のものは遂に三十三軒に達し、而もその利息は極めて高率で、毎月七分の利子を取る者もあり、支那商人經營のものに比して三倍以上も高い。その上質入期限は甚だ短くて僅かに三ケ月と定められ、期限滿了後一日でも超過した場合は、これを一ケ月として計算するから、一般民衆はこの過重な利息と短期限による剝取を受けて頗る苦しんでゐる。

青島の金融狀況を考察するに、滿洲事變以後は比較的窮迫し、各金融界に於ける收入の割合も以前に比較して甚しく缺乏を來し、新しい取引の如きも極めて少く、商工經濟竝に各企業は漸次衰頽の一途を辿りつゝあるといふことがわかる。

五、燃料及び動力　青島に於ける原動力用燃料は、石炭が主で一年間の消費總額は約六千九百噸と見積られて居り、撫順・淄川・嶗博等の地方から運ばれて來る物が多く、その內嶗博炭が約五割、撫順炭が三割、淄川炭がその三割を占めてゐる。博炭及び淄川炭は一噸につき約十二、三元、撫順炭は約二十二元である。次に石油は極く僅少しか使用せられず、年消費量總計二百餘噸で、英・米兩國から輸入せられるものは一噸約九十元前後である。各工場に於いて使用せられる動力では電力が比較的多く、紡績工場や製粉工場等比較的大規模の工場にあつて自ら發電機によつて發電を行つてゐる外、その他各工場に於いては、何れも皆膠澳電汽公司の供給を仰いでゐるが、その電氣料金は一キロワット七分の割合である。

註一　民國二十一年『青島市工業概覽』

註二　民國二十一年一月の青島市勞働人數統計表

第五章　北　平

一、位置及び交通狀況　北平は河北省の北部に位し、市內は內城と外城に分れ、北は熱河、西北は察哈爾に隣接して平綏・北寧・平漢三鐵道の起點となり、東南部は北寧鐵道によつて海口（大沽）に出る迄僅かに百八十四粁に過ぎず、海陸交通共に至極便利である。殊に最近南京より渡航連絡が出來て、北平・上海間の汽車による連絡は極めて便利となるに至つた。

北平市は元朝以來國民政府の南京奠都迄、歷朝皆こゝに首都を置いてゐたが故に、政治の中心ではあつたが、工業に對しては注意を拂ふ者が殆んど無かつた。從つて商工業では他市と競爭することは到底出來なかつた。卽ち北平の工場の內比較的大

規模なものとしては、僅かに清河鎮の軍政部北平羅紗製織工場、白紙坊の財政部印刷局、虎坊橋の京華印刷局（卽ち商務印書館の北平分廠）、後池の丹華燐寸公司北平工場、廣安門外の雙合盛麥酒工場・水道工場（總工場は大興縣境の孫河にあり）、法華寺街の電車公司修造工場及び先農壇西方の永增鐵工所等十數工場があるに過ぎない。その他、例へば銅鐵工業・綿織物業等の小規模工場の如きものは、いづれも外城打磨廠・河泊廠一帶に集つて居り、以上の外各種の工業は內城や外城に散在して一定の區域を有してはゐない。

二、市場概況　北平は國都の南遷する以前は人口極めて稠密にして、從つて消費者の數も甚だ多かつたから、商業の發展も頗る目覺しいものがあつた。然るに國都の南遷以來、商業は一落千丈の勢を以て沒落し、市面は蕭條を極めるに至つた。加ふるに滿洲國が獨立してから、市內の商工業はいづれも大きな影響を蒙らざるを得なかつた。最近北平に於ける總人口は約百五十萬であるが、北平人の見積に據れば城內の失業者は既に七、八割に達してゐるといふ。この數字に幾分の誇張があることは免れないが、市場衰頽の狀況は到底掩ふべくもない。

三、勞働者の狀況　北平に於ける市場の衰頽せる狀態は上述の通りである。從つて工場側に於ける利潤も少く、勢ひ職工に對する待遇も極めて惡い。新式工場では一般に宿舍及び食事を支給しない代りに、待遇は比較的優秀であり、作業時間も大體九時間乃至十一時間である。これに對して舊式工場にあつては食事及び宿舍を給與する所が多く、その作業時間は大體十時間乃至十二時間であるが、小工場では夏季十二時間、冬季十五時間の作業を行ふところもある。一方見習工には通常食事と宿舍のみを支給して、全然給料を支給しない所が多く、又時としては食事と住居とを賄ふに足る工賃を與へて自辨せしめるところもある。見習の期間は大部分三年としてゐるが、或は四年とするものもあり、一定してゐない。北平の勞働者の總數は民國二十一年度の市社會局の見積に據れば約七萬人といふことであるが、これは手工業のものをも包含してゐるから、機械工業に從事するものはその半數にも及ばないであらう。比較的大規模の工場では、職工が約三分の二、見習工が三分の一であるが、小規模の工場では恰度その反對である。又その內男工と少年工が大多數を占め、女工は少數の工場に於いてのみ採用してゐるに過ぎない。尙財政部印書局に於いて鋼版（紙幣・郵便切手・收入印紙を印刷するに使用する原型）を彫刻する技術工で、最高の精密なる技術を有する者には約三百餘元の給料が支給されてゐるが、このやうな工賃率は國內でも最高のものである。

四、金融の狀況　北平には國立銀行としては中央・中國・交通の三銀行があり、省立のものとして河北銀錢局がある。又商業銀行には中南・金城・鹽業・大陸・上海・中孚・中國實業・農工・保商等十餘の銀行があり、外國系銀行は全部で九ケ所、その他舊式の銀號も二、三十軒に及んでゐる。市場で流通してゐる紙幣は、中國・交通及び中南・保商諸銀行發行の補助紙幣及び河北銀錢局の銅元紙幣等が最も廣く通用して居り、硬貨としては銀貨及び二十文大銅貨とがある。

五、然料及び動力　北平は井陘・開灤・口泉等の如き出炭地域に近接してゐるので、有煙塊炭一噸につき約十元餘、屑炭ならば一噸につき僅か八、九元に過ぎない。又時としては亞細亞公司の石油を動力用に供してゐる所もある。蒸氣機關や發動機等にして外國製の機械を使用してゐる所は、僅かに有數の大工場のにみ限られ、大多數の工場に於いては北平の永增・海京兩鐵工廠及び天津等にある中國鐵工廠などに於いて製作せられたるものを使用してゐる。

電力を使用してゐる工場も少くないが、たゞ北平電燈公司の電力が不足の爲、數時間に亙つて停電する事も間々あるに拘らず、電氣料金は極めて高價であり、殊に城內であつても電柱よりの距離が比較的遠い工場では電燈會社に配電方を請求しても伸々取附けて貰へないといふ狀態も屢々見られる。電力や蒸氣による動力原價の低く且つ便利であるといふことが小工業の命脈であるにも拘らず、かくの如き狀態では多大の打擊を蒙らざるを得ない。

第六章　無　　錫

一、位置及び交通狀況　無錫はその昔泰伯が封ぜられた土地で、揚子江下流の豐沃な平原中に位置してゐる。戸數一九四、六八二戸、人口九四一、五七五人であつて、物產は甚だ豐饒で市內は繁榮を極めてゐる。

無錫は北は江陰に連り、南に太湖を控へ、東に常熟、西に宜興、西北部は常州、東南部は吳縣に境を接してゐる。京滬鐵道の沿線で、每日上下約十餘回の便があり、又錫澄（無錫—江陰）・錫宜（無錫—宜興）線等の公路（自動車專用道路）も最近竣工を見た。以上は陸上交通の概況である。水上交通としては運河が同地方を貫通して居り、南は浙江省に通じ、北は山東省に達してゐて、實に舊時に於ける南北交通の要衝であつた。また無錫は河川が縱橫に分岐してゐて、船舶の往來が特に便利であるから、內河用小汽船が到る處に運航してゐる。その中無錫・上海間を航行してゐるものには久茂・協興等の會社があり、無錫・宜興間には招商・新商等、無錫・溧陽間には招商・永固等、無錫・江陰間には利澄・嚴東等の數會社がある。更に無錫常熟間を往復するものには新濟・淸益等の會社があり、無錫・蘇州間を往復するものには普益・華新等、無錫と浙江省湖州間を往復するものには大湖公司が各々設立せられてゐる。その他境內の各鄉鎭の間にも亦多くの小汽船が往來してゐるが、惠商安利・濟商・詳記等々極めて數多く、一々枚擧の煩に堪えない。又商船にして貨物を積載して往來するものは更に多數にして各鄉村の間を往來する舊式巡航船營業者は三百三十ケ所の多きに上つてゐる。以上は水路交通の大略である。又城內に於いては道路の平坦な處は人力車や自動車が通行し、電話線も亦四周の鄉村との間に敷設されてゐる爲、遠方でも通話が出來、更に電報や普通郵便等も極めて便利であらゆる大都會に對しても簡單に通信し得る。以上は無錫に於ける一般交通の概況である。

二、市場概況　無錫は物產豐饒、人口稠密で、而も文化は大いに發達してゐるので、住民中の智識階級は極めて實業思想に富んでゐる。從つて農產物の內、例へば蠶絲・米・麥等が主產品を占めてゐる外、工業方面が非常に發達してゐて、單に江蘇省內に於ける首位として推さるべきであるに止らず、實に全國に於ける奧地各都市中にも恐らくこれに比肩し得るものはあるまい。

工業としては紡績工場七、織布工場二十餘、製糸工場四十九、靴下製造工場が大小合せて五十、製粉工場四、搾油工場五或は六、精米工場十餘、曰挽工場が十餘、鐵工場が六、七十設立されてゐる。以上各種の工業には或は巨大なる規模のものがあり或は特殊狀況の關係にあるものもあるが、いづれも皆無錫工業中の錚々たるものばかりである。又その他一般の工業、例へば石鹼製造・印刷業等の如き工業は何れも發達してゐる。

商業方面の狀態は農工產物と密接な關係に立つものであるが、無錫商業中特記すべきものは第一に米の取引である。無錫は元來安徽・浙江等の米商人の集る處で、每年約七、八百萬元の取引が行はれて居り、同業者も亦數十戸の多きに達してゐる。次は食料雜貨業でこの種の商店も二十餘戸あり、これ等各戸に於いては每年五萬元乃至二、十萬元の營業をなしてゐる。その次は各種油商で營業種目は無錫の搾油工場の製品の外、他の地方產の油類や桐油等をも取引してゐる。次には釀造業があり、その數は城內外併せて百餘戸に及び、いづれも酒・酢・醬油等を販賣してゐる。又質屋業も、城內外併せて三十餘戸存在してゐる。その他石炭業・鮮魚商・精肉商・菓子商・吳服太物商・西洋雜貨商等の如きものがあり、大規模のものに於いては、各業一ケ年間の賣上高が數百萬元の賣上高を示してゐる。

又特殊商業としては交通が便利な點より運送業があり、生糸や繭の產額が多い爲に生糸や繭の倉庫業が出現し、米穀の主產地である關係から米穀倉庫業が存在し、それ〳〵倉敷料を取ると共に、併せてその米穀を擔保とする貸付をも行つて居り、この外更に農村の水田灌漑用として水汲業をなす者もあり、全縣下に合計八百餘の水汲機があるが、これは無錫地方特有の職業である。上述の如き職業に應ずるため鐵工業も亦これに從つて勃興し、各機械工場に於いては石油發動機・精米機・水汲機・

脱穀機等の製造を主要業務としてゐる。以上は一般商業の概況である。

上述各種商工業に於いてその中心をなす人物は、紡績工場では榮德生・楊翰西等、製紙工業では蔡緘三・孫伯華・榮德生等米等では錢鏡生・唐滋鎭等、鐵工業では陳子寛・楊仲賢・江玉山等、針織業では乾竹屏・戈子餘等、織布工業では吳仲炳・吳健農等、製糸業では程炳若・陳炳泉・薛炳泉・薛壽萱等、搾油工業では浦文汀等の人々が擧げられる。

三、勞働者の狀況　無錫の勞働者は工場方面に就いて言ふならば、紡績工場・製紙工場・織布工場に於ける數が最も多い。即ち製紙工場は女工約二萬人、男工は約一千人前後を有し、次に紡績工場は女工約一萬三千人、男工約二千人前後、織布工場は男女工併せて約三千人である。この外靴下製造工場の女工は、工場内外の者を併せて約三千人乃至四千人を有し、又搾油・製粉・精米・脱穀等諸種の工場は、大體二千人内外の男工を有してゐるが、これ等を除くその他各工業の勞働者は比較的少數である。

かゝる勞働者の内、最高給者と最薄給者とを除いて、普通一般の工賃を見るに、男工は毎日四角乃至八角、女工は二角乃至四角で、いづれも食事や宿舍は支給せられない。又抱え車夫及びその他に雇用されてゐる勞働者に至つては、一ケ月約六元乃至十二元が普通であるが、たゞこれには食事と宿舍が供與されてゐる。勞働者の中衣食住共自辨してゐる者ならば、毎月六元乃至八元を必要とする。即ちその中家賃は月約二元を要するが、これは普通二人同居する事が出來、次に食費としては一ケ月五元から六元迄が普通である。從つて毎月所定の收入を以てするならば、勞働者一人の衣食住には充分であるが、然し世帶を持ち老人子供を扶養する必要のある者は、家庭經濟上常に不足勝ちであり、一旦病氣に罹り、又その他の事故が起つたりした場合には、更に一層窮迫を告げる狀態である。故に家族のある者は、平素妻子を外へ出して仕事させ、その給料を以て生計の補助としてゐる。以上が無錫に於ける勞働者の概況である。

四、金融の狀況　各種商工業の樞軸を操るものとしては、先づ銀行及び錢莊が數へらるべきである。銀行としては中國・江蘇・中央・上海商業等諸銀行の無錫支店があり、又錢莊業には復元以下二十餘戸が存在してゐる。その毎年の營業高については、未だ充分の調査が行はれてゐないが、大體の見積によれば銀行が毎年約五十萬から百萬元まで、錢莊は毎年約二、三十萬から五十萬までの營業高を示してゐる。その利率は毎年舊曆の正月・二月が最も低く、三・四月後は一般に商工業界に於ける資金の必要が次第に增大するに從ひ、その利率も亦漸次高くなるのが普通である。大體貸出の利率は最低八九毫より最高五厘以上である。

近年時局が多事多端の爲、金融業の貸出も專ら愼重を旨としてゐるので、年末決算に際しても貸倒しとなる場合は殆どなく故に缺損の憂は全然無いといふ。然しながらかゝる穩健主義のみでは、決して十分の發達を遂げる事は出來ないが、近年無錫に於ける各種工業の營業狀態も亦、平々凡々の狀態に過ぎない。

五、燃料及び動力　無錫に於ける各工場の原動力は、大規模工業たる紡織工場等は蒸氣機關を使用してゐる所もあり、蒸氣タービンを使用して自身發電を行ふ者、又は戚墅堰の電力を使用する者等々の區別があつて、製粉工場も大體同樣である。製糸工場では作業上熱湯を必要とする爲、こゝに設備せられる原動力機械は蒸氣機關が多い。石油發動機、電氣モーターによつて補助してゐるものもあるが、熱湯の需要があるので蒸氣機關の燃料とする石炭は不可缺のものである。この外織布工場の動力部分には電力を使用してゐるが、染煉方面に於いてはこれ又熱湯と離るべからざる關係にある。從つて無錫に於ける毎年の石炭消費量は、大體十六萬噸乃至二十萬噸の巨額に上り、その中最も多量に消費せられるものは、工業方面に使用せられる有煙屑炭である。工業用石炭の使用量は製糸工場・紡績工場・織布工場が特に多量を占めてゐるが、その他の方面では新式及び舊式の煉瓦製造工場に於いても、毎年一萬噸内外を消費してゐる。尙内河汽船の中には蒸氣機關を使用する者が多く、この種各會社を全部合計すれば、毎年六千噸から八千噸に及んでゐる。更に鑄造工業に於いて用ひる燃料はコークスが主であるが、その數量は毎年僅かに五、六百噸程度に過ぎない。又料理店や家庭に於いてストーブに使用せられる無煙炭は極く少數である。

以上各工場に於いて使用せられる石炭は、開灤の屑炭が最も多く、中興炭がこれに次ぎ、別に長興・華東・大通等の屑炭を混用してゐる者もある。平均價格は屑炭でも一噸約十二、三元見當であるが、塊炭ならば一噸十六元から十七元位である。この外更に水田の灌漑用としてはすべて石油發動機が使用せられ、又工業方面に於いても小馬力の石油發動機を使用してゐる所が少からず、從つて無錫に於ける石油の消費量も亦相當の額に上る。以上は無錫市の工業に於いて使用せられる燃料の概況である。

第七章　杭　州

一、位置及び交通狀況　杭州は浙江省の省城で、前清時代府治の置かれた地であるが、辛亥革命以後府が廢せられ、仁和・錢塘の兩縣が合併されて杭縣となつた。次いで民國十六年國民政府が南京に都を奠めて以來、南は江干、北は湖墅に至り、西は西湖、東は喬司・臯亭に至るまでを併せて杭州市と改稱し、城區・湖墅・西湖・會堡・江干・臯塘の六區に分れ、八村十四里を管轄してゐたが、民國二十年更に十三區に分割せられた。杭州市は南方錢塘江に臨み、更に江を隔てゝ蕭山と相對し、東西北の三面は何れも杭縣の管轄である。民國二十年省會公安局の調査に據れば、戸數總計九八、七八六戸、人口五二三、五六九人であつた。

滬杭鐵道は上海より發し、杭州の清泰門に至り、轉じて江干・閘口に達して終點となる。錢塘江を渡るには無賃の渡船があり、錢塘江を渡れば即ち蕭山であり、此處より蕭紹公路が起り、紹興經由直ちに曹娥江に達してゐる。その支線は既に嵊縣に通じ、曹娥江を渡れば即ち滬杭甬鐵道甬曹段の起點で、こゝより東に向つて餘姚・慈谿の兩縣境を經て寧波に至る。又江干の對岸には杭江鐵道があつて金華に達することが出來るし、又蕭山の西興鎭にも達してゐる。紹興の官塘河には小汽船が直接曹娥と連絡して居り、更に曹娥から船によつて寧波へ達する事も出來る。錢塘江の水路を航行する各小汽船はすべて江干に集中し杭州・諸暨汽船等は諸暨に達し、錢江汽船等は桐廬に達する事が出來る。以上は杭州市から浙江省東部各地方へ至る水陸交通の狀況である。拱宸橋は最も早く開けた商埠地で、こゝに日本租界がある。拱宸橋は南運河の終點であつて、浙江省西部各方面を航行する小汽船は皆當地に集中し、振興・寧紹・翔安・長杭等の各汽船會社はすべて杭州市より湖州に至る航路を有してゐる。この外建設廳內河輪船營業事務所は杭州より蘇州に至る航路を有して居り、源通輪局の航路は杭州より蘇州屬の震澤鎭に至り、和記輪局の航路は杭州より德清の新市に至り、順興輪局の航路は杭州より塘棲に達する。又舊式の客船は湖州・蘇州・嘉興等の各地方との間に、數日に一回定期に出帆してゐる。以上は杭州より浙江西部各地方竝に江蘇省內との間に於ける水路交通の概況である。又自動車道路の如きも近年四通八達を極め、先づ杭州より餘杭に至る杭餘公路あり、杭州より富陽に至る杭富公路あり、杭州より海寧經由平湖の乍浦に至る杭平公路あり、又平乍閘段は乍浦から江蘇省の閘行鎭に至り、これより滬閘公路に轉じて上海へ達することが出來る。その他杭長公路　杭州より長興に至り、長興から更に直接南京に達することが出來る。以上は杭州市と外地とを結ぶ自動車交通狀況である。杭州京區內の自動車交通路にも六路あつて、先づ第一路は拱宸橋より江干・三廊廟に至る線であり、第二路は拱宸橋より新市場の湖濱に至り、第三路は武林門より三廊廟に至り、第四路は湖濱より六和塔に至り、第五路は湖濱より篁橋に至り、第六路は湖濱より留下鎭に至る線である。市內の交通機關としては人力車・籐轎及び西湖の遊覽船があつて、いづれも隨意に利用することが出來る。以上が杭州市內の交通狀況である。市內電話は杭市局・東支局・南支局・西支局・北支局の五局に分れてゐる。又長距離電話としては杭嘉・杭湖・杭甬・杭衢・杭處・甬溫・衢溫等の幹線と、長禾・善乍・餘昌・武莫・湖禾・長泗・紹昌・臨臺・奉溪・黃海・建淳・蘭金等十二の支線がある。無線電報は既に民國十六年十月に創設せられ、現在は交通部の管轄の下にあつて專ら上海・南京・定海・寧波四ケ所との間に通じてゐる。更に無線電話も民國十七年十月より放送を開始して居り、普通郵便や電報の如きも、極めて迅速なる配達を行つてゐる。以上が杭州市の一般交通概況である。

二、市場概況　杭州市の占める地位は極めて重要で、一面浙江省東部の門戸をなすと共に、浙江省西部樞要の地を扼してゐる。當地は交通至便のため商業の發達も早く、農業や工業も繁榮を極めてゐる。農業は米作の外では養蠶業が主である。從つて工業方面でも絹織物が著名なる產業となつて居り、絹織物工場竝に機織場に於いて使用しつゝある織機總數は一萬餘臺の多きに達し、たゞに浙江省に冠たるのみに止らず、實に全國絹織業史上より見るもこれに比肩し得るものは殆ど無い。然しながら、現今は市況不景氣のため、僅かに五、六十の絹織物工場を見るに過ぎない。その他絹織物業の附屬作業、例へば紋穿・經緯綜絖・染練等の各作業を行ふ工場も少くないが、その營業狀況は極めて不活潑である。この外燐寸工場及び燐寸箱製造工場が二工場、織布業が十餘工場、製紙・紡績兼織布業が各々一工場宛、その他針織業二十餘、蠟燭製造業が六、七ヶ所、綿織物業が十餘、米穀業兼精米業約百二十戸、印刷業が大小七、八十、製革業二十餘、漂染整理業十七、八、鐵工業が大小併せて七十餘を算してゐる。以上の外その他の各業も極めて多いが、戸數が少いから省略する。杭州の各業工場は大部分小規模のものゝみで、例へば精米工場百二十餘戸の內、工場法の適用を受けるものは一ヶ所もなく、全市の各工業中でも標準に合するものは僅か百餘戸に過ぎないといふ狀況である。かゝる市面の不景氣より生ずる失業者の狀態は次節に於いて詳述する。

三、勞働者の狀況　杭州市に於ける男女勞働者は、工場勞働者及び工場外に於いて請負作業をなす者を全部合計すれば約十萬人に近いが、その中絹織物業・製糸業・織布業等が最も多く、これに次ぐものは鐵工業と印刷業とである。これ等は勿論その工場數の多いもの程、勞働者の數も多いが、電氣業・燐寸工業・紡績業・製紙業等の如く僅か一工場があるに過ぎないものでも、勞働者の人數は極めて多いといふやうな場合もある。これはいづれも工場勞働者のみに就て言つたものであるが、工場外に於いて請負作業をなす者は大部分女工によつて占められてゐる。元來杭州は絹織物の產地であるが、その整經・綛掛等製織原料の準備作業の如きは、すべて婦女子の家庭に於ける副業となつてゐるし、又燐寸工場に於ける燐寸箱の糊付、各種紙箱の糊付・レッテル貼付等も多くは工場外の作業による。一昨年以來緯成・天章の二工場が相前後して休業したため、絹織物業關係の勞働者は續々と失業するに至り、又絹織物業の不振の爲に、工場・機織場にして停業の止むなきに至るもの多く、又鐵工業に於いても織物工業不振の影響を受けて大いに衰微し、相繼いで職工の整理を行つた。かくして民國二十一年杭州市に於ける男工の失業者は合計六、八九七人、女工の失業者も亦四、八九四人で、實に杭州勞働者總數の二〇%弱である（註三）。

杭州市は元來絹織物業が最大の工業であるから、この絹織物業の工賃を以て一般勞働者の待遇狀況を代表せしめることが出來る。即ち最高級者は毎月約三十元以上の者もあるが、極めて少數で、最低の者は工場外の女工で月六、七元、宿舍・食事共に支給されてゐない。普通一般の工賃は男工毎月約十五元乃至二十元、女工は約十元乃至十五元である。各人衣食住の費用は最低限度毎月約十元乃至十二元である。從つて職業を有してゐる職工であつても毎月の收入は辛じて個人の入費に充て得るに過ぎないから、多數失業者の生活狀況の悲慘なることはいふ迄もない。

四、金融の狀況　杭州市の金融は最近又枯渴するに至つた。その主要原因は製糸業や絹織物業の不振のため農產物の下落したことによる。その銀行業としては浙江興業・惠迪・商業貯蓄・儲豐・地方銀行等及び中央・中國・交通その他大陸・中南・興業・道一・農工・實業銀行等の支店がある。營業の性質には幾分不同があり、國庫を代理するものには中央銀行があり、外國爲替を取組み、公債を發行するのは中國・交通の二銀行である。浙江興業・地方の兩銀行は省立銀行で、大陸・中南・道一・惠迪・儲豐銀行等は商業銀行である。農工・實業及び浙江實業銀行は實業銀行で、鹽業・典業等は特殊銀行である。然して浙江商業は儲蓄銀行で、その中心人物は金潤泉、王鄉泉等である。錢莊は金融を操縱しつゝある舊式の兩替業で、現在銀行が次から次へ增設されてゐるが、尙依然として錢莊の勢力は侮るべからざるものがある。杭州市の錢業は約六十餘戸あり、その組織は大同行・小同行及び兌換莊（兩替店）の三種に分つ。大同行は所謂匯劃莊（支拂保證を取扱ふもの）で、資本は稍々大で地方との間に相互に手形交換業務を取扱つてゐる。小同行は專ら門市（小賣の意）取引を營み、地方との往來は必ず大同行の名に於いて取引される。故に小同行は門市莊とも稱せられる。大同行・小同行は錢業組合を組織して居り、會員となつてゐるも

のが約四十餘戸に上る。入會してゐないものは多くは兌換莊であるが、これは各種の貨幣の兌換・公債・證券等の賣買を以て業とするので兌換莊と稱する。大同行・小同行の業務は貸付・預金・爲替・手形の四種に分れる。貸付業務には當座貸付・定期貸付・抵當貸付・信用貸付等があり預金業務には當座預金・同業預金等があり、手形には約束手形・爲替手形・上票等がある。爲替は普通爲替・郵便爲替・電報爲替に分れる。近年荷爲替を取扱ふものもある。普通貸付利息は預金利息に比して高いが、これにも一定の標準がある。

五、燃料及び動力　杭州市に於ける工場で蒸汽力を使用しないものはその動力としてモーターを用ひるものが多い。石油機關を使用するものには絹織物業・鐵工業・印刷業等がある。今尙蒸氣機關を使用してゐるものには製糸業・製紙業等があり、この外綿織物業で漂染を兼ねる者にしてこれを設置してゐる場合もある。その他比較的小さい工業に至る迄、殆ど石油機關或は電力モーターに改めてゐる。杭州市煤業公會の見積に據れば、毎年各種石炭の消費量は約十五萬噸内外であるといふ。各工場とも電力使用に改められたとは言へ、發電の源としてはやはり石炭を燃料としてゐる。杭州の石炭使用量最大の工場は杭州電廠が第一に擧げらるべきで、毎年の需要量は二萬五、六千噸である。これに次ぐものは華豐紙版廠で、毎年大體六、七千噸を必要とする。その他の工場では、多いもので千噸から二千噸、少いものは數百噸であるが、結局規模の大小によつて需要量の多寡が異る。以上の外では、滬杭甬鐵道の閘口停車場の機關車用の石炭、及び錢塘江・運河内の各小汽船内で使用する石炭の量も亦相當數に上るが、大約毎年約五萬噸内外を必要とする。各種石炭の消費地に就いて見るに、工業方面に使用されるものは約四割乃至五割に過ぎない（電氣會社をも含む）。その他舊式の石灰窯・煉瓦窯等も石炭消費の一部分を占めてゐる。石炭の種類は工場にて使用するものは長興の屑炭が最も多く、關平・中興・大通等がこれに次ぐ。鑄造工場の使用するコークスは毎年約七、八百噸であるが、一部分は中興のコークスを用ひ、一小部分は當地の承興廠の製品を用ひてゐる。一般人の暖爐及び料理屋で使用するものは、安南の無煙炭と炭團製造工場で使ふ紅基屑炭とが多く、合計約一萬五千噸乃至二萬噸である。

註一　『杭州市經濟調査』
註二　同

第八章　漢口

一、位置及び交通狀況　漢口は全國の中心に位して揚子江上流の重鎭をなし、交通至便にして地勢險要を極め、昔より五方雜處九省通衢と稱せられてゐる。蓋し西北は漢水に沿ひ、帆船は襄陽・鄖陽を經て陝西省に通じ、西南は揚子江及び洞庭湖によつて四川・湖南に達し、東は揚子江口より江西・安徽・江蘇省に至る。揚子江の汽船は漢口を以て終點とするが、稍々小さい船は長沙・常德及び四川省の重慶迄遡ることが出來る。水路の便より見てもかくの如く交通上の要衝をなしてゐるが、更に陸路は平漢鐵道により河北・山東・河南諸省に通じ、北は平綏鐵道に連絡して蒙古に通ずる。粵漢鐵道の湘鄂・廣韶の兩段は夙に完成して居り、現在尙修築を急いでゐるが、兩者の接續後は直接廣州に達することが出來る故、その地位の重要なるはこれによつてもその一斑を知り得る。武昌・漢陽・漢口の間には渡船があつて毎時間數回就航し、その往復は極めて便利である。又湖北省の各公路は大抵通車可能の狀態にあり、漢口より東北は麻城に至り、西北は迂廻して樊城に達し、西方は現在沙洋迄通じてゐるが、將來修築が竣工すれば宜昌に到達する筈になつてゐる。

二、市場概況　漢口は交通極めて便利にして汽船鐵道は四通八達し、貿易は日を逐ふて隆盛に趨き、誠に中部及び西北各省に於ける中心市場をなしてゐる。重要商品は陝西・甘肅省の毛皮類、四川省の藥材・桐油、湖北・湖南兩省の糧食・棉花、江西省の茶、その他宇廠・麻布・石膏及び卵類等いづれもこの地に集中してのち輸出される。紡績工場・製粉工場・燐寸工場・製茶工場・製氷工場・包裝工場・織布工場・石鹼工場・精米工場及び鐵工場等の新工業も頗る發達してゐる。然るに如何せん

天災匪禍相繼いで起り、民國十六年には共產黨の蹂躪を蒙り、民國二十年には大水害の猛威に遭遇し、水害の後は各地の匪賊・共匪が猖獗を極めて交通が阻害されたため、行商人は足を止められ、從つて製品の運輸が困難となつて販路は完全に停滯し、こゝに於いて商工業の大部分は缺損の爲閉鎖或は停業の止むなきに至つた。現在漢口の大工場にして今尙存在してゐるものは寥々として幾何もなく、僅かに一部の小工場のみが辛うじて現狀を維持してゐるに過ぎないが、これ亦何れも危殆に瀕してゐる。目下漢口に於ける商工業の不況の程度は既に極點に達し、これを往時に比較すれば、實に隔世の感がある。

三、勞働者の狀況　漢口の商工業は既に全般的衰落の現象を呈してゐる。その原因は土匪竝に共匪の蹂躪を蒙つて農村が破產するに至り、これが爲にその購買力が薄弱となつたことに因る。こゝに於いて消費市場が不活潑となり、各工場は等しく緊縮政策を採ることゝなつた。工場側がこの擧に出たのはもとより止むを得なかつた爲であるが、これによつて一般勞働者の生計は非常なる打擊を受けるに至つた。現在漢口の勞働者はその數約六萬乃至八萬であるが、工場も停業或は閉鎖してゐるものが大多數であるため、失業者も極めて夥しい數に上つてゐる。勞働者の原籍の大部分は漢口及び附近鄰縣が多くて、江蘇・浙江・安徽・江西省の者は極く少い。共產黨が武漢を占領してゐた頃は勞働者の勢力が大いに伸張し、各工業いづれも勞働組合を組織してゐたが、同黨の淸黨が行はれて（譯註　民國十六年）後は勞働組合の大部分は解散した。目下のところ少數の大工場に於いて稀に勞働組合を組織して、外部との連絡に當つてゐる外、その他一般の工場には全然團體が組織されてはゐない。職工の工賃は言ふ迄もなく各職業によつて多寡の差を生ずる。蓋し一般小工場の大半は食事及び宿舍を支給するので、工賃も多い者で月十元、少い者は僅か四、五元であるが、食事及び宿舍を支給しないものは月十元から十五元の間である。每月二日及び十六日は休業するのが普通である。勞働者の住宅は、工場側より提供するもの以外は大抵他家の空間を賃借する者が多い。賃間料は部屋の大小によつて定まるが、大體一間に四、五人起居し得る程度のもので月に約三、四元である。食事は普通一ヶ月一人當り約四元から六元である。故にかくの如き商工業衰落の時に於いて、工場より支給さるゝ賃銀のみを以て一家の生計を維持しつゝある者の窮乏の狀態は想像に餘りあるであらう。

四、金融の狀況　漢口の支那銀行には中央・中國・交通・金城・上海・中南・大陸・四明・鹽業・浙江興業・浙江實業・中國實業・聚興誠・廣東・農工及び湖北省銀行等十餘、別に錢莊が十戸を數へる。漢口にあつて上海鈔票を發行するものには中央・中國・交通・四明・中國實業・浙江興業の六銀行がある。又漢口に支店を持たずに上海鈔票を發行しつゝあるものには盤業・通商の二銀行がある。盤業は五福里の中央信託公司に兌換を代理せしめ、通商は鄱陽街の源裕銀號をして爲替取組を代行せしめてゐる。中央・中國・交通・農工及び湖北省銀行等は別に補助紙幣を發行して市場に流通せしめてゐる。外國發行にして漢口に於いて漢口紙幣を發行するものには滙豐・花旗・華比及び麥加利の四銀行がある。近年市場の不況に因り金融も亦その影響を受け、銀行及び錢莊はいづれも貸付を差控へてゐる。從來重視してゐた棉花の擔保貸付のみは從前通り取扱つてゐるが、その他の貨物は殆ど悉くその引受を拒絕してゐる。錢莊も亦現金取引を原則とし、以前行はれた信用貸付の如きは八、九割方減少を來してゐる。　金融逼迫により一般の工場の資金融通も極めて困難となり、その利息は大概每月八厘より一分までゞあるが、利息の輕重は市場の狀況によつて變化するのは勿論である。

五、燃料及び動力　漢口に於ける大工場の數は極めて少く、水力發電所、製粉工場及び一、二の鐵工場・包裝工場を除く外はいづれも小工場と手工業とである。然して一般小工場の使用する動力は全部モーターで、電力の大部分は既濟電廠の供給を受け、租界或は特別區にあるものは外國系電力會社より供給を仰いでゐる。動力を起す燃料は石炭が主で、各工場で使用する石炭は開平・開灤・井陘・六河溝等數種に區別される。一噸の賣價は普通十二元乃至十五元である。

第九章　重　慶

一、位置及び交通狀況　重慶は四川省の東部、揚子江の上流に位置して西部地方の重鎭をなし、清朝の時府治となつたが、現在は對岸の江北縣城を併せて普通の市となつてゐる。揚子江と嘉陵江はこの地に相會して、稍々半島形の地帶を形成し、重慶市はその山巓に位して周圍約二十餘支里、江岸より仰げば城壁相參差し樓閣高く聳えて恰も天界を望むが如く、城門に立つて俯瞰すれば大江の氣勢雄偉にして繞らすに江水を以てし、汽船帆舟輻輳して交通の至便なること四川省に冠絕してゐる。前清光緒十七年英支煙臺條約により商埠として開かれたところであるが、凡そ陝西・甘肅・雲南・貴州・西康・西藏等の商品は總てこの地に集中される。蓋し嘉陵江はその源泉を甘肅に發し、四川北部の廣元を經て南流して重慶に達し、汽船は重慶より合川迄遡ることが出來る。揚子江はこゝより西に延び宜賓に於いて金沙江を合せる。その他各支流も縱橫に交錯し、舟運は極めて便利であるが、殊に夏季は增水の爲汽船の如きも嘉定まで遡航し得る。近年航運は更に發達し、上海・重慶間の直航便が開かれその運航も頻繁となり、從來の如く貨物運搬の途中に於ける積替等の煩しさが無くなつた。重慶は往昔蜀道青天の喩あり今は峭巖猿猴嘯き月夜杜鵑啼いて、更に遊客を誘ふに足るものがある。且つ近年來四川省內の公路も日に發達を遂げ、運賃は極めて高騰を見てゐると雖も、尙交通上裨益する所少からず、又中華航空による空運の便も西方成都・重慶の地まで延びてゐる。最近成渝鐵道敷設の議も世上に囂しく、隴海鐵道は現下陝西省寶鷄まで通じてゐるが、これ亦南折して成都に達せしめるといふ案が議されてゐる（新聞の報道によれば、隴海工程處は該線を西方に延長して蘭州に達せしめても、これによる收入は鐵路維持費に滿たずとの故を以て寧ろ南折して成都に至るべしとの案を提議したところ、交通部に於いてもこの意見を採用する意嚮で、目下係員派遣現地視察中であると）。若しもこの兩鐵道が竣工し、川漢・欽渝の兩鐵道完成を見るに至れば、西部諸省一切の運輸は悉く重慶をその樞軸とするに至り、この地は遂に單なる軍事・政治上の要地たるのみに止らなくなるであらうことは必定である。

二、市場概況　四川省は中古に於いては天府と稱せられ、物產の豐饒を以て知られてゐたが、交通の不便と運輸の困難との爲、新式機械工業は他の土地より甚だ後れてゐる。但しその地位的關係より、重慶は依然として四川省中部に於ける代表的大都市と稱することが出來る。製糸工場は元來十餘の多きを算してゐたが、數年前金の價格及び外國爲替が暴騰し、更に日本の製糸業者の競爭に原因して俄かに不振を呈するに至り、現在は停業してゐるもの頗る多く、辛じて營業を續けてゐる數工場の如きも、每年の繰糸量は從前に比して激減し、ストックは夥しい數に上り、窮狀言語に絕するものがある。機械製粉工場は三ヶ所あり、製造は迅速であるが販路が極めて不活潑である。蜀錦（譯註　四川省產錦織）や齊紈（譯註　山東省產白絹）は古來世上に喧傳されてゐるが、重慶にも早くより綾・湖縐・巴緞等の類があり、いづれも四川省內に販賣する外、雲南・貴州省にも及んでゐたが、近時外國品の競爭を受けて殆どその存在もわからなくなつてしまつた。

機械の修理及び製造工業は近時頗る發達して來てゐる。蓋し四川省の諸江は激流が多い爲に、船舶は屢々破損を蒙つて、その都度修理を必要とし、同時に軍人の使用する土銃・土砲等の製造も必要である。尤もかくの如き舊式武器は、外國に對しては利器と稱するに足らないが、國內の紛爭には大いに珍重せられる。故に重慶のみでも現在機械修理工場は大小四十餘工場の多きに上つてゐる。その他の印刷・染色・織布・靴下製造・製革・蠟燭・電池等はいづれも人力を以て製造に從事してゐる。新式機械工業の發達し得ない主要なる原因は、一は交通が不便で運輸の困難なこと、二には重慶には現在電力が無く、動力供給の來源は僅に石炭及び柴油による外なく、而も柴油は賣價が極めて高いといふ點、その三は金屬製品の輸入に就いては、當局が禁制品として、特別の許可のない限り搬入不可能なる點、四は苛稅で、種々の雜稅の重く且つ煩雜なることは眞に住民の困苦に堪へないところである。五は連年戰爭の止む時なく、農村は破產に瀕したため人民の購買力が激減したこと等である。以上各種の原因が累積して、單に重慶一地區の工業がその發展を阻碍されるばかりでなく、各縣に於ける農產物・山貨（譯註　動

植物の產品）・藥材及び手工業製品、例へば生糸・桐油・牛羊皮・生漆・羊毛・五倍子・麻布・葉煙草・下等紙・食料品・砂糖等の輸出品も亦大打擊を蒙つて、商業の不況も重慶市と同樣である。

輸入品は綿糸・反物・金屬・石油・顏料・卷煙草・蘇州物產・乾物・食料品・文具・紙等であるが、これ等も日に減少を來たしてゐる。然しながら兩者を比較すれば每年入超が極めて大きい。入超といふやうな事は往時は絕無であつたが、近來は日日に增加しつゝある。海關貿易統計によれば、重慶海關は民國十八年には尙七百九十五萬二千海關兩の出超であつたが、民國十九年には六百三十三萬四千海關兩、二十年には六百九萬七千海關兩のいづれも入超となつてゐる。最近の二ケ年は正確な數字がわからぬが、入超といふ事實は恐らく否定し得ないであらう。

三、勞働者の狀況　重慶の勞働者は小工業勞働者が大多數約五萬人を占め、工賃は最低一月約五元、高いものでは四十元に達する者もある（織布及び金銀業等に於けるもの）。作業時間は普通十時間である。製糸工場では多く宿舍の設備があるが、その他は大抵工場附近に居住したり、或は臨河の東南兩岸に居住してゐる。その生活狀態は言ふ迄もなく極めて簡單粗陋であるが、又教育程度も極めて低級で、稍々文字のわかる者は約一、二割、新聞を讀み得る程度の者は僅かに二、三%に過ぎない。現在勞働組合が二十餘ケ所あり、曾つて勞働貯金を開始したが、その處理方法が良くなかつた爲數ケ月を出でずして遂に中止された。一般の勞働者には正當な娛樂機關なく、勞働の餘暇には同業組合の喫茶社等で遊ぶ位である。經濟的に幾分餘裕のある者は多く麻雀・觀劇等に娛樂を求めてゐる。但し四川省は阿片が各地に普及してゐる爲に多くはこの惡習に染り、埠頭の運搬人夫・荷造人夫・轎昇・車夫等は更にその度が甚しく、皆顏面蒼白にして骸骨の如く痩せ細つてゐるが、一度阿片を充分吸飲すれば始めて舊に復し、健步飛ぶが如く力は山を拔くといふ有樣で、かゝる中毒患者の增加することは誠に嘆はしいことである。

四、金融狀況　四川省の幣制の紊亂は極度に達して居り、各處に割據する群雄が隨意に貨幣を鑄造し、殊に銀貨の品位は特に惡いので、他省に於いては全然通用しない。現在銀貨一元は銅元二十四文に交換される。蓋し銅元一枚が制錢（譯註　戶部工部及び各省にて鑄造し各地方に行ふ小銅錢）二百文に當るが、實際は民國初年及び前淸の二十文銅元である。機械の重壓によつて鑄造したものであるが、時に原形の印紋を辨じ難い場合も少からず頗る滑稽である。且つ縣と縣との兌換率及び單位は各々異つて縣境を越えると共に通用しなくなるため、旅行者にとつては最も不便である。現在存在する銀行は中國銀行・聚興誠銀行の外に、尙川康・美豐（米國資本は早くより驅逐せられ、現在は純然たる華人經營であるといふ）・市民等の銀行があるが、軍政方面と關係を有しないものは無い。蓋し軍人の生活は銀行に依存し、銀行の生活も亦軍人に依存して、兩者一體となつて須臾も離れることの出來ない關係にある。卽ち軍費は卽刻巨額を準備する必要があるからで、從來も强制的の徵發借欵を行ふのが定例となつてゐた。然して銀行・錢莊は第一にその衝に當ることゝなり、一席の會談によつて借欵は卽刻成立し百數十萬元が動くといふのが常であつた。その所謂擔保は卽ち軍の實力で、かくの如き相互關係より軍人は銀行のつぶれることを恐れ、銀行は更に軍部の勢力の失墜を恐れることとなる。銀行に次ぐものは卽ち錢莊である。錢莊は民國元年の頃票莊に代つて起つたもので最隆盛時は五十餘戶に達してゐた。その後銀行も漸く勃興し、加ふるに市場不振のため貸付金の回收が頗る困難となつた。而も十餘年來重慶市場は屢次の巨變に遭遇した。卽ち江蘇一帶の鹽が湖南產の鹽の販路を奪つたがために年に千餘萬元の減收となり、外國爲替が暴騰して四川省の生糸・豚毛等の工業も亦大いに打擊を受け、年損失約七、八百萬に上つた。又頻りに大火に見舞はれ、この損失亦甚大にして、その他徵發・立替拂等が相繼いで負擔過重となり、加ふるに上海爲替の暴騰により各種の投機事業は悉く失敗に歸し、錢莊もこれに因つて閉鎖するに至るもの夥しく、市場の受ける影響は實に大なるものであつた。

五、燃料及び動力　四川省鑛產の豐富なるは衆知の事實である。然しその富源は徒らに地中に死藏せられ、採掘に當る人の無い狀況である。石炭の品質は悉く優良ではないが、產せざる土地なく、その產量も豐かである。重慶は兩河の交流地點に位置してゐるため運輸は極めて便利で、現在一荷（二十兩一斤で百斤）の賃價は約十角である。然しながら規模の稍々大なる工場

でなければ、蒸氣機關設置の能力はない爲に石炭の需用量は大して多くない。これに次いでは石油機關であるが、然しこの石油一噸の賣價も現在百四十元内外にまで高騰してゐる。又重慶市の動力工場は本年夏季に至らなければ完成を見ることは出來ないし、又假令完成し得たとしても、その發電力は僅に三千キロに過ぎないといふ狀態である。二十一軍は目下獨逸人を招聘して石油の産地及び埋藏量等を調査せしめ採掘に着手せんとしてゐるといはれ、實業部も亦採掘計畫を立てゝゐるといふ消息があるが、これ等が若し實現し得れば眞に結構な事である。

第十章　天　津

一、位置及び交通狀況　天津は北支に於ける商業の中心地で、上海・廣州・漢口と共に全國四大貿易港の一である。東には渤海を控へ南は靜海縣に連り西北は京兆に境を接して、東西七十餘里南北百二十餘里、永定・大清・滹沱・南運・北運の五河川は天津に於いて沽河と會して渤海に注ぎ、海へ出る唯一の門戸をなしてゐる。これより南は芝罘・青島及び上海、東北は秦皇島・營口の各港に至り、常に船舶が往來して航行極めて便利である。陸路の交通には津浦鐵道がこの地を發して南下し、山東の濟南、安徽の埠蚌を經て江蘇の浦口に至る。近時北平・上海間開通以後は僅か三十八時間を以て上海に達することが出來るやうになつた。北寧鐵道も天津を通過し、北は北平まで約二百四十餘里、東は山海關を經て奉天に至る。この外公路は、平津線の外に津保線・保安線があり、天津より靜海・大城・任邱・高陽を經て保定に至り、又南方安國に延びて河北省西南各地に通じてゐる。航空方面には既に滬平航空路が開設され、上海より海州・青島を經て天津に來り、更に轉じて北平に至る。その他郵便・電報・電話等の如きも、一として具備しないものなく、その交通の狀況は極めて利便である。天津の城壁は義和團事件に際し聯合軍に破壞せられ、今日はその城址にも街路が建設されて電車を通じ、市場として大いに開發されてゐる。租界は城址の東南沽河の兩岸にあり、英・獨・日・佛は右岸、墺太利・白耳義・蘇聯の租界は既に相前後して回收され、四特別區域に改められた。工業區域はいづれも支那街にあり、租界内には工場が甚だ少い。例へば西關外の南北小道子街・西關大街及び南頭窰一帶には工場が最も多く、大約三、四百工場といふ見積であるが、たゞ各工場とも規模は極めて小さい。その中織布工業のみで約六〇%以上を占め、眞に織布業集中區域と稱するに足るものである。北門外の候家後・三條石一帶がこれに次ぐもので、概算によればこれ亦二、三百工場に上るといふが、各工場何れも極めて小規模である。又三條石一帶はすべて鑄造業或ひは機械工場で、總計五、六十工場に及び、天津鐵工業の集中區域となつてゐる。この外南開の馬廠道附近は緞通製造業の集中地區で約五・六十工場を算してゐる。製粉業・紡績業・燐寸製造等の比較的大規模の工場は各地區に四散してゐる。即ち紡績工場では裕元・北洋等が小劉莊・掛甲等にあり、寶成、裕大等は小鄭莊、恒源は白河北岸西窰窪、華新は同じく于莊にある。製粉工場では壽豐第一工場が伊租界に、壽豐第二・三工場及び福星は梁家嘴・趙家場一帶に、嘉瑞は白河北部隄頭村にある。又燐寸工場では北洋第一工場が西頭芥園、第二が南開、丹華は西沽、榮昌は北岸趙家場にある。又塘沽も市區内に編入され、久大精鹽廠及び永利製碱廠がこゝにある。

二、市場概況　北支那商業は輸出入とも何れも天津を以て集散地としてゐるが、日本人が積極的進出を開始して以來、北支那の全局が脅かされると共に、天津市場も非常に萎靡するに至つた。加ふるに近年各地を襲つた經濟恐慌の影響を受けて、天津に於ける民衆の購買力は低下し、全商品の販路が澁滯して各工業いづれも不振狀態に陷つた。就中紡績業・製粉業の二工業は殆ど破産に瀕してゐる。蓋し天津に於ける紡績工場の製品は、河北省内に販賣される外、從來滿洲一帶が最大の販路であつたが、滿洲事變後は交通が阻害され稅額も增加して最大の販路を失ふに至り、且つ日本紡績のダンピングによつて、遂に各工場ともストック品山積の狀況を招來した。民國二十二年四月華商紗廠聯合會の決議せる職工淘汰の方法も採られたが、天津は上海及びその他各地と環境が異る爲、これに依るも救濟し得ず、近時聞くところに依れば恒源・北洋二工場は既に前後して停

業したといふ。天津の製粉業は早くより外國製品の壓迫を受けてゐたが、上海・無錫等の國產小麥粉の販路は殆どその大部分が天津である。故に各工場ともこの環境の下に於いて營業逼迫の極點に達せざるものなく、殊に滿洲の販路を喪失してより後の悲慘な狀況は推して知るべきである。この外緞通製造業の如きも國際市場の不振に影響されて甚大なる損失を來し、工場の閉鎖されるもの續出の狀況である。燐寸工業も亦瑞典及び日本商品のダンピングに因り、今や岌々として最大の危機に直面してゐる。その他各工業いづれも凋落の色を見せ、殊に天津事變以後の金融逼迫の爲、市場の不況は正に未曾有の現象を呈してゐる。

三、勞働者の狀況　天津の勞働者は民國十八年度天津市社會局調査の結果、合計四七、五六四人（註一）、その內紡績一業のみで三四、二六四人、卽ち全體の七二％强を占めてゐて、斯業の勞働者の天津勞働界に於ける地位を察することが出來る。勞働者の本籍地は河北が最も多く、山東省がこれに次ぐ。勞働者の待遇は各工業によつて不同であるが、その中塘沽の久大・永利の二工場が最も優秀である。普通の者で工賃の最高は二十四元、最低十元である。作業時間は三八制度を採用し、晝夜三班に分け各々八時間勞働制を取るものが多い。勞働者の福利施設も極めて完全で、職工補習學校・子弟學校・宿舍・食堂・倶樂部・運動場・浴室・醫院等具備せざるものは無い。次は紡績工場で普通職工の工賃は最高二十五元、最低七元五角、作業時間は二十四時間で日夜二班に分けて交替に行つてゐる。施設の方面にはこれも同樣に補習學校・子弟學校・宿舍・食堂・浴室・醫院等がある。更にその次は製粉工場及び燐寸工場であるが、緞通製造・織布・針織・鐵工業等に於いては待遇が幾分差を生ずる。卽ちその職工の大部分は見習工によつて占められ、正式の職工は極く一小部分に過ぎず、各工場とも規模狹小で設備も甚だ不完全なものであり、僅かに數室を占めてゐる爲、勞ひ職工も殆ど一ケ處に雜居することゝなり、採光通風の極めて悪い仕事場は職工の衞生上にも非常に有害である。作業時間は平均約十二時間、多忙の時は更に三、四時間夜勤を行ふこともあり普通その工賃は每月六元より十八元のものが多い。天津の職工團體としては、例へば紡績・製粉・燐寸・緞通製造業等にあつては勞働組合の組織があり、勞資の間に時に紛糾を生ずることがあつても、市社會局及び黨部の調停によつていづれも圓滿に解決してゐる。尙民國二十二年四月全國紡績工場が職工の整理を決議してより以後に於ける天津紡績工場の緊縮政策の狀況の如きは、當地勞資關係に於ける一重要史料と稱することが出來よう。

四、金融狀況　天津は北支に於ける金融の中心であるから、金融機關も北支那各地の內で最も多い。銀行は現在五十餘あるが、その內支那系のものが過半數を占め、金城・中央・鹽業・大陸及び中國・交通の諸銀行等の營業が特に發達を示してゐる。外國銀行には麥加利・匯豐・花旗・東方・匯理・華北・義品・正金等十餘行があつて、いづれも營業順調である。天津の錢業は一般に銀號と總稱され、租界支那街を併せて合計八十餘戶、比較的大規模のものがその內約三十餘戶である。その主要業務は預金・貸付及び爲替であるが、又公債の賣買及びその他の投機事業を主とするものもある。銀號の貸付には三種あつて、一は信用貸付、二が保證貸付、三が擔保貸付で、貸付利息は最低八厘、最高二分である。各金融界は北支事變以後いづれも緊縮政策を採り、且つ又天津事變の影響を受けて、取引も極めて不況に陷つた。天津の舊時の通貨は上海と同樣銀兩を單位とし「行化」と言つてゐたが、民國二十四年四月廢兩改元後各種の取引に於いて銀兩計算は漸次減少した。天津で通用する銀元は上海と大體同じで、紙幣にも內國銀行紙幣及び外國銀行紙幣の二種あるがその狀況は大體上海に類似してゐる。

五、燃料及び動力　天津の工場は民國十八年度に於ける市社會局の調査の結果によれば、二千百八十六工場に及び、その內動力設備のあるものは僅かに百十六工場、總數の五・三％强に過ぎなかつた（註二）。これによつて當時の業界には動力使用が普及してゐなかつたことがわかる。今回の調査では全市で工場法の適用を受ける工場約百五十工場、この外にも動力を設備してゐるが、工場法の適用を受けないため、調査を行つてゐないものが更に數十工場に上るといふ見積である。雙方を比較すれば民國十八年より同二十二年に至る五ケ年の間に、動力設備を有する工場が百餘工場增加を見、今や天津の工業は漸次動力使用の趨勢に向ひつゝあることは疑ひの無いところである。天津に於ける動力使用工場で規模の稍々大なるものは何れも發動機を

設備してゐる。例へば紡績工場六工場はいづれもタービン發電機を設備し、製粉工場五工場の内四工場の如きは蒸氣機關を設けてゐる。塘沽の永利廠もタービン發電機を有してゐるが、該工場は全工場作業機を運轉する外、久大精鹽廠の全工場の電力を供給してゐる。その他の各工場にして租界内にあるものは、當該租界發電所の電力を使用してゐるが、電氣料は一キロワット約一角、支那街にあるものは支那側發電所より供給し、その電氣料は一キロワット一角六厘五毛である。動力發生用の燃料は主として石炭で、その大半は開灤及び井陘より來て居り、開灤炭は一噸約七元五角、井陘炭は約九元四角である。

註一　天津市社會局『統計彙刊』

註二　同

第十一章　濟南

一、位置及び交通狀況　濟南は山東省の省城で、省内西北部に位してゐる。津浦・膠濟の兩鐵道は縱横にこの地を交馳し、交通便利にして南北諸省連絡の要衝である。陸路膠濟鐵道によつて青島港口まで行程三百九十餘粁僅かに十一時間にして達し更に煙濰公路と相連絡して龍口・芝罘等に達することが出來る。津浦鐵道は南は浦口、北は北平・天津に通じ、隴海・北寧の各鐵道に接續して、北支那各地の商品を吸收するに充分である。水路は小清河より章邱・博興・廣饒等の縣を經て羊角溝に達し、濟南と渤海沿岸間の唯一の交通路をなす。商埠地は西關外にあり、城外約四里、道路は整然として商店櫛比し、創立僅に二十餘年にしてかくの如き發展振りを見るのは、眞に急速であるといふべきである。工場區域は梁家莊・官紮營・三里莊・東流水一帶である。梁家莊は煉瓦工場が集中してゐる地區で、裕昌・大興等九工場がある。三里莊・官紮營は製粉工場地帶で成豐・華慶・寶豐・惠豐の四工場があり、東流水には濟南電氣公司・成記・豐年兩麵粉廠及び華興造紙廠等七、八工場がある。その他魯豐紗廠は林家橋に、成通紗廠は新引河畔に、津浦鐵道工場は北大槐樹にある。

二、市場概況　濟南は交通便利物産豐富にして、これがため工商方面も自然相當の發展を遂げてゐる。光緒三十年開港以來各工業の工場が相繼いで設立され、市況は眞に旭日昇天の勢を見せてゐた。即ち民國四年には豐年・魯豐・振業等の工場あり、民國七年には惠豐・義利等の工場が設立され、民國八年より同十年に至る間には民安・茂新・濟豐・華慶及び成豐等々の工場が出現した。然るに民國十年以後は連年戰爭の影響を受けて經濟が不調となり、同十七年五月の濟南事變の發生に遭遇して、民力は窮乏し市場も頓に凋落を呈した。國民政府の統一後は社會の秩序漸く安定し、農産物の收穫も以前に比べて稍々豐富となつたので市場も漸次復興して來たが、圖らずも再び滿洲事變は吳淞・上海に波及し、各業は又極めて大打擊を蒙つた。加ふるに年來各地の經濟恐慌によつて農産物の市價は低廉となり、各地より濟南に集中する落花生・小麥・高粱等産物の販路が澁滯して、ストック山積の狀態を現出した。例年他省に向けて販賣してゐた多量の商品も、今日は殆ど顧る人さへ無い。例へば製粉業の如きは全市に七工場あり、一昨年迄各工場いづれも薄利を擧げてゐたが、近時は販路澁滯のため營業狀況が大いに低落してゐる。これはもとより外國製品の多い爲にもよるが、然し環境の惡いといふ事も大いに影響してゐる。

三、勞働者の狀況　當地の勞働者は約九千人内外で、原籍は山東省が最も多く、江蘇・浙江の者は大概各工場發動機室の機械工になつてゐる。全勞働者の中製粉・紡績の二業に從事する者が殆んど四〇%を占め、製粉業約七百人、紡績業約二千八百餘人である。勞働者の工賃は普通一月六元より二十元までで、主食物は麥粉が普通で、一袋四十四斤半で賣價は三元一、二角程度であるから生活程度も幾分低い。紡績工場の勞働者は待遇が稍々これに優り、工場方面に宿舍及び食事の設備があつて宿泊料は要せず、ただ食費としては一日僅々九分を差引かれるのみである。作業時間は平均十一時間である。勞働組合は現在いづれも撤廢され、外に勞働者の團體の如きものは無い。

四、金融狀況　濟南の金融は、往時は日本人の掌中に握られ、正金・濟南・朝鮮の三銀行があり、その勢力は頗る盛大であ

つた。支那系銀行には中國・交通・山東・齊魯銀行等があつたが、これと對抗する事は極めて困難であつた。その後青島回收後に及んで、支那系の銀行も漸く活動するに至り、前後して設立されたものに大陸・中國實業・上海商業・邊業・東萊・四明等の數銀行がある。然るにその後連年の兵變及び濟南事變を經過して、各銀行とも相繼いで停業するか或は撤廢され、辛じて現狀を維持したものは僅かに中國と交通の二銀行である。國民政府の統一後、中央銀行も濟南に支店を設立し、大陸・上海商業・中國實業等の銀行も亦その營業を恢復した。又少し後れて山東平市官錢局及び民生銀行も前後して設立せられたので、一時金融界も活氣を呈するに至り、各工業とも資本の運轉が圓滑となつて來た。濟南の銀號は合計六十餘戸あり、範圍の幾分大なるものはその内三十餘戸で、各戸の業務は先づ順調に發達してゐるといふことが出來る。銀行と銀號の貸付には信用貸付と擔保貸付の二種あり、利息は最低八厘最高二分である。この外尚二十餘の質屋があるが、何れも日本人の經營で利子は貸金の多少によつて定るが二十元以下は一ケ月七分、五十元以下は六分、百元以下は五分である。質入期間は三ケ月で、一日期限を經過しても一ケ月と看做すことになつてゐる。かくの如き短期及び高利の剝取を受ける貧民の困窮は實に一方ならぬものがあつたので、當局はこゝに鑒る所あり、省庫より二十萬元を支出して裕魯典當を城内に設立した。その利子は毎月二分、質入期間は一ケ年で、日本商人のものに比較して遙かに優越してゐる。濟南の流通貨幣は、銀貨では袁世凱肖像彫刻の銀貨が多く、紙幣は財政廳發行の省庫券及び山東平市官錢局發行の十仙紙幣も盛んに流通してゐる。中國・交通・中國實業等銀行の發行する紙幣は濟南の印を捺してあるものゝみ適用してゐる。濟南の各金融機關は近年來いづれも緊縮主義を採つてゐるので、取引も極めて不活潑である。その主要原因としては一に近年來の農產物の暴落により頓に不振を來たしたこと、二には時局不安定のため市面の逼迫したことによる。

五、燃料及び動力　山東省は石炭の產出が豐富で、博山・淄川等には、いづれも炭礦が開發されてゐる。濟南は膠濟鐵道による運輸の便があるので、石炭は遂に各工場の動力發生の主要原料となつてゐる。一噸の市價は約十二、三元である。柴油は極めて少數であるが、スタンダード及びテキスサ會社等の製品で、一噸約八十餘元である。各廠の使用する動力には、製粉工場の内、五工場は蒸氣發動機を備へ、二工場は瓦斯機關を用ひる。津浦線鐵道工場及び二紡績工場は各々タービン式發電機を使用してゐる。この外棉花包裝工場及び煉瓦工場・鐵工場の如きはいづれも石油タービンを設置し、その他の各工場は濟南電汽股份有限公司の供給する電力を用ひてゐる。電氣料は一キロ一角三分で各地に比較して高價であり、且つ電力不足のため使用するのは幾許もない有樣である。近時聞く所によれば、該公司は既に發電機を增設して範圍を擴充し、電氣料金を低廉にして消費者側の負擔を輕減し、以て電力の使用を普及せんと努力しつゝあるといふ。

第十二章　厦門

一、位置及び交通狀況　厦門は福建省の要衝で、支那東南部の良港である。この地は東方臺灣を距ること僅かに六百里に過ぎず、南は南洋群島に對し、西は廣東の各港に通じて、水路の交通は便利を極め、數萬噸の巨船も容易に航行することが出來る。その主要なる航路としては第一に福州線があり、距離約二百哩で、十六時間にて達し、第二は上海線で約五百十餘浬、五十時間を要し、第三は香港線で約二百八十餘浬、二十七時間を以て到達し得られる。内海航路として例へば泉州・涵江・海口・安海等數多の地點との間に小汽船が航行してゐる。

全島の周圍約百二十餘里、市場は西南隅にあり、各商業が雲集し、その勢力は福建省沿海各港を支配するに足る。福建省民で海外に移住する者は多くこゝより出帆する。鼓浪嶼は厦門の西方三里の地點にあり、海中に屹立して風光明媚、近時亦租界を開いてゐる。漳化・大同・兆和等の罐詰工場及び東方冰廠等は皆この地に設けられてゐる。漳州は厦門を距ること約七十餘里、漳厦鐵道があつて奥地通行の要路をなす。該鐵道は數設が頗る早かつたが、たゞその線路が甚だ短く經營も亦不完全で、

且つ民國十九年十月漳州厦門間の公路開通以來、その營業は大影響を蒙つてゐる。

二、市場概況　厦門は阿片戰爭以後南京條約を以て開かれた五通商港の一つである。開港以後商業は繁盛を極め福建全省中第一位で、物産及び外國商品はすべてこの地に集散される。輸移出の物産では農産品が大多數を占め、就中茶が主である。製造品は工業があまり發展してゐないため極めて少い。年來各地に土匪が横行し、農産物の收穫が減少すると共に茶業が失敗したため、國産品の輸出は日に減少し、これに對して外國商品の輸入は却つて年々增加するに至つた。海關統計によれば、民國九年より同二十二年までに輸入貿易は二倍餘に增加し、入超は三倍になつてゐる。誠に外國商品にとつては唯一の販賣地になつてゐる。

三、勞働者の狀況　厦門の工場數は少く、勞働者も亦從つて少い。その内新式工業に從事する者は一、二千人に過ぎない。原籍によつて分類すれば大部分漳州・泉州等の地方が多く、他省では廣東・廣西の者が主であるがその數は極めて少い。性別によつて分類すれば男子は八〇%、女子は二〇%を占めてゐる。工賃は一ヶ月平均十五元内外であるが、厦門の生活程度は頗る高いので、一切の日常費を除けば貯蓄し得るものは甚だ少い。作業時間は平均約十時間内外であるが、たゞ海軍造船廠は八時間で、一切の待遇も他の工場に比較して優れてゐる。厦門の勞働組合はいづれも民國十六年の清黨運動以後に成立し、數回の改組登記を經てゐる。然して登記の際には必ず登記費を納めねばならないので、この爲近年停業の止むなきに至るものが頗る多い。

四、金融狀況　厦門は支那沿海の大開港場の一で南洋一帶との關係が極めて密接である。從つて華僑にしてこの地向爲替送金をなすもの年に千萬元を數へる。故に爲替機關は特に發達し、合計三十餘の匯兌局があり、專ら南洋各地及び國内各大開港地の爲替業務を取扱つてゐる。手數料も郵便局に比較して低廉であるから、その營業は頗る活況を呈してゐる。銀行には中國中南・中央・華僑・厦門・匯豐・安達等十餘銀行がある。錢莊には餘裕・德成等九十餘戸あり、資本の多いもので百萬、少いものは五、六萬である。現在市場金融の逼迫の爲に時に閉鎖するものもある。この外に質屋が十餘戸あつて、金珠玉器は利息二分、その他は三分で、二十ヶ月滿期である。厦門の流通紙幣は中央・中國・交通・中南の四銀行の紙幣が普通であつて、銀貨は袁世凱及び孫文肖像彫刻の銀貨が流通してゐる。小銀貨には廣東毫洋がある。一元は二角六枚と交換され、二角銀貨は銅元約四十枚と交換せられる。

五、燃料及び動力　厦門の工場に於いて使用される燃料は、石炭と柴油の二種に分れる。石炭は一噸約十二元で、大半は日本より輸入して居り、國産品は比較的少ないが價格は大體同樣である。柴油は英國米國より來り、一噸約九十餘元である。各工場の動力は厦門電汽公司に蒸氣タービン機を設置してゐる外、その他の大工場はいづれも石油發動機を設備してゐる。電力に至つては價格極めて高價にして、使用者の負擔が過重なるため、これを利用するものは極めて少い。

第十三章　梧　州

一、位置及び交通狀況　梧州は漢代には蒼梧郡と稱し、唐代に梧州となり、明・清以後府に改められた。この地は西江と桂水の合流點に位して、廣西・雲南・貴州の貨物集散の中心地をなして居る。天然の地勢により、水路の交通は便利であるが、隻鳥空を翔るも、偷越する能はずといふ天險の地である。舊城は大雲山麓に建設され、山を繞らし水に臨み、舟中より仰ぎ視れば天閣に登るが如く、桂江・禄江の兩江は城下をめぐり、清流激湍に檣楫林立して江山の景は一幅の繪のやうである。近年廣西省當局は鋭意その建設に力を注ぎ、既に城壁を取除いて城外と連接し、街路を修築して交通の利便を圖つたので、萬商雲集して旅行も甚だ便利となつた。西江は廣西全省を縱貫し汽船は邕寧まで遡航することを得、こゝより百邑に達するものが廣西省運輸の幹線である。桂江は北より南流し、汽船は平樂迄達することが出來る。その他河流が縱横に交錯して、舟運は實に

便利を極めてゐる。西江は南流して海に入り、香港の汽船帆舟は遡航して三水を經て梧州に達する。粵漢鐵道の支線は既に三水に通じ、廣西・廣東兩省間の交通は更に便利を加へてゐる。廣西省内公路の建設も、日を逐ふて增加しつゝある。梧州・邕寧間には既に早くより自動車が通じてゐる。平樂より梧州に至る公路も久しからずして完成を見るであらう。交通開發の管理法が宜しきを得てゐるので旅行も頗る便利を感じてゐる。廣東・邕寧間の航空路も既に開通し、更に些か稗益しつゝある。

二、市場概況　廣西省は邊陲の地に位し、住民は貧しく地味も瘦せてゐる。住民の内、農業に從事する者は八、九割を占め商工業の發達は極めて後れてゐる。然しながら、梧州は廣西省の南端に位置し、西江の中流を扼してその地位は揚子江に於ける漢口に類似してゐる。東は廣州に達し南は香港に通じて、廣西省の門戸、對外貿易の中心をなしてゐるので、その地位上竝に交通上の關係より近來日に都市化されつゝある。光緒二十三年英支雲南ビルマ條約によつて商港として開かれ、同年海關が成立した。現在人口約八萬五千、商家櫛比して商業繁盛を極め、商店の數は約千三百餘戸に上る。資本總額は約三百萬元であるが、多くは外國商品を販賣し　消費が主で製造業は依然として手工業が多い。機械工業の如きは單に雛型程度のもので、製品も外國品とは到底競爭不可能なことは言ふまでもない。從つて發展は容易でなく、現在政府の經營する工場で動力を使用するものは硫酸工場一、電力工場一、民營工場では二十餘工場に過ぎないが、手工業製造は約七百餘工場ある。商工業は廣西人經營のものを除けば、一部分は廣東人によつて占められてゐる。輸入品は綿糸・綿布・燃料・麥粉・白砂糖・卷煙草・海產物・燐寸・金屬・自動車等が主なるものである。輸出品は農產物が最も多く、卽ち椎茸・木耳・瓜子・油類（種油・桐油・茴油・桂油を含む）・煙草・赤砂糖・藥材・家畜及びその製品・香料・大麻・滿俺鑛石・粗紙・木炭・米及び藍（リクイッド・インディゴ）等がその主要なるものである。民國二十年海關輸出入額合計三〇、〇八五、一六九海關兩で梧州はその八〇％を占めてゐるが、廣西省に於ける重要な地位にあることはこれによつても想見し得る。廣西統計局の發表による民國二十一年度の對外貸借概算によれば、廣西省の貿易入超額は九、三〇〇、〇〇〇元であつて、實に大きな數字である。

三、勞働者の狀況　梧州に於いては少數の機械製造勞働者を除く外の大多數は、手工業勞働者で合計約五千餘人である。近年全工業が不況となつて失業者が續出し、工賃の收入も自ら制限されて生活は極めて苦境に立つてゐる。技術工の工賃は一般の勞働者に比較して高く、故にその生活も亦比較的に裕かで、最高者は月收毫洋七十元、最低の者は毫洋二十元の收入を得てゐる。非技術工の月收は最高約毫洋二十元・最低約六元である。教育程度は頗る低級で、文字を識る者は極めて少い。梧州には現在勞働組合が十餘ケ所ある。然しながら勞働者の生活に對しては何等の改良も行はれてはゐない。

四、金融狀況　梧州は廣西省出入の要道で、商業も發達して、金融の週轉は大體この地を中心としてゐる。銀行は廣西銀行一行があるのみである。銀號は五十餘戸に上つてゐるから、大部分の勢力は諸銀號の掌中に握られてゐる。廣西省は往時軍閥專政時代紙幣を濫發した結果、廣西省銀行の信用は地に墮ち、維持不可能の狀態となつた。民國二十一年廣西省當局は重ねて銀行を組織して民間株を受入れ金庫を代理せず官民合辦とし、公稱資本毫洋一千萬元とし、こゝに於いてその信用も始めて恢復した。現在市場に流通してゐるものに該銀行の金庫券及び兌換券があり、毫洋と同價値にて通用し人民は甚だ便利を感じてゐる。この外に通用してゐるものには港紙卽ち香港の匯豐銀行・有利銀行及び麥加利銀行の發行する紙幣がある。爲替價格は騰落常なく大體毫洋一元四、五角であるが、未だこれを以て直接に取引してゐない。補助貨幣は雙毫銀貨（譯註　二十錢銀貨）、銅貨は十文のものが流通し、桂林で使用する二十文銅貨は梧州に於いては通用しない。銀貨には國幣の龍洋（譯註　清末鑄造の銀貨、龍形の花紋あり）袁頭・孫頭の三種、外國貨幣の港洋（香港ドル）及び鷹洋の兩種がある。銀號の業務は外くは預金・貸付・爲替竝に地金地銀及び各種貨幣の賣買である。時に又政府の許可を得て兌換券に似た一覽拂手形を發行してゐるものもある。この外に質屋が五戸あり、貧民の金融上の調劑として甚だ重要なる位置を占めてゐる。その資本金は合計約五萬元、一年の營業總額は約二十萬元である。

五、燃料及び動力　梧州は西江に臨んで、巨船も自由に到達し得られる。外は香港・廣州に通じて廣西省の門戸をなし、工

業も比較的發達してゐるが、香港・廣東と比較する時は、尙その後に追隨することは不可能である。現在動力を使用してゐる大小工場は僅か三十に過ぎない。動力機としては石油機關が多く、モーターがこれに次ぐ。その他蒸氣機關・瓦斯機關等の如きは使用するもの幾何もなく、能力を總計して見ても僅々三百餘馬力に過ぎない。燃料は多く柴油及び薪であるが、これは廣西省に林產が極めて豐富であり、且つ外國石炭の輸入價格が比較的高價であるためである。モーターは便利で費用の節約ともなるので、小規模工場の需要には適するが、惜しいことに大規模の發電所が無いため使用する者は依然少い。

第十四章　廣　州

一、位置及び交通狀況　廣州は番禺縣にあり、春秋の時五羊啣穗の故事よりして此地を五羊城とも稱する。その位置は東・西・北三江の合流するところにあり、北には白雲山が峙え、南は大海に臨み、珠江がその間を横に貫流して南北の兩岸を分けてゐる。外は虎門の險を扼し、內は長洲の諸要塞を抱き、地勢雄偉にして南支の重鎭をなしてゐる。舊時は城壁があつたが、民國八年に撤廢して街路を建設或は擴張した。近時海珠鐵橋を建築して河南と相通じ、堤防に沿つて渡船場を設置したので、南北兩岸の交通は頗る便利となつた。その對外交通は水陸共に開け、陸路には廣九・廣韶・廣三等の鐵道がある。廣九鐵道は借款關係より支那線・英國線の兩段に分れ、廣州より深圳に至る間を支那線とし延長一四三粁、深圳より九龍に至る間が英國線で延長三六粁である。廣州・九龍間全長一七九粁の所要時間は約三時間十分である。廣韶鐵道は元來粵漢線の一部で、民國十九年一月國有に歸し粵漢鐵道南段と改稱した。現在は韶州より樂昌まで開通して居り、廣州より樂昌に到る延長二七三・九一粁の所要時間は約十時間半である。樂昌・株州間の路面も既に十分の八は竣成してゐる。たゞ途中の橋梁はまだ架設されてゐないが、將來この線が完成すれば南北の交通は大いに便利となるであらう。廣三鐵道は粵漢鐵路局の經營に合併せられてより、粵漢鐵道廣三段と改稱したが、廣州石圍塘より三水縣城に至る延長四八・九二粁、所要時間は僅かに二時間である。水路の交通も亦頗る便利で、三江は縱列し、河流は四通八達してゐる。即ち東江では汽船で惠陽まで達し、こゝで民船に乘替え、北に遡航して汕頭に達することが出來る。西江は汽船にて梧州に直航することが出來、實に廣西省に通ずる大道をなしてゐる。北江では英德で民船に乘替へ南雄に到達し得るので、實に江西省に入る重要なる河川である。香港へは巨船常に往復し、所要時間六時間で到達出來る。以上は水陸交通の概況である。

二、市場概況　廣州は南支那海に臨み、航海は極めて便利である。開港前に於いても、既に外人との通商が行はれてゐたが開港を見るに及んで對外貿易は頗る隆盛を極めて來た。且つこの地は南洋群島に近く、廣東省の住民にしてこの地に移住して商業を營む者は、日と共に增加して來た。從つて西南各省の產物で、外人竝に華僑の需要に應じて輸出されるものは、何れも、先づこの地に集中されて後輸出されるので、市場は更に繁盛を極めるに至つた。民國成立以後、一部の華僑は歸國して大いに實業を振興し、こゝに於いて一般の工場の如きも一時殷賑の極點に達し、その製品の販路も大部分は南洋群島に向けられてゐた。然しながら近時劣等品のダンピングと外國關稅障壁の引上によつて、昔日旺盛を極めた南洋向けの貨物、例へば綿布・護謨靴・懷中電燈等の如きは、歐米向けの生糸と共に急速に不況を呈するに至つた。更に年來國內では共產黨の騷擾があり、國外では世界經濟界の不景氣に影響されて工業は衰微し、市場は澁滯を來してゐるのは眞に今昔の感に堪えない。即ち近年廣東省內の土法石油工場も近年殆ど停業し、又製糸工場も開業してゐるものはその三分の一にも及ばない。その他廣州の各業工場も危殆に瀕してゐないものはない。これによつてもその衰落せる狀況の一斑を窺ひ知ることが出來る。

三、勞働者の狀況　廣州には工場が頗る多く、勞働者の總數は不詳であるが、土地の事情に詳しい者の見積によればその數十萬以上に及ぶと言つてゐる。然しながら現今工業が衰微して勞働者の失業する者多く、今尙ほ職業を有するものはその半數にも及ばない有樣である。その內織布業の職工が最も多く、護謨・針織及び燐寸工業等の如きものがこれに次ぐ。また女工が

多數を占め、殊に織布工場の如きは、機械運轉及び漂染等を少數の男工が行つてゐる外、他の大部分は總て女工である。工賃は女工は一日最高約五角、最低約一角半、男工は一月最高約四十元、最低約六、七元である。護謨製造男工は一月最高約四十五元、最低約十元、女工は一日最高約六角、最低約二角である。針織工の工賃は織布工と大體同樣である。燐寸工場の女工は專ら包裝作業に任じ、一日の工賃は最高約四角、最低三角である。男工は一月十五元より三十元までゞある。機械工場と鑄造工場とは何れも男工で、一日の工賃は、一元半から八角までが普通である。搾油工場の職工も亦男工で、一月約十五元乃至二十元の間である。精米職工は大體月十五元内外である。傘骨製造男工は一月約二十五元、女工は一日二角から四角迄である。化粧品に於ける女工は一日約二角より四角半、男工は月十二元より二十元までとされてゐる。各業工場の男工は多く工場側から宿舍及び食事を支給せられるが、女工は何れも自費である。男工の工賃は機械工が最も高い。蓋し機械工は比較的熟練した技術を有して居り、且つ多くは機械工の勞働組合員であり、該組合は組織的團體であつて、勞働界に於いても頗る大きな勢力を持つてゐる。

四、金融狀況　廣州の通用貨幣は、廣東で鑄造する雙毫及び廣東省銀行竝に廣州市立銀行の發行する一元・五元・十元の紙幣、市立銀行の發行する一毫補助紙幣等を以て、直接使用可能のものとする。大體雙毫五枚は銀洋一元に當り、紙幣も銀貨と同樣に通用し、補助紙幣一毫は銅貨二十一、二枚と交換が出來る。上海・香港に於いて通用する銀貨及び紙幣は、廣州では直接には使用出來ない。從つて先づ兩替店に赴き當地通用貨幣に兩替しなければならない。その價値は銀貨と紙幣の兩種に分れるが、凡そ國幣一元は毫洋一元一角四分から一元二角に交換せられ一定してはゐない（但し六月に於いては國幣一元を毫洋一元二角に交換せられる）。上海通用の紙幣一元は毫洋一元及び銅貨八枚乃至一元一角に交換せられる。交換率の騰落は總て需要供給の關係によつて轉移し、毎日數回の變動を示してゐる。たゞ香港貨幣の兩替に當つては、銀貨と紙幣との區別が無く、その市價は港幣一元が毫洋一元二角半に價する。兩替店は市内到るところに存在し、極めて便利である。對外爲替業務は大部分銀行の手を經て行はれて居り、銀行としては現在廣東省立・廣州市立・中國絲業・鹽業・國華・東亞・國貨・興中・華南及び上海商業等合計十餘の銀行がある。外國銀行は何れも沙面に在り、匯豐・麥加利・横濱正金及びフランス等の數銀行がある。この外銀號の數も頗る多く、總計約百五、六十戸に上る。大部分は合資經營で、その業務は上海の錢莊に類似してゐる。

五、燃料及び動力　廣州の工場に於いて使用する動力には、電氣モーター・石油機關・瓦斯機關等の三種がある。就中モーターを使用するものが大多數を占め、石油機關がこれに次ぎ、瓦斯機關は僅かに少數の搾油工場で採用せられてゐるに過ぎない。蒸氣機關も使用するものがあるが極めて少數である。モーターの電氣料金は用量の多寡によつて定るのであるが、大體五分七厘七から八分五厘程度のものが最も多い。柴油は一噸七十元乃至八十元の間であつて、その價格の高低は外國爲替の騰落によつて變動してゐる。瓦斯機關に使用する石炭は大部分舶來品で、一噸三十一、三元である。普通燃料に供せられる石炭は、その種類と來源とは頗る區別し難い。蓋し外國炭は大部分南洋を經由して支那に輸入せられ、俗に三孖嘴と稱し、又印度炭とも言つてゐるが、實際の來源は全く知られてゐない。外國炭の品質は開平石炭の優秀なるには及ばないが、一般石炭商人は開平炭が比較的高價であるので、何れも少量の開平炭に多量の外炭を混じて發賣してゐる。その價格は一噸約二十二、三元である。

最近廣東省政府は、工業方面に關する三ケ年施政計畫を樹て、短期間に多くの重要工場を設立し、以て西南實業界を振興し工業經濟を統制せんと圖つてゐる。その計畫内容は、卽ち製糖工場四（廣州二工場、惠陽及び汕頭に各一工場）、蜜柑水工場及び酒精工場各一、セメント工場二、燐酸肥料及び窒素肥料工場各一、發電所二、麥酒工場一、硫酸工場一、苛性ナトリウム工場一、鋼鐵工場一、絹織物工場一、絹糸麻糸工場一、綿糸紡績工場一、毛織物工場一、織布工場一、製糸工場一、合計二十二工場を設立せんとしてゐる。その内既に成立し、或は開業してゐるものは、綿糸紡績・絹織物・製糸・製麻・セメント・硫酸等の工場である（硫酸工場は現在停業してゐる）。成立してゐるが未だに製品を出してゐないものに廣州の砂糖工場がある。セメント

工業では河南と西村に二工場あるが、既に久しい以前から製品を出してゐるのみでなく、近時西村を二工場に擴張するといふ案が出されてゐる。その他も現在何れも進行中である。以上は西南三ケ年施政計畫中工業關係の概況を述べたものである。

第十五章　汕　頭

一、位置及び交通狀況　汕頭は往昔韓江下流の一漁村に過ぎず、唐の時代には鰐の繁殖地として知られてゐた所で、汕頭を距ること二十里許りの處に鱷浦（鰐浦）がある。雲層重疊して星辰繁く、煙波漂渺として瘴癘の集る所、一度この地に來らば輒ち死すとさへ言はれてゐた。唐の韓文公は潮陽に流謫され、轡煙荒雨八千里の方に長安を偲んで涙を流したといふ。然るに圖らずも今日になり、汕頭の地は單に潮州・梅縣一帶の對外貿易の重鎭をなすのみならず、支那南部の良港となるに至つた。眞に滄海桑田の演變と言ふべく、人力の天然に優つた結果に外ならない。澄海縣志の中に述べる所によれば、「本縣は開發以來海上波靜かにして商賈は財富を積む者多く、その交易は悉く巨利を博し、他省に販賣する者は上は律門に遡り、下は臺灣・厦門に達してゐる。象牙・犀角・金玉及び錦繡皮幣の類は、多數の船舶によつて澄海縣より諸邑に分送せられ、その內海南諸郡より白米を輸送して來るものは、殊に潮州全民衆の待望する所のものである。春秋二季の新米登場の頃は、東西の兩港及び溪東・南隴沙・汕頭・東隴港の間に貨物を滿載して往來する帆船の數は千萬を下らない。かくて縣內いづれの土地にあつても民產は極めて豐富で、各々貨物を山積して販路を待ちつゝあり、誠に海邊に於ける一大都市をなしてゐる」と。開港以前に於いてすら、斯の如く隆盛を呈してゐたのであるから、況んや現今の繁榮は論ずる迄もない。

汕頭は北緯二十三度十分、東經百十六度三十九分に位置し、澄海縣域西南端の一鎭で、廣東省の東部である。自然の形勢上より言へば當然福建省に入るべきであり、且つ汕頭語は厦門語に近似してゐて、廣東語とは判然たる區別を有してゐる。これは蓋し五嶺に隔絕されて、一は嶺東、一は嶺南に在るからである。前淸咸豐八年（一八五四年）天津に於ける英支講和條約によつて、潮州・臺灣・登州・瓊州・牛莊を通商港として開いた時、潮州は數度の交涉を經た後、始めて汕頭を以て主要港とした。かくて商業は日に隆盛に趨いて、外人の居留する者多く、同治三年（一八六四年）潮州海關を設立した。同九年には英國は領事館を潮州に設けたが、これは政治の中心が潮州府に在つたからであつた。然し外人は依然として汕頭を重要商港となし、潮州府に比較して遙かに、有望であると見て、汕頭の經營に鋭意努めた結果、遂に今日各國人の雜居する大都會となり、交通の中心、商業の重鎭たる地位を獲得した。民國十四年始めて汕頭を普通市に改め、市區は從來の舊市場、新開地の崎碌及び對岸の礫石を包括してゐる。民國十年市政施行の際（當時は市政廳と稱す）、これ等三地區を總稱して汕頭市とした。當時の陸地面積は僅かに二百六十五方里、海上面積三百二十七方里に過ぎなかつた。汕頭は東西南の三方は海に臨み、北は平原に接してゐて海の深度は三十六尺乃至四十二尺であるが、たゞ入口卽ち媽嶼港は甚だ狹く且つ淺いから、更に掘下げなければならない。海關前より崎碌砲臺に至る間の諸堤防は、最近の內に竣工の豫定で、堤防と媽嶼港口と相通じ、港內の浚渫が實施せられたならば、市區は五萬八千六百七十七方丈の面積を增加し、海岸線も亦一萬六千百六十尺延長することが出來る。この數年來海岸の堤防も漸次增築擴張され、西堤は既に竣工し、東南堤も亦積極的に進行中であるから、完成の期日も遠くないであらう。將來この工事の竣工の曉は、相當大きな船舶も直接出入することが出來るやうになり、商業の發展は更に見るべきものがあるであらう。

汕頭の交通の內、陸路には潮汕鐵道があり、淸の光緒二十九年に建設され、北は潮安迄達し、その延長は二十六哩半である。汕樟輕便鐵道は僅かに澄海迄達してゐるだけであるが、この外にも汕樟・汕饒自動車道路がある。廣汕鐵道は當分完成不可能であるが、廣汕公路は惠州を經て廣州に達する。然しながらこの公路は修築が粗雜で、道路經營の費用も乏しいため、運行に際して動搖甚しく、旅行にも難澁を感じてゐる。水路交通は、東方厦門まで海上百三十二哩、西南は香港を距ること同じ

く百八十四哩で、航行一晩にして到達し得る。南は南洋群島に對し、北は天津・上海等の諸港に達して、運輸は極めて便利である。又內河の交通としては先づ韓江が全長約二千里で舟行可能、その次が揭揚河・饒平河・練江・龍江等の河川である。その下流地方は小汽船の航行に適する。近時廣州・汕頭間にも既に無線電話が設置され、汕頭・澄海・饒平・陸豐・揭揚等各縣間にも普通の長距離電話がある。然して上海・廣東航空路も亦既に開通し、郵便物の輸送も以前より遙かに迅速となつてゐる。

二、市場概況　汕頭は開港以來既に七十有餘年、商業は日と共に繁榮し、現在人口約十九萬、市街の建設も亦頗る廣大且つ整然たるものである。然し廣東省の租稅の苛酷なること、竝に世界的不景氣の影響を受けた爲に、商業は從前の如く活潑でない。輸出品は農產物が主で、國產砂糖の從來の輸出額は每年約千餘萬元であつた。然し近年は外國砂糖の排斥を受けて三百萬元に降つてゐる。近時廣東省は砂糖の專賣を實施し、更に一新式砂糖工場を揭揚に設けて、一面には密賣者の取締を斷行すると共に、一面には製品の改良を行つたため稍々挽回され、市場不振の狀況も幾分好轉して來た。次に紙煙草・刻煙草の如きは年額約百萬元、柑橘・橄欖その他の果物類は年額約十萬元、土紙・竹扇・蒲筵等は年額約百六十萬元、罐詰年額約八十萬元、陶磁器が百數十萬元、麻布約八十萬元、漆紬（譯註　拷紗・薯蕷紬・暑凉紬ともいひ薄紬に漆を塗つた黑色の布、夏服地）は年額約二百餘萬元、その他紙產の酢・繩索・米酒・藥酒（譯註　高粱酒に各種藥材を加へて造つた混合酒にして竹葉青・玖瑰露・五加皮等の種類がある）は年額約六十萬元、金泥紙は年額約八十萬元に及んでゐる。

輸入品の主なるものは米で、年額約二百五十萬擔に及ぶ。大豆は年約百餘萬包、緞子は約五百萬元、石炭は四百萬元、肥料は約二百餘萬元、セメントは數十萬元、石油は約六十餘萬箱（譯註　二罐を一箱、上海では一聽といふ）、油漆は約十萬元に及ぶ。以上に擧げた數字は卽ち近年の輸出入狀況で、これを往年に比較すれば實に非常な相違である。汕頭の商業が衰微した原因は、勿論世界經濟界の不況の影響を蒙つた事にも依るが、又內政の紊亂、租稅の過重、農村の破產、それに隨つて起る住民購買力の低減等も亦その重要なる原因である。

往昔は潮州住民の南洋に赴いて商業を營み、或は工業に從事する者絕えず、每年南洋華僑の汕頭宛に送る爲替は實に巨額に上つたが、今日英國・佛蘭西・和蘭の各屬地はいづれも支那人の進出を極力制限するに至り、民國二十一年以後は汕頭より海外に進出する華僑の數は激減し、歸國して來る者が漸次增加を示し、而も歸國者は多く失業貧民であつたから、殆ど食はんが爲歸國するに異らず、徒らに汕頭の負擔を增すのみに過ぎなかつた。潮州・梅縣の農村は十分自給自足に堪へ、その上に南洋に大きな販路に有してゐたので、一戶數人のみの民家にして進取的な者は海外に進出して商工業を經營し、質朴なる者は鄕村に留つて農業に從事してゐた。故に當時は內には農產を有し、外部より直接經濟上の助力を受けてゐたが、現今は內外共に枯渴し、生活の窮乏は非常なものである。

福建省・江西省はこの數年來匪賊の跳梁する地區であつたが、近年國軍の討伐により匪賊地區の掃蕩を實施してから後、この兩地間に行はれてゐた取引もこれと共に斷絕した。汕頭は運輸の門戶であるから、自然その影響を受けざるを得なかつた。こゝに於いて政府は近年來各種の特別稅を實施し、各縣地方稅も亦增加されるに至つた。例へば生產稅・消費稅・營業稅等の如くその名目も繁多となり、且つ多くは商業請負制度を採用したので、請負商人は往々官勢を藉つて民商を欺瞞壓迫し、沒收罰金等のことは日常屢々聞く所であつた。且つ違法にも拘らず、名義のみで稅を徵收するものに、洋紙・書籍・書翰箋・反物・毛氈・海產物・饂飩・オートミル・顏料・松脂・靴墨・インキ等の特別稅がある。かくて商人は何彼につけてその自由を束縛され、たゞ歎息するより外なき有樣で、僅かにその日暮しの生活をなすのみで、發展を圖るべき餘力を留めない狀況である。加ふるに外商の支那に於て商業を經營するものは、不平等條約をその護符としてゐる爲に、この種の租稅は單に華商のみが負擔して、外商からは徵收せられない。かくて租稅が過重となり、商品の原價が自然高くなるに隨ひ、一部冒險による僥倖を求めんとする徒輩にして外國籍の浪人と結托して專ら密輸、脫稅を事とするもの瀕出するに及ぶも、又敢えて咎めるもの無く、弊害續出して枚擧に遑なき狀態である。卽ち百業の不振も相當こゝに原因がある。

三、勞働者の狀況　汕頭の工業は未だに手工業の域を離脱してゐない。機械製造も雛形程度のものが存在してゐるが、多くは規模が極めて狹小である。近時南洋の不景氣の影響を受けて停業或は閉鎖するもの少からず、爲に失業者が續出し、而も南洋の失業者の歸國する者も陸續として絶えず、生存競爭激烈にして生計の逼迫を救濟すべき方法も見出されず、前途は實に樂觀を許さない狀態にある。現在汕頭全市の紡織工は約九百人、工賃の最高は一日一元二、三角、最低は約四角である。漆紬織工は女工が多くて約五百人を占め、工賃は最高一日一元、最低約三角を得てゐる。罐詰工は約三百人で最高工賃一日約一元、最低約二角である。その他交通・荷卸・運搬・機械・建築・食料品製造業等の職工は合計約二萬人であつて、その內公用交通勞働者の收入が幾分豐かである。手工業の職工は一年中勤勞に從事してゐるにも拘らず、その收入は僅かに口を糊するに足る程度である。多くは停車場附近に居住して居り、草葺の陋屋は實に不潔極まるものである。幸に南方は氣候溫暖で、冬季も尙凍死の處は無い。然し一旦病魔に侵された場合は醫藥を購ふ資力がないので、たゞ自然の淘汰に委せて放任して居るといふ狀況である。

四、金融狀況　汕頭の金融事業は三種に分つことを得。一は銀行業、二は銀莊業、三は兩替業である。銀行同業者は爲替事務所を組織し、各地の爲替手形を集めて該事務所を交換場所となし、且つ每月末に預金及び貸付の公定利率を定めてゐる。銀莊は合計百餘戸あり、爲替を主としてゐるが、近時南洋方面の不景氣の影響を受けて營業不振に陷り、閉鎖するものも少くない。各銀莊は曾つて不動產を擔保とし、商業會議所に登記して紙幣を發行してゐた。然るに從前の不動產見積額は現狀に合せず、或ひは時勢と環境の變遷によつて、既に低落してゐる場合もあるため、この紙幣は市場に於いて早くより信用を失墜して屢々騷動を惹起し、政府に於いても手の施しやうが無いといふ狀態である。兩替業は現在約二百餘戸ある。その營業は金錢を兩替してその打步を獲得するにあり、資本の比較的大なる者は同時に金錢貸付をも行つてゐる。市場に流通してゐるものに廣東省紙幣があるが、その市價は毫洋より高くなる場合もあり、低くなる時もある。市紙幣も時には上海紙幣に比較して高値を呼ぶことがある。補助貨は雙毫を主とし、一毫銅貨二十八枚と交換せられる。

五、燃料及び動力　汕頭の工業は今尙ほ幼稚である。從つて燃料の需要及び動力の設備も亦あまり發展してゐない。燃料の種類は石炭及び柴油を以て主とするが、梅縣產の石炭は品質が不良なるため、蒸氣機關の燃燒に使用し難い。現在汕頭に於いて使用しつゝある石炭は、多く日本及び開灤より來るが、一噸約大洋二十元、柴油は一噸約大洋八十元である。汕頭には電力工場が一ケ所あるが、電燈用電力を供給するのみで、各種工場にしてモーターを裝置するものは餘り見受けられない。

第四編　工業統計表

第一章　緒　言

本編は原本の中冊及び下冊の統計表を編譯者が組直して作成したもので、便宜的にこれを第四編とした。即ち、原本中冊には「工場法の適用を受くる全國工場の事業別統計表」が以下の十四項目に亙り、各項がそれぞれ十六工業別に細分されて示されてゐる。

一、工場敷地及び建築物
二、資本組織・資本額及び平均存續年月
三、動力の來源（石油・電氣等の毎日需要量）
四、動力機（數量）
五、動力機（能力）
六、モーター
七、補助機數量
八、勞働者數

九、勞銀
一〇、作業時間
一一、民國二十一年度各種經費竝に販賣製品總額
一二、主要作業機
一三、主要原料
一四、主要生產品

更に、原本下冊は「各地方別工業概況統計表」が百十六地方に亙つて掲げられて居り、各地方別に、（一）資本及び勞働者數、（二）生產品總額及び販路、（三）主要生產品數量、（四）主要原料數量、及び（五）主要作業機の五項に亙り、總計七百七十表が收錄されてゐる。これらの統計表を、下記の如き規準に基づいて集計整理し、後掲の如き統計表に組直しを行つた。

一、工場の事業別統計にあつては、各項目毎に各工業別に地方別（省市）を省略して、支那全國工場の統計を集計した。茲に謂ふ各工業別とは後掲の如き十六工業に依る分類であり、その細分も亦後掲するが如くである。

二、從つて、原本中冊の第十二表主要作業機、第十三表主要原料、第十四表主要生產品等の如く、全國總數或は總平均を求むることの不可能なものにあつては、已むを得ず統計表を割愛したが、右三表は、別にその分類のみを摘錄して、以て原本の外貌を窺ふに便した。

三、原本中冊からは、後掲の如く全國工業の事業別統計表十一表を作成した。この統計表に於ける各工業の分類は、一律にこれを日本的に改めることが少からざる不都合を伴ひ、且つ原語を用ひた方が實際の狀況を一層正確に表現し、支那に於ける工業分類をも知悉する便益もあるので、努めて原語の儘を採用した。然して、これに對しては原本に依る細別を「事業統計表

に於ける各種工業分類「一般」として後掲した。

四、原本下冊からは、工業的に見て特に重要と思惟さるゝ上海その他（武漢三鎭は合併して一表とした）に就いては、原本記載の儘を轉錄した。地方別の記述編（本書第三編）にあつては、南京・上海・青島・北京・無錫・杭州・漢口・重慶・天津・濟南・厦門・梧州・廣州・汕頭の十四都市を擧げてゐるが、本編ではこれを七都市に止めた。

爾餘の地方に關しては、これを各省別統計に組直したが、この場合には前記七都市はこれを省合計から除外したから、特に注意されたい。この省別統計に於いては、資本額・勞働者數及び製品總額に就いての總計を求めて揭げた。

五、工業統計表中、機械その他工業用語の譯語にやゝ不統一を來した理由は、例へば燐寸工業の主要作業機名稱の如きも、天津・濟南・武漢に於いては、平列機及び軸木配列機をそれぞれ理桿機・排桿機と謂ふに對し、廣東ではこれを齊梗車・排板車と謂ふが如く、地方に依り名稱を異にしてゐる狀態であるので、容易にその異同を辨じ得るものを除いては、凡て原語の儘記述することゝしたが爲である。

事業別統計表に於ける各種工業分類一般

一、木材製造業

1 鋸　木（製材）

2 木　製　品

（1）木箱（2）紗管筒（織布用緯管）（3）梭子（筬）（4）牙籤（妻楊枝）

3 竹　製　品

二、傢具製造業

1 鐵製傢具（家具）

2 地　毯（緞通）

3 地毯及其他

三、冶　煉　業

1 翻　砂（鑄造）

（1）機器及另件（機械及び部分品）（2）鐵鍋鐵管

2 熔　煉（精煉）

（1）煉鋼鐵（製鋼）（2）煉鉛（鉛精煉）

四、機械及金屬製品業

1 機器製造兼修理

（1）印刷機（2）針織機（3）紡織機（4）動力機（5）各種機器（6）機器另件（イ）地軸宕柱（機械中心軸）（ロ）襪針（靴下製造用針）（ハ）羅底（篩網）（ニ）汽門龍頭（蒸氣管龍頭）（7）修理機器及另件

2 金屬品製造

（1）鍋爐水箱（汽罐用水槽）（2）製罐（イ）製罐（ロ）印刷製罐（ハ）製罐及其他（ニ）印刷製罐及其他（3）鋼精片及器皿（純鋼製器具）（4）製釘（イ）釘（ロ）釘網等（5）製針（イ）洋傘骨（6）製燈（7）銅皮（銅板）（8）鐵條（鐵線）（9）其他金屬製品

3 電氣機械及用品

（1）電氣機械及用具（2）電氣機械及電池（3）電氣用具（4）電料（電氣材料）（5）電料及其他（6）電燈泡（電球）（7）年紅燈（ネオン燈）（8）電池（9）電池兼電筒（10）電筒（懷中電燈）（11）電焊（電氣溶接）

4 翻　砂　鐵　工

（1）紡織業機（2）動力機（3）各種機器（4）修理及另件（5）金屬製品

五、交通用具製造業

1 造　船

（1）造船（2）造船及其他（3）修理輪船（汽船修理）

2 造車（車輛製造）

（1）鐵路機廠（鐵道工場）（2）造電車（3）汽車零件

（自動車部分品）（4）修理汽車（5）自行車（自轉車）
（6）自行車另件（7）煤氣車（ガソリン車）

六、土石製造業

1 磚瓦（煉瓦及瓦）
（1）磚瓦（2）瓷磚（タイル）（3）磚瓦及其他
2 玻璃
（1）玻璃器皿（硝子器具）（2）玻璃車邊（硝子製緣邊）
3 水泥（セメント）
4 石・石灰・石粉
（1）煉灰（石灰精煉）（2）石粉（3）軋石（バラス）
（4）煉灰製磚
5 瓷陶（陶器）
（1）瓷器（燒窯）（2）瓷器・玻璃・坩堝・火磚（耐火煉瓦）
6 坩堝
（1）坩堝（2）坩堝火磚（3）坩堝・玻璃・火磚
7 石棉
8 製煉煤焦
（1）煉焦（コークス）（2）煤球（炭團）

七、建築材料業

1 建造材料
2 銅鐵鋼料
3 銅鐵鋼料兼製釘

八、水電業

1 水電
2 水廠（水道會社）

九、化學工業

1 火柴
（1）火柴（2）梗片（燐寸軸木及び箱）
2 皂燭
（1）皂（2）皂燭（3）碱燭皂（曹達・蠟燭・石鹼）
（4）泡花碱（頭髮洗粉）
3 搪瓷
（1）搪瓷器皿（琺瑯器具）（2）搪瓷及其他（3）製坩

（鐵製原器）
4 油漆・墨・顏料等
（1）油漆（塗料）（2）油墨（スタンプインキ）
（イ）油漆・油墨（3）顏料（4）蟲膠（セルラック）
5 化粧品
6 藥品
（1）一般藥品（2）藥及皂
7 人造脂
（1）賽璐珞（セルロイド）（2）電玉・電木等（ベークライト製品）
8 碱酸
（1）製酸（2）製碱（3）碱酸及漂粉
9 炭酸鈣・炭酸鎂（炭酸カルシウム・炭酸マグネシウム）
（1）炭酸鈣鎂（2）炭酸鈣鎂及其他
10 煉氣（石炭瓦斯製造）
11 酒精
12 其他化學工業

一〇、紡織工業

1 棉紡織
（1）製棉（イ）軋花（打綿）（ロ）軋花及其他（ハ）廢花（落綿）（ニ）廢花及其他（ホ）彈舊花及藥棉（2）棉紡
（イ）紗綿（綿糸紡績）（ロ）紡紗兼織布（ハ）紡紗兼織毯
（3）棉織（イ）棉織（ロ）棉織兼鐵工（ハ）棉織兼籐竹木
（4）藥棉紗布（5）藥棉紗及其他
2 絲及絲織業（製絲及び絹織物）
（1）繅絲（製絲）（イ）廠絲（工場糸）（ロ）雙宮（玉繭）
（ハ）絹糸（2）織綢及附屬工業（イ）織綢（絹織物）
（ロ）給糸
3 毛紡織
（1）毛織（2）毛紡織（3）毛紡兼製服用品（4）彈毛
4 糸織兼棉織
（1）棉織兼毛織

5 廢糸棉毛紡織（屑糸紡織）
6 染　煉
（1）糸光紗（シルケット）（2）染煉（3）染煉兼印布
7 印　花（捺染）
8 製　線（綿糸製造）
（1）經緯線（2）紗線團（綿糸球）（3）他種線
9 邊　帶
（1）製邊（レース製造）（2）製帶（平組製造）
（3）寛緊帶（ゴムバンド）（4）邊帶（5）邊帶兼牙筷
（平組製造兼箸製造）
10 絨布整理（ネル地整理）
（1）拉絨（起毛）（2）拉絨兼漂染印花（3）壓布

一二、服用品製造業

1 織　襪（靴下製造）
（1）織襪（2）織襪兼彩襪及其他（下着類其他）
2 草　帽（麥藁帽及ソフト）
3 陽　傘
4 手　帕（ハンカチーフ）
5 衫　褲（シャツ・ヅボン下）
6 線毯毛巾
（1）線毯（綿製敷物）（2）毛巾（タヲル）
7 其他服用品
（1）鈕扣（釦類）（2）織蓆（莫産製造）（8）其他

一二、皮革及橡膠製造業

1 製　革
（1）製革（2）製革兼製膠
2 橡膠製品
3 製　膠（護謨製造）

一三、飲食品製造業

1 碾米（製米）
（1）舂穀（脫穀）（2）碾米（3）碾米及其他
2 麵粉機粉
（1）麵粉（麥粉）（2）機粉（機械製）（3）電廠兼製

麵粉
3 煉　乳
4 製　糖
5 製備食品
（1）罐頭食品（罐詰食品）（イ）罐頭食品（ロ）罐頭食品
及其他（2）水産製品（3）荳腐製品（豆腐製品）（4）糖
菓（5）糖菓餅乾（飴・ビスケット等）
6 搾　油
（1）搾油（2）油米
7 製　茶
8 製　烟（煙草製造）
（1）烤烟葉（2）捲烟
9 製　酒（酒釀造）
（1）酒
10 清涼飲料
（1）汽水（サイダー）（2）氷及汽水
11 調味品
（1）味精（味の素）（2）醬油
12 澱　粉
13 精　鹽
14 製　蛋
（1）氷蛋（冷凍卵）（2）蛋粉（卵粉）
15 造氷冷藏（製氷冷藏）

一四、製紙印刷業

1 製　紙
（1）製紙（2）紙版（紙型）（3）錫紙
2 印　刷
（1）印刷（2）印刷兼鑄鎔（兼活字鑄造）
3 紙製品
（1）紙盒（紙箱）（2）卡紙片等（カード類）

一五、飾物儀器製造業

1 樂　器
2 教育用品
3 儀　品

4 製　鐘

（1）鐘（置時計）（2）鐘及電筒

5 玩　具

一六、其他工業

1 牙　刷

（1）牙刷（2）牙刷兼牙粉（齒刷子及び齒磨粉）

2 製　鏡

3 熱　水　瓶（魔法瓶）

（1）自製瓶胆（瓶胆＝魔法瓶中身硝子部分）（2）購用瓶胆（3）專製瓶胆

4 打　包（包裝）

事業別統計に於ける分類摘要

原本中册第十二表　主要作業機（數量及び製造能力）

一、木材製造業

鋸木機、刨木機、打眼機、梭子床、切刀、齊釜車、擦光車、軋扁車

二、傢具製造業

鎔鐵爐、染槽、織地毯機、紡毛機、織機、染毛機

三、冶　煉　業

鎔鐵爐、化鐵爐、電爐、冷汽錘、鞴砂機、烘砂機、攪鉛機

四、機械及金屬製品

車床、鑽床、鑽床、衝床、磨、宕床、剪床、銑床、鉗床、打鐵爐、打風機、抽水機、起重機及行車、磨刀機、汽錘、壓力機、打眼機、磨尖機、羅底機、拔絲機、化銅爐、滾圓機、滾方機、製罐機、捲床、印刷機、軋片車、滾邊車、製釘機、拉絲機、有刺鉛絲機、織鋼機、切條機、砸鼻機、切針機、切撐機、切骨機、打珠機、軋銅機、伸鐵機、爐灶、磨光機、夾銀機、繞線機、過磁機、空壓機、電爐、捲邊機、鎔料爐、排氣機、彎管機、打氣機、熱力方棚、噴沙箱、冷氣壓機、滾邊機、滾線車

五、交通用具製造業

鎔鐵爐、鋸木器、汽錘、化鋼爐、滾筒圓機、壓力機

六、土石製造業

製磚機、製瓦機、燒窰、製火磚機、壓瓦機、製坏機、製花磚機、炸口機、坩堝、吹瓶機、壓機、玻璃車邊機、旋窰、生料磨、熟料磨、灰窰、軋石機、絲磨機、火磚窰、煉灰窰、瓷器製造機、烤花機、烤窰、磁窰、磚窰、溶料爐、缸管機、磨石棉機、彈石棉機、製石棉布機、製鋼機、壓紙機、煉焦窰、製球機、軋煤機

七、建築材料業

鋸木機、刨木機、製釘車

八、水　電　業

濾水池

九、化學工業

排梗機、理梗機、卸梗機、上藥料機、鏇木製、切梗機、切片機、煮皂鍋、壓皂機、製燭機、煮燭鍋、化料爐、磨粉機、搗磁爐灶、電煙機、製火油爐機、製油漆機、煉油機、攪拌機、磨墨機、混合機、軋墨機、調墨機、汽鍋、化料機、磨機、軋車、溶解鍋、製牙膏機、製牙粉機、製雪花膏機、爐過機、蒸鍋、製片機、製丸機、糖衣機、製藥粉機、壓車、滾筒、抽車、壓機、拋光機、揚酸爐、燃礦機、蒸發鍋、反射爐、溶碱箱、製純碱機、製燒碱機、電解槽、漂粉滾機、鹽酸燃化機、溶化機、壓汽機、石灰窰、製炭酸鈣機、磨粉機、軋石機、澄清機、養氣機、炭輕氣機、糖化機、蒸溜機、蒸煮器、軋石粉機、石粉篩球機、軋煤機

十、紡織工業

軋花機、碾米機、磨穀機、軋棉子機、木撐機、蒸灶、彈花機、回絲機、染機、鬆棉機、紗錠、線錠、織布機、廢花錠、織毯機、染機、漂白機、紗布機、繃帶機、織紗布機、上鞋機、繰絲車、煮繭機、製棉機、精紡機、撚合機、電織機、手織機、絡絲車、織絨機、精紡機、合股機、梳織機、織毯機、彈毛機織機、織呢機、絲光機、蠟光機、絲團車、刷光車、併線車、織邊機、織帶機、原料機、錠織機、梭織機、花邊機、刮絨機軋光機

十一、服用品製造業

手搖襪機、電力襪機、橫機、縫紐機、平邊圓機、其他針織機製坏機、水壓機、草帽機、縫紐機、製骨機、製柄機、平機、圓機、線毯機、毛毯機、毛巾機、磨光機、打眼機、捲邊機、鈕

扣機、噴漆機、製蓆機、手套機、圍巾製、織布機

十二、皮革及橡膠製造業

泡皮池、滾筒、打光機、壓皮機、熬膠鍋、澄膠機、爐膠機、壓型機、縫紐機、軋底機、乾燥機

十三、飲食品製造業

碾穀機、碾米機、磨粉機、篩粉機、鋼磨、粉篩、奶油分離機、結晶機、蒸乳機、滾圓機、煮糖鍋、製糖車、蒸鍋、滾圓機、烤餅干機、滾方機、糖果機、碾精壓縮機、製冰機、鑄坯機、磨光機、出邊機、打眼機、石磨、軋糖機、淘糖機、製冰淋機、軋豆機、蒸灶、榨油機、軋棉子機、軋花生機、炒鍋、磨機、烤茶機、切茶機、烤烟機、切烟機、捲烟機、釀酒鍋、蒸溜鍋、冷却器、製汽水機、濾水機、蒸溜爐、瓶蓋機、抽氣機、蒸煮鍋、壓榨機、洗麵筋車、製澱粉機、製糊精機、碎鹽機、洗鹽機、攪拌機、脫水機、煮鍋、溫鹵鍋、冷氣機、蛋帮浦、打黃帮浦、飛黃機、打黃車、抽熱機

十四、造紙印刷業

造紙機、蒸料鍋、打漿機、造紙版機、精漿機、軋錫車、石印機、鉛印機、膠版機、樣皮機、凹版機、凸版機、鑄字機、製盒機、切紙機、軋花機

十五、飾物儀器製造業

軋片機、縫紐機、軋光機、泡皮機、滾筒、製球機、製筆機、研色機、壓力機、直條機、打釘機

十六、其他工業

打眼機、抽槽機、切毛機、植毛機、車邊機、拋光機、溶料爐、滾方車、滾圓車、眞空機、封口機、壓力機

原本中册第十三表　主要原料（數量及價額）

一、木材製造業

洋松、本松、楊木、竹料

二、傢具製造業

鋼板、鐵管、羊毛及毛線、化學品、經緯線

三、冶煉業

生鐵、廢鋼、鐵礦砂、錳砂礦、硫化鉛礦砂

四、機械及金屬製品業

生鐵、熟鐵、銅、銅絲、銅絲、廢銅、熟鐵、馬口鐵、油墨、銅皮、紙張、鋼精、鐵絲、圓鐵、鉛絲、廣條、燈罩、舊鐵、賽銀、紫銅、錳粉、鋅筒、炭條、玻璃片、燈絲、玻璃燈殼、銅頭、玻璃管、方棚、炭精、鉛粉、鉛皮、珠泡

五、交通用具製造業

生鐵、熟鐵、木料、鋼、金屬、銅、漆料、布料、鋼管、

六、土石製造業

泥砂、石灰、白瓷土、長石、火坭、粘土、碎玻璃、礦、石粉、石砂、灰石、石膏、草料、蔴料、白石、滑石、石塊、青石、白泥白沙、黑鉛、耐火土、腊石、石英、玻璃砂、石棉、棉花土粉、煤屑、黃膠泥

七、建築材料業

木料、熟鐵、生鐵、銅、鋼條、鐵絲

八、水電業

水

九、化學工業

梗片或木料、赤磷・硫黃・硫化磷、綠酸鉀、膠、本松、楊木、杉木、牛油、燒碱、白臘、燭蠟、純碱、石英粉、黑鐵皮、瑯粉、鋼精、鉛粉、顏料、油類、鋅粉・鉛粉・輕粉、墨灰、酸、鹽、綠基侖、紫草茸、漂粉、化粧品原料、製藥原料、藥品、纖維、賽璐珞片、電玉粉、電木粉、銃化鐵、鈉硝、石灰石、硫酸鈉、鍾水、白石、鹽酸、鎂、硝土、炭質、弗長石等礦石

青鉛、

十、紡織工業

籽花、棉子、廢花、花衣、顏料漂粉、舊棉花、漂白粉、紗線、生鐵、籐木竹料、紗布、繃帶、稀布・蔴布、乾碼、雙宮碼、絹糸原料、土絲、廠絲、人造絲、毛線、小絲、羊毛、人造絲廢毛、燒碱、白坯、藥品、布疋、漿粉、腊・蔴、橡皮線有光線

十一、服用品製造業

紗線、毛絨線、廠絲、人造絲、羊毛、帽坯、草及草辮、鋼絲鐵皮、羽絨、各種棉布、蚌殼、牛角、象牙果、杜木、蓆草

十二、皮革及橡膠製造業

乾皮、血皮、羊皮、碎牛皮・牛腊、樹膠、紋布・帆布、碎玻璃

十三、飲食品製造業

稻穀、糙米、未炒米、小麥、鮮乳、糖、可可粉・荷蘭糖、粗砂糖、各種食品、白鐵皮、麵粉、香料、司的林、茸、魚類、蚌殼、棉籽、花生米、椰子、毛茶、煙葉、酒花、葡萄、果汁、蘇打、水、亞摩尼亞、麵筋、鹽酸、山薯、粗鹽、鷄蛋

十四、造紙印刷業

破布廢棉、竹料、廢紙、稻草蘆葦、木漿、石灰、鉛、錫、紙張、油墨、銻、黃紫銅、紙版、卡紙

十五、飾物儀器製造業

皮革、木料、線繩、顏料、五金及木材等、銅片、銅弦、銅棍、燈泡、馬口鐵、賽版

十六、其他工業

牛骨、猪鬃、炭酸鈣、炭酸鎂、玻璃、鉛絲、硝酸銀、砂及石粉、鐵皮、銅皮、洋碱、玻璃瓶胆

原本中册第十四表　主要製品（數量及び價額）

一、木材製造業

木板、板箱、紗管、紆管、梭子、牙簽、竹烟嘴

二、傢具製造業

鐵製家具、地毯、染線費、其他毛織品

三、冶煉業

生鐵坏、鐵鍋鐵管、生鐵、熟鐵、機器、各種鋼鐵、純鉛

四、機械及金屬製品業

印刷機及其他、針織機及其他紡織機及其他、動力機及其他、各種機器、地軸宕柱、織針、羅底、細鋼絲、汽門龍頭另件等

修理費及另件、承造費、罐筒等、熱水瓶殼、印刷品、鋼精片及器皿、釘、有刺鉛絲、鐵絲網、縫紐針、洋傘骨、燈、燈頭鋼皮、鐵條、銀器、各種理髮夾髮夾剪、夾針、煙刀、鎖、電話機、發電機及無線機械、電池、收發電報機、收音機、電爐、電風扇、電料、電筒、電筒殼、電燈泡、年紅電光招牌、炭精電焊費、翹砂機、金屬製品

五、交通用具製造業

船艦車輛鍋爐等、修理費、修理及製造車輛、汽車另件、自行車及另件、煤氣車

六、土石製造業

磚、瓦、火磚、瑪賽克瓷磚、紅瓦、紅磚、玻璃製品、加工費、水泥、石灰、紙筋、白石粉、滑石粉、石子、青石粉、瓷器、坩堝、石棉繩、焦煤、煤球

七、建築材料業

各種建築材料、銅鐵鋼料、洋釘

八、水電業

電、自來水

九、化學工業

火柴、盒片、火柴梗、皂、皂精、洋燭、塊碱、泡花碱、碱瓷器皿、各種坯子、油、漆、油漆、油墨、硫化青、蟲膠、化粧品、各種藥品、賽璐珞出品、電玉電木等出品、琉酸、硝酸、純碱、燒碱、潔碱、漂白粉、鹽碱、炭酸鈣、炭酸鎂、石灰、氣化鎂、養氣、炭輕氣、酒精、砒長石等鑛石粉、黃丹、其他工業用品、加工費

十、紡織工業

棉花、棉籽、代碱費、棉子油、棉子餅、淨花、漂染費、機棉、藥棉、棉布、紗線、毯、整理費、綢、絲綢品、代織費、廠絲絨線、呢、絨、毯線、毛衣褲、毛毯、羊絨、脚毛、布疋、全毛布、代染費、絲光紗、加工費、絲綿製品、漂染費、軋光費染印費、經絲線、緯絲線、代撚費、線團、腊光線、絲棉棚杆帶繩、紗布及蔴線等、寬緊帶、絲邊、邊帶及人造牙筷等、拉絨費、印花費

十一、服用品製造業

紗線襪、絲襪、毛襪、衛生彩褲、汗彩褲背心、呢帽、草帽、帽坯、傘骨、傘柄、陽傘、綢布手帕、毛巾帕、毛衣衛生彩褲線毯、毛毯、毛巾、鈕扣、涼蓆、手套、圍布、套鞋布

十二、皮革及膠橡製造業

硬皮、軟皮、牛膠、橡皮鞋、膠、砂紙

十三、飲食品製造業

開麟費、糙米、白米、代碱費、炒米粉、麵粉、麩皮、米粉、電、煉乳、鮮乳、可可牛奶、冰糖、紅糖、各種罐頭、餅乾、醬油、冰凍魚類及魚蔘、冰、鈕扣、豆腐乾、各種糖菓、冰淇淋、豆油、豆餅、棉油、棉餅、生花油及椰子油、花子餅及椰子餅、茶葉、烤煙葉、加工費、撚煙、酒、汽水、調味品、澱粉、糊精、麵筋、精鹽、氷蛋、箱蛋、飛黃、乾白、乾黃、粉黃、鹽黃

十四、造紙印刷業

紙、蘆漿、紙版、包紮紙、錫紙、印刷品、代印費、鉛字、銅模、紙盒、加工費、各種卡片

十五、飾物儀器製造業

唱片、留聲機器另件、皮球及球拍、球鞋、自來水筆、華文打字機、各種儀器文具等、鐘、電筒、玩具

十六、其他工業

牙刷、牙粉、鑷子、熱水瓶、熱水瓶胆、代客打包費

第二章　全國工場の事業別統計表

第一表　工場敷地及び建築物

業別	工場數	工場敷地					建築物				平均面積（畝）	
		自有	借用	半有半借	不詳	自有	借用	半有半借	不詳	敷地	建築物
木材製造業	一八	八	七	—	三	一一	五	—	二	一二・九二	二・九一
傢具製造業	一二	—	一二	—	—	四	八	—	—	一一・九三	六・一六
冶煉業	三三	六	二六	—	一	一四	八	一一	一	三八・八九	一四・〇八
機械及金屬製品業	三〇六	六一	二二二	四	一九	九八	一八八	二	一八	一五・四六	八・六五
交通用具製造業	五五	三三	二一	一	—	四三	一〇	二	—	一三九・五九	八・七八
土石製造業	一一二	五〇	五四	二	六	七四	三三	—	五	一〇四・八八	九・五四
建築材料業	一四	—	一一	—	三	二	九	—	三	一・五五	一・一五
水電業	一四	一二	—	—	二	一四	—	—	—	一三〇・八七	二九・四三
化學工業	一四八	四〇	七八	八	二二	八三	五二	二	一一	二四・七四	一〇・三八
紡織工業	八二一	一六四	五六九	二二	六六	二二七	五一四	一四	五六	二三・七二	一二・五四
服用品製造業	一四一	二二	一〇八	一	一〇	三〇	一〇〇	一	一〇	二・〇一	一・一〇
皮革及橡膠製造業	八四	一九	四九	—	一六	二七	四二	—	一五	四・七六	二・三四
飲食品製造業	三九〇	一三三	二三三	九	一五	一七〇	一九八	四	一四	一一・九七	六・八五
造紙印刷業	二三四	三四	一七一	二	二七	五四	一五七	四	一九	一〇・八七	三・五四
飾物儀器製造業	二六	三	二〇	—	三	五	一八	—	三	五・八二	三・八八
其他工業	二七	五	一八	—	四	七	一六	—	四	二八・六〇	七・三六
●全國總計或總平均	二、四三五	五九〇	一、五九九	四九	一九七	八六三	一、三六八	四四	一六〇	二七・五〇	九・一

（附註）上海の工場敷地及び建築物面積は、他省中のものと合併して、全業の總平均を計算しなかつた。然し、某工業が單に上海一區にのみ存在する場合は、その數を全業の項に記入した。理由は第一編第六章第十九節參照のこと。

第二表　資本組織・資本額及び平均存續年月

業別	工場數	資本組織				資本額（元）	平均存續	
		政府經營	個人資本	合資	株式會社	其他	年	月
木材製造業	一八	—	六	七	三	二	一、一一五、一七五	九	一一
傢具製造業	一二	—	二	六	四	—	四一九、五〇〇	一五	一〇

業別	工場數	石炭（噸）	柴油（封度）	其他	外電（キロワット）
冶煉業	三三	二、六九〇、七五〇	一三	一〇	六
機械及金屬製品業	三〇六	一六、五四九、七〇八	一〇	一〇	八
交通用具製造業	五五	一九、〇〇四、四一一	二	一六	一一
土石製造業	一一二	二九、一八四、二九九	八	八	三
建築材料業	一四	二九八、一二〇	—	六	四
水電業	一四	三二、六一三、六二五	—	一五	五
化學工業	一四八	二六、三二六、八八二	一二	八	九
紡織工業	八二	一六六、八二八、二九八	八九	七	七
服用品製造業	一四一	六、〇〇六、〇七六	一〇	九	三
皮革及橡膠製造業	八四	六、三三九、八三九	一三	五	七
飲食品製造業	三九〇	六八、三八〇、一九〇	二七	一〇	六
造紙印刷業	二三四	二七、八七七 四六一	一八	一二	一
飾物儀器製造業	二六	八一二、三二〇	四	七	一
其他工業	二七	二、四二六、〇〇〇	三	五	三
全國總計或總平均	二、四三五	四〇六、八七二、六三四		九	八
全國總計或總平均	六六				
全國總計或總平均	五六一				
全國總計或總平均	九九四				
全國總計或總平均	六一二				
全國總計或總平均	二〇二				

（附註）平均存續年月は開業年月に基き、何れも民國二十二年末までを計算し、これにより各地各業發展の遲速及び工場建築物や設備の新舊を表示せんとした。

第三表　動力の來源（石油・電氣等每日の需要量）

業別	工場數	石炭（噸）	柴油（封度）	其他	外電（キロワット）
木材製造業	一八	六、六〇（〇、三三）	二四〇、〇〇	木屑六擔　木炭三四五擔	一、四五三、六三
傢具製造業	一二	五、二一（四、二一）	三〇、〇〇	—	五二八、八四
冶煉業	三三	二、〇〇	三七三、三三	—	一、四三二、二三
機械及金屬製品業	三〇六	三九、三六（六、四八）	四、五五〇、二九	木屑二、九六擔	二〇、〇六一、一
交通用具製造業	五五	二九四、〇六（三、八八）	二、八三二、二三	木屑八、九三擔	一〇、四五五、〇九
土石製造業	一一二	三六、〇二（一、〇七）	七、三二三、〇六	—	七、二六二、七一
建築材料業	一四	—	—	—	三九三、九一
水電業	一四	二四七、六一	一三、〇〇四、〇七	—	三二、一六六、〇七
化學工業	一四八	二六、三四三（一九、二七）	三、三三五、五〇	薪六二一擔　木炭五、六擔　火油一八、五封度　ディーゼル油八〇封度	一三、三三三、五五
紡織工業	八二	二、八四四、〇九（三三、七四）	五四、三七一、八三	木屑二擔　薪一三一擔　煤油三、三三封度	七二、二四九、六
服用製品造業	一四一	三三、五五（三二、五五）	四九四、六二	—	一〇、七二三、九九
皮革及橡膠製造業	八四	一〇四、九七（九二、二四）	二、二六三、六一	—	二九、八六一、八二
飲食品製造業	九〇	五六二、九二（四二、九一）	四五、六〇四、二九	ディーゼル油二〇八封度　煤油一一一封度　汽油一二封度　稻糖八、〇〇〇斤　棉殼五八三、五七擔　木炭五擔	一二二、七三八、九三

業別	工場數	蒸氣エンヂン	蒸氣タービン	石油エンヂン	其他	發電機	エアーコンプレッサー	ボイラー
木材製造業	一八	六	—	二	一	一（一）	—	八（二）
傢具製造業	一二	一	—	一	—	—	—	四（三）
冶煉業	三三	一〇	—	一	—	二	—	八
機械及金屬製品業	三〇六	二一	四	六〇	七	二〇（一〇）	三	四二（八）
交通用具製造業	五五	五三	九	二三	五	四一（一四）	一五	八一（九）
土石製造業	一一二	二二	九	四七	二	二一（一〇）	二	四九（一）
建築材料業	一四	一	—	二	—	一（一）	—	一
造紙印刷業	二三四	三七〇・〇五（一八・七〇）	九・一六七・二八	木屑一二・九二擔	五三、七二五・五二			
飾物儀器製造業	二六	—	二四・一四	—	八四四・六四			
其他工業	二七	五・一八（一・〇七）	五六八・〇〇	—	一、五七七・〇〇			
全國總計	二、四三五	四九五七・九七三（五五五・四三）	一四四、三九一・二四	デイーゼル油二八八封度 一封度 汽油一二封度 稻藁八、〇〇〇斤 棉殼五八三・五一擔 薪七五二擔 木炭一 八・六九擔 木屑三四五擔	九九八、七八八・八二			

（附註）石炭需要量欄中括弧内の數字は蒸氣機關用に供しないものを示す。

第四表　動力機（數量）

業別	工場數	蒸氣エンヂン（馬力）	蒸氣タービン（馬力）	石油エンヂン（馬力）	其他（馬力）	合計	發電機（キロワット）
水電業	一四	一一	七	一〇	三	一二	一
化學工業	一四八	二九	四	二七	八	一八（八）	三
紡織工業	八二一	三〇〇	四八	一三四	六	二二二（一六四）	一
服用品製造業	一四一	一	—	一二	—	四（一）	—
皮革及樣膠製造業	八四	一七	二	二〇	一	九（九）	—
飲食品製造業	三九〇	一〇五	七	一四一	二七	八一（六七）	一二
造紙印刷業	二三四	四三	四	三八	七	二四（一四）	二
飾物儀器製造業	二六	—	—	四	—	—	—
其他工業	二七	一	—	三	—	二（一）	—
全國總計	二、四三五	六二一	九四	五二五	六七	四五八（三〇〇）	三九
木材製造業	六	四五	—	四〇	四	四九	不詳

（附註）發電機欄中括弧内の數字は、電燈用に供せられる發電機數、ボイラー欄中括弧内の數字は蒸氣機關用に供しないボイラー數を示し、この二者は何れも總數（即ち括弧外の數字）内に包含される。

第五表　動力機（能力）

業別	發電機（キロワット）	蒸氣エンヂン（馬力）	蒸氣タービン（馬力）	石油エンヂン（馬力）	其他（馬力）	合計
水電業	一六	一、一六八（三六七）	一	三	一	一、一六八（三六七）
化學工業	六四（二八）	五二四（一五〇）	三	六四（二八）	一八（八）	五二四（一五〇）
紡織工業	三八（三七）	九三（七五）	—	一	九（九）	一〇二（八四）
服用品製造業	一九〇（四七）	四七（六）	—	—	四（一）	四七（六）
皮革及樣膠製造業	四二（八）	八一（九）	八	四九（一）	一（一）	一〇〇（一〇）
飲食品製造業	八一（六七）	二四（一四）	—	二	二（一）	二六（一四）
造紙印刷業	二一	二	—	一	—	二
飾物儀器製造業	—	—	—	—	—	—
其他工業	一（一）	三（一）	—	一	—	三（一）
全國總計	一、一六八（三六七）	一、一六八（三六七）	一	三	一	一、一六八（三六七）
木材製造業	一	一	—	二	—	三

業別	工場數	數量（單位、個） 自家電力	外力	合計	能力（單位、馬力） 自家電力	外電	合計
木材製造業	二八	一	九五	四〇	三	五七七・五	五八〇・五
傢具製造業	二二	一	三六	三六	一	一三六	一三六
冶煉業	三三	二	三三	三四	六〇	三三一	四三一
機械及金屬製品業	三〇六	三六	七八	九二	一九九	五五三・八七	六三三・九七
交通用具製造業	五五	三四六	一三一	四七	四六八・三三	二六七・三三	七五〇・六六
電業別工場業	二三	二六〇	二三一	四〇一	五六・八七	一六六・九三	一七六・九三
建築材料業	一四	一	二五	二五	一	二一〇・二五	二一〇・二五
水電業	一四	二三	六一	八一	三・九五	五三一〇・六四	八五〇・六四
化學工業	一四六	一六六	三五一	五〇九	一六三〇・六六	四五三〇・九五	六五〇・六一
紡織工業	八二二	二九四	七一五	一〇〇七	四一三四・三三	五八七・八七	六一一三〇・三〇
服用品製造業	一四一	一一	四九	四九	一	二四五・〇九	二四五・〇九
皮革及橡膠製造業	八四	一	一三四	一三四	一	七三六・六七	七三六・六七

第六表　モーター

業別	工場數	數量（單位、個） 自家電力	外力	合計	能力（單位、馬力） 自家電力	外電	合計
木材製造業	二八	一	九五	四〇	三	五七七・五	五八〇・五
傢具製造業	二二	一	三六	三六	一	一三六	一三六
冶煉業	三三	二	三三	三四	六〇	三三一	四三一
機械及金屬製品業	三〇六	三六	七八	九二	一九九	五五三・八七	六三三・九七
交通用具製造業	五五	三四六	一三一	四七	四六八・三三	二六七・三三	七五〇・六六
電業別工場業	二三	二六〇	二三一	四〇一	五六・八七	一六六・九三	一七六・九三
建築材料業	一四	一	二五	二五	一	二一〇・二五	二一〇・二五
水電業	一四	二三	六一	八一	三・九五	五三一〇・六四	八五〇・六四
化學工業	一四六	一六六	三五一	五〇九	一六三〇・六六	四五三〇・九五	六五〇・六一
紡織工業	八二二	二九四	七一五	一〇〇七	四一三四・三三	五八七・八七	六一一三〇・三〇
服用品製造業	一四一	一一	四九	四九	一	二四五・〇九	二四五・〇九
皮革及橡膠製造業	八四	一	一三四	一三四	一	七三六・六七	七三六・六七

（註）（1）發電機欄中括弧內の數字は、電燈用に供せられるキロワット數を示す。

（2）尙ほタービン及び發電機を兩欄に區別して記入したのは、これによつて原始及び次級動力總數の計算に便せんが爲めである。

第七表　補助機數量

業別	工場數	旋盤	ナレーブ	ドリル	ハマーン	ダイラング	ミリング	ガンタッカ	火造鋲	ペーパーセ	火造爐	送風機	抽水機	起重及機運搬車	研磨機
木材製造業	八	九	五	五	二	二	一	一	一	七	一	一	四	二	二
家具製造業	二二	三五	七	三七	九	一	一	四	一	100	六	一〇	一	一	六
冶煉業	三三	六	五	五	一	五	一	一	一	一	二	三三	六	四	一
機械及金屬製品業	三六	二六六	五二	八八	一二二	九	二三	九二	五〇二	三六五七	二八	九二	三六	四九	五七
交通用具製造業	五	八〇六	二三〇	四六	三四	二二	二二	六六	九九	三九七	二三	六六	六〇	二二	四八
土石製造業	二二	二二	八	九	一	一	一	一	一	七	四	七	六	一	一
其他工業	七	八	一	二	二五	一	一	二二	一	七	二	三	二	一	一
全國總計	二、四五	四、二七	九四	一、七六	一、六三	二六四	四八	二五	五〇	四、九五	五八	二八	八〇	二七	六二

業別	木材製造業	家具製造業	冶煉業	機械及金屬製品業	交通用具製造業	土石製造業	其他工業	全國總計
飾物儀器製造業	六六	三四	六	三六八	四六	一	七	二、四五
造紙印刷業	三四	三五	五	二六六	一〇	三	八	四、二七
食品製造業	三九〇	一〇五	三三	五二	三〇	八	一	九四
皮革及橡膠製造業	八四	七	一	八八	四六	九	二二	一、七六
服用品製造業	二四一	六	一	二六	一六	一	七	一、六三
紡織工業	八二	二四七	六八	二六	四	二五	二	二六四
化學工業	二四八	七七	二二	二五	二五	七	二	四八
水電業	二四	一〇	四	六	一	一	一	五〇
建築材料業	二四	三五	六	三七	一五	三	一	二七
飾物儀器製造業	六六	九三	八八	三六	一〇五	二二	二	一
造紙印刷業	三四	三三	二六	三三	一	一	一	六二
食品製造業	三九〇	一〇五	三三	六五	四二	二五	八	二六
皮革及橡膠製造業	八四	七	一	五	一	一	一	一
服用品製造業	二四一	六	一	七	七	一	一	六
紡織工業	八二	二四七	六八	二六	四	二五	二	二六四
化學工業	二四八	七七	二二	二五	二五	七	二	四八
水電業	二四	一〇	四	六	一	一	一	五〇
建築材料業	二四	三五	六	三七	一五	三	一	二七
全國總計	二、四五	四、二七	九四	一、七六	一、六三	二六四	四八	二五

（附註）（1）本表に擧げた補助機は何れも各工業に通用するものに限り、一工業のみに使用される機械、例へば製材業に於ける鉋機の如きは主要作業機の表中に收めた。

（2）尚こゝに摘記したものは一般工場に應用される補助機であるが、その中の大部分は同時に機械製造兼修理類（卽ち第四類に屬する各工場の主要作業機である。この機械は用途が極めて廣いので、その製造能力に至つては遂に計算の方法が無かつた。

第八表　職工人數

業別	工場數	管理員或は職工長 男	管理員或は職工長 女	管理員或は職工長 計	男工 技術工	男工 普通	男工 計	女工 技術工	女工 普通	女工 計
木材製造業	八	八	一	八	九	一三七	一、一二七	三五	一五	五二
傢具製造業	三	九	一	九	六四	一六	一、一〇	一	一	三〇
冶煉業	三	一三	一	一三	一三七	三七	一、八二	一	一	一
機械及金屬製品業	三六	一、八四	八	一、八五二	四、六六	二、〇一四	四、四五	六二	一〇一	一、六七
交通用具製造業	五	九二	一	九二	八、三六	三、二九八	四、九六	一	一	一
土石製造業	一三	八四	一	八四	四、四〇	六、九六〇	一四、一六五	二〇	三二	六〇一
建築材料業	一四	六一	一	六一	五一	一五五	六二一	一	一	一
水電業	一四	一九八	一	一九八	四六一	六六八	一、三六一	一	一	一
化學工業	一四八	一、七一〇	五五	一、七四五	二、九八五	四、五五一	二、八七三	四、七〇〇	四、七五四	一一、八七一
紡織工業	八二	一一、三一二	一、四一〇	一二、七二二	三五、一〇九	二一、三六七	八四、六七七	八五、四〇一	一八、一四〇	一〇七、九四七
服用品製造業	一四一	一、六五五	三六	一、七一一	一、四九一	一八一	五、一八四	一、七一一	三八一	八、八八九
皮革及橡膠製造業	八四	一〇六八	三四	一、一一二	八八一	四〇〇	六、三七三	一、一一六	一一三	七、九一一
飲食品製造業	五九〇	三、三五八	九九	三、四一七	九、六八七	六、三五六	一六、六二一	一、九五五	一、五七一	一〇、七八一
造紙印刷業	三四	二、一九三	二二	二、二〇四	四、三四三	一、九〇	三、二五六	一六六	三九〇	一、五四〇
飾物儀器製造業	二六	二三五	一	二三六	四七五	六五八	一、八七〇	一	一	二三五
其他工業	二七	二四八	一	二四九	九一	二二五	二、二四八	二〇〇	一	五九二
全國總計	二、四三五	一六、〇一六	一、六〇六	一七、六二二	七四、三六三	四九、五二四	一〇二、一六二	九五、八九五	二五、八八	一二四、三五五

業別	少年工 技術工	少年工 普通	少年工 計	總計 技術工	總計 普通	總計 計	二十一年十二月現在職工人數 男	女	少	計
木材製造業	一	一	四二	一三一	一五三一	一、一三二	一、一七七	八	二七	一、一〇二
傢具製造業	六〇	九七	一四三	七八四	一一五	一、九〇三	一、一一一	三〇〇	四七〇	一、八二一
冶煉業	三	九	一九	一七〇	四六三	一、二三〇	一、〇六八	一	三六四	一、四三二
機械及金屬製品業	一、〇九二	一、六九一	五、三三三	六、三三一	三、八〇六	一一、七四五	一三、〇八二	一、六〇四	五、一七〇	一九、八七六
交通用具製造業	一三五	四八二	一、〇六六	八、六一九	三、七六〇	一六、〇五二	一五、六七五	一	九一八	一六、六一七
土石製造業	九四	五八一	一、四七四	四、五五四	七、八六三	一六、三六〇	一一、七七七	三六六	一、一四三	一三、三六七
建築材料業	六	一〇三	一一一	一五七	一六八	九五三	五七〇	一	一五五	七四五
水電業	三〇	九	三九	四九一	六七七	一、四一〇	一、一七二	一	九	一、二六三
化學工業	四一	九八三	一、九五五	八、〇九四	一〇、一八八	二七、七九	一一、七六六	一〇、八六七	一、四九七	二四、五六四
紡織工業	二四、七五五	四、四一〇	二六、七五八	一三五、九五五	四三、九一一	一〇八、六七八	八四、一四八	一六〇、一三八	二七、九一	二六八、五一三

服用品製造業	二三六	四二八	一、一五八	三、四三八	九九一	一五、二七一	五、一四九	八、四九八	一、〇三四	一四、七二一
皮革及橡膠製造業	四〇	三三	三三〇	二、〇三八	六四五	一四、五二五	五、八二五	七、六三七	一五九	一三、七四一
飲食品製造業	二二四	五九九	一、一七五	二、七三六	八、七三六	四八、八〇四	二四、五一五	一八、一〇四	一、一三六	四三、九一三
造紙印刷業	八六	五七九	二、九六一	五、五九四	二、八八九	一八、九〇三	一四、五八三	一、三九一	二、七七五	一九、三九三
飾物儀器製造業	—	九六	二六八	四七五	七五四	二、三九一	一、七〇七	一五三	三〇三	二、一六三
其他工業	一四	二〇	三〇八	三〇五	一四五	二、一四八	一、〇二九	四五二	二七〇	一、七五一
全國總計	一八、二五四	一〇、二〇六	四七、〇六〇	一八八、六一二	八五、六〇八	五〇〇、三三五	一九四、三三四	二三九、五九八	四二、七七一	四七五、四三〇

（附註）（1）上海の調査は元來原定計畫の中には含まれてゐなかつたため、一部分中國經濟統計研究所の既成資料を採用した。故にその項目は幾分簡略で技術工と普通工を區別してない。從つて技術工と普通工の合計は常にその總數と等しくない。

（2）又男・女・少年工の三項を區別しない工業も二、三あつたので、同樣その三項の合計は必ずしもその總數と一致しない。

（3）工場主・經理及び技師は皆管理員として取扱ふことをしなかつた。故に工場主或は經理にして直接職工の作業を指揮する場合も、この欄には記入してない。

（4）又、民國二十一年度に於ける職工人數も同二十二年の數字によつたものが多い。

第九表　職工給料——最高最低額（單位元）

業別	工場數	管理員或は職工長給料 最高	管理員或は職工長給料 最低	職工最高工賃 宿舍食事支給 技術工	職工最高工賃 宿舍食事支給 普通	職工最高工賃 宿舍食事支給 未分類	職工最高工賃 宿舍食事自辨 技術工	職工最高工賃 宿舍食事自辨 普通	職工最高工賃 宿舍食事自辨 未分類	職工最低工賃 宿舍食事支給 技術工	職工最低工賃 宿舍食事支給 普通	職工最低工賃 宿舍食事支給 未分類	職工最低工賃 宿舍食事自辨 技術工	職工最低工賃 宿舍食事自辨 普通	職工最低工賃 宿舍食事自辨 未分類
木材製造業	一八	六〇	六	三八・五	一五	三〇	三三	二二	五一	四・二	五	〇	六・九三	一〇・九二	三
傢具製造業	一三	八〇	〇・四	四〇	一〇	三〇	—	—	六〇	三	〇	〇	—	—	—
冶煉業	三三	九〇	二	三〇	一三・五	五〇	四五	一八	五〇	〇・三	〇・〇八	〇・四	九	一〇・五	五
機械及金屬製品業	三〇六	二〇〇	〇	九〇	三〇	八五	八〇	三〇	一三〇	〇	〇	〇	〇	三	三
交通用具製造業	五五	三三〇	一	三〇	一三	六〇	一〇八	四六・五	一〇〇	〇・五	〇	〇	四・六三	六	六
土石製造業	一三	二九・九	〇	九二・四	二三・一	六〇	一五〇	三〇・〇三	八〇	一	〇・六	一	六	二	四
建築材料業	一四	九二・四	〇	四三	二五	三六	三二・三四	六・九三	六〇	四・六二	〇・八三	四	—	六・九二	九
水電業	一四	一六三・	一五	五三・九	三〇・八	—	一三四	三〇	七九	三四・六五	一一・五	—	九	九	一六
化學工業	一四八	四五〇	〇	八九・八三	一五	七〇	九〇	三一・五	八〇	一	〇	〇	三・一五	一・五	四
紡織工業	八二一	二〇〇	〇	六一・六	四〇	七〇	一〇〇	六九	一四〇	〇	〇	〇	二	〇・五	二・二四
服用品製造業	一四一	一五〇	〇	四六・二	二五	六〇	四〇	二〇	八〇	〇・四	〇	〇	二・三一	四・五	三
皮革及橡膠製造業	八四	一五〇	〇	三八・五	一八	四〇	二八	一八	六〇	一	〇	〇	六・九三	四	四

飲食品製造業	三九〇	一七〇	〇	七五	二四	一〇〇	九〇	六〇	一二〇	〇	〇	〇	二・四七	一	二・八一
造紙印刷業	三四	一〇〇	〇	一九	一〇	七〇	三三七	八四・四五	一八〇	〇・三	〇	〇	四	三	六
飾物儀器製造業	二六	一七〇	〇	三〇	一〇	八〇	—	—	六四	五	一	〇	—	—	九
其他工業	二七	一三五	〇	一五	三	八〇	一一〇	三六	一三〇	二	二	〇	二・三一	一〇	六
全國最高或最低額	二、四三五	四五〇	〇	一九	四〇	一一〇	三三七	八四・四五	一八〇	〇	〇	〇	〇	〇・五	二・二四

（附註）（1）各種工業の大半は、それ〴〵或る職工には宿舍食事を支給し、或る職工には支給しないといふ習慣が行はれてゐる。從つてその工賃の差額は宿舍食事の價値を代表するものとは限らない。又技術工の工賃は本來普通工より高い譯であるが、たゞ見習工をして技術工に充てる場合は、却つて普通工の工賃より低いこともある。

（2）給料は何れも月を以て計算し、國幣一元を單位とする。

（3）上海の調査は既成資料を採用した爲、技術工と普通工の間に區別を設けてない。

（4）管理員にして給料の甚だ低い者は同見習で、職工の工賃の極めて低い者は見習工である。

（5）見習工の大分部は手當を與へられてゐて、その内、毎月支給されるものは工賃として取扱つたが、不定期に支給されるものは計算不可能の爲、止むを得ず無工賃とした。

第一〇表　作業時間

業別	工場數	毎月平均就業時間	毎月平均定休日數	年平均節季紀念日等休日數	二十一年平均就業日數 上半期	下半期	合計
木材製造業	一八	一〇・五	一・六	一七・五	一五〇	一五六・七	三〇四
傢具製造業	一二	一〇・一	〇・五	一二・〇	一七一	一七五	三四七
冶煉業	三三	一一・二	〇・四	一一	一三八・四	一五一	二八二・七
機械及金屬製品業	三〇六	一〇・四	一・一	一二・六	一六〇・五	一六四・八	三二五・九
交通用具製造業	五五	一〇	一・九	一〇・六	一六四・八	一六三・九	三二七
土石製造業	一一二	一三・二	〇・九	一一・五	一二五・四	一三九・三	二六七・八
建築材料業	一四	九・九	〇・二	一一・五	一六一・二	一七一・六	三三二・八
水電業	一四	一七・五	一・五	五・三	一八二	一八四	三五五・二
化學工業	一四八	一一・四	一・八	一六・〇	一五二・一	一四七・八	三〇二・六
紡織工業	八二一	一三・五	一・九	一七・四	一三二・七	一五〇・七	二七八・一
服用品製造業	一四一	一一・六	一・五	一七・五	一四五	一五七・二	三〇二・九
皮革及橡膠製造業	八四	一一	二・六	一四	一四三	一四二	二九二・八
飲食品製造業	三九〇	一三・二	一・二	一三・四	一二九・一	一三八・四	二六四
造紙印刷業	二三四	一一・六	二・二	一三・三	一五八・七	一六一・一	三一九・四

飾物儀器製造業	二六	一〇・三	一・七	一八・八	一六〇・八	三一七・六
其他工業	二七	一〇・四	二	一三・五	八七・五	一九四・二
全國總計或總平均	二、四三五	一二・三	一・六	一四・八	一四〇・八	一五一	二九〇・三

（附註）（1）民國二十一年度平均就業日數は各業の營業狀況を示すものであるから、成立後一年未滿のものは含まれない。

（2）上海は民國二十一年度に上海事變に遭遇し、停業した工場が多かつた關係上、この年を以て平常年度を代表せしめることは適當でない。故に上海のみは同二十二年度の數字を用ひ、且つ上下兩半期に分けなかつた。從つて全工業の總平均を求めるに際しては上海を除外したが、たゞ上海のみに存在する工業は、これを全業の項中に記入した。然して、全類全業の總平均の中には加へなかつた。

（3）又毎月の定休及び毎年の年末・年始其他各種紀念日等は、大體に於いて職工の權利たるに止り（休業しない者は進級する）、且つ工場も必ずしもこの日數通り休業しないから、實際上就業日數とは何等關係を生じない。

第一一表　民國二十一年度各種費用及び販賣製品總額

業別	工場數	原料費（元）	燃料費（元）	電力費（元）	工賃額（元）
木材製造業	一八	二、七〇六、七五三・七八	二九、四五七・二〇	二九、四一八・四七	二三八、三〇一・〇〇
傢具製造業	一二	六四四、四〇五・九〇	四、〇一四・五〇	九、五八六・五五	二三九、七九一・八〇
冶煉業	三三	一、四六九、六五七・六七	五一、八三三・八三	二二、七八二・七〇	四二三、二〇二・四〇
機械及金屬製品業	三〇六	一四、七九六、三八九・六七	一二二、六一五・五一	三五〇、九一四・六一	三、二八一、三二七・二七
交通用製具造業	五五	一〇、九三五、三三三・三八	五六八、八〇八・三八	一八三、八九二・二九	六、八二七、四七八・六一
土石製造業	一二	四、九〇、二六二・三六	一、九四七、三三六・〇七	九四、四一八・九九	三、二五五、五二四・一四
建築材料業	一四	三〇八、八〇三・六六	一、六二〇・〇〇	七、一二一・八〇	一四〇、〇四七・七八
水電業	一四	—	一、六六六、八五七・六七	二四一、三二四・五五	四〇二、〇四五・七三
化學工業	一四八	二六、六八〇、〇四八・五四	五四五、五八三・九七	二七〇、五一九・三〇	三、八〇八、一七一・一一
紡織工業	八二	三四四、九九七、五七〇・〇七	九、〇三七、七四九・四一	六、一五五、八五五・五〇	四〇、四五〇、六二三・六一
服用品製造業	一四一	一七、二七三、五〇一・二一	一四、四七〇・四〇	一八七、二六〇・六〇	二、八二七、一〇四・七五
皮革及橡膠製造業	八四	一二、四六四、五四六・八二	八七、六五六・五八	五一七、九三九・二二	二、八二四、一三二・四〇
飲食品製造業	三九〇	二四二、二三二、八五一・九八	一、六七六、九二二・八九	一、四五三、八二〇・〇二	七、九二六、五六六・七二
造紙印刷業	二三四	二二、五六八、〇五五・四五	一、三四二、四七二・二五	五二、〇二九・〇九	四、四六七、二八〇・〇六

業別	俸給額（元）	其他（元）	費用總數（元）	販賣製品總額（元）
木材製造業	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
傢具製造業	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
冶煉業	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
機械及金屬製品業	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
交通用具製造業	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
土石製造業	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
建築材料業	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
水電業	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
化學工業	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
紡織工業	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
服用品製造業	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
皮革及橡膠製造業	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
飲食品製造業	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
造紙印刷業	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
飾物儀器製造業	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
其他工業	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
全國總計	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
飾物儀器製造業	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
其他工業	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
全國總計或總平均	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]

（附註）（1）民國二十一年以後に成立した工場には何れも二十一年度の統計が無い。

（2）「其他」欄は材料費（例へば鐵工業に於けるコークス・煉瓦及び瓦製造工場の石炭の如き）・運賃・鑛金稅・鹽稅等を包含する。

（3）「費用總數」欄は單に本表に擧げた各種の費用の總數であつて、この外にも記入してない他種の費用がある譯である。同時に「製品總額」欄も亦既に販賣された製品に限り、一ヶ年の生產額を代表するものではない。故に「費用總額」欄の數字が「製品總額」欄より小なる場合も、必ずしも該業が利益を擧げてゐる明證とはならず、反對に「製品總額」欄より大なる場合も缺損をしてゐると斷ずることは出來ない。

（4）上海は民國二十一年度に上海事變に遭遇してゐる爲、同二十二年度の統計を用ひたが、尙ほ缺如してゐる項目がある。

（5）石炭・柴油等にして動力用に供せられるものは「燃料費」とし、然らざる場合は「其他」に入れた。

（6）特殊の狀況により、その製品が市上で販賣されないものは、原價總額を以つてこれに代へた。

第三章　各地方別工業概況統計表

第一表　上海市（一）資本及び職工數

業別	工場數	資本總數（元）	男工	女工	少年工	職工總數
製材	一〇	四六五、九四四	四六六	—	二	四六八
鐵製家具	一五九	一、一三三、五〇〇	一、六二七	—	四四七	二、〇七四
鑄造	一〇五	四九七、〇〇〇	一、〇五三	—	四八八	一、五四一
熔煉	一	二〇〇、〇〇〇	三三	—	二	三五
機械製造修理	四四四	三、九八三、〇〇七	五、二六六	—	二、四三四	七、七〇〇
金屬品製造	二三〇	二、八三二、八六〇	二、六一三	四一一	七八八	三、八一二
電氣機械及用品	一三六	三、九五三、五六四	二、九〇九	六四四	八五二	四、四〇五
鑄造鐵工	一二	二四五、〇〇〇	三〇八	—	七四	三八二
造船	三九	二、三八九、六八四	二、八二四	—	四〇五	三、二二九
鐵道工場	一	一、三〇八、五八八	九五六	—	四二	九九八
車輛製造	四	九〇、〇〇〇	一〇四	—	七	一一一
煉瓦・瓦・タイル	九	五七〇、〇〇〇	六六四	三〇八	六五	一、〇三七
硝子	三七	六四七、八九一	一、五一二	三	九一五	二、四三〇
セメント	一	一、六三八、六〇〇	二二〇	—	—	二二〇
石粉バラス石灰等	一二	三三一、〇〇〇	二五八	—	八	二六六
坩堝	四	三五〇、〇〇〇	三七八	—	一〇	三八八
炭團	一三	八六〇、六七六	五四〇	—	—	五四〇
建築材料	一八	三九八、〇五〇	五三六	—	一三二	六六八
水電	二	七、二五〇、〇〇〇	二五二	—	—	二五二
燐寸	七	二、四四六、九八〇	七三一	一、三四五	二一二	二、二八八
石鹼・蠟燭	二七	三七五、〇〇〇	二四一	一九七	三	四四一
琺瑯鐵器	二五	一、四一七、五〇〇	一、八八〇	四〇九	二五六	二、五四五
塗料・スタブインキ・顏料	二一	一、二七〇、〇〇〇	六三八	四六	三五	七一九
化粧品	三九	五、三四三、九一六	七八八	一、一四三	六二	一、九九三
藥品	一四	一、六四〇、〇〇〇	五二三	三八二	一一	九一六
曹達	四	一、一〇〇、〇〇〇	一九三	—	六	一九九
炭酸マグネシウム		七三〇、〇〇〇	二七八	二	—	二八〇
炭酸カルシウム	四	二五〇、〇〇〇	二二	—	—	二二
石炭瓦斯	一					

其他化學工業	一一	二九七、七七八	二四八	一	一、七一七	二四九	一
綿糸紡織	二四八	五七、七三一、一〇二	一六、二一四	五〇、八〇一	七三、三三六	一、〇八一	一、七七三、一六七
製糸及絹織	三六八	一〇、〇一三、一一八	八、四四一	二八、三六九	四五、九一九	一、〇二二	五三、〇〇〇
毛糸紡織	三〇	二、一〇三、一五〇	一、〇八一	一、一五三	二、四一七	一、一三七	二、八五八
屑糸紡織	三	一、四三〇、〇〇〇	五三〇	五四〇	一八三	一、一〇九	五五〇
染煉	一〇三	一、四一〇、五八三	二、五一一	五	六七	二、六四三	五九八
人造脂	一八	五八九、〇〇〇	六九四	二一七	一二七	九七三	七二〇
捺染	二三	一二七、〇〇〇	四二六	七四	一七〇	六七〇	五五〇
綿糸製造	三八	四四七、〇〇〇	四〇五	六九四	一〇	一、一〇九	二、八五八
レース及平紐	五八	五六四、〇〇〇	八九〇	五四三	六	一、四三九	一、四三九
ネル地整理	二二	二六〇、〇〇〇	二四五	六〇	—	三〇五	三〇五
靴下製造	一四二	五、二三二、九九一	二、五一四	六、六八七	二三九	九、四七〇	
帽子	二三	五五八、〇〇〇	四五二	一九二	七六	七二〇	
日傘	二三	八二、〇〇〇	四四〇	七一	八七	五九八	
ハンカチーフ	一四	一五五、〇〇〇	一五〇	三九五	五	五五〇	
下着類	五四	一、七七三、一六七	九八八	一、七四一	一二九	二、八五八	
綿製敷物・タヲル	一七	五三、〇〇〇	二二三	一二七	—	三五〇	

其他服用品	二一	二八六、三三三	二八九	一一三	三〇	四三二	
製革	四五	一、六八〇、〇〇〇	一、〇二七	三〇	二四	一、〇八一	
護謨製品	四九	四、三一一、一一七	四、五九	六、六四八	一三四	一一、三六一	
護謨製造	一	六〇、〇〇〇	七八	一五	—	九三	
精米	四九	九五二、七七八	六一二	—	—	六一二	
製粉	一五	六、〇八九、八六〇	二、五一六	—	—	二、五一六	
製糖	八	三七六、〇〇〇	一六〇	四六	—	二〇六	
罐詰類其他	三六	二、〇三七、六〇〇	七三七	六五八	一〇〇	一、五二五	
搾油	一〇	一、二七一、〇五六	二、〇二〇	—	六	二、〇二六	
製茶	五一	二八三、二〇〇	一、〇八〇	一、八一一	—	二、八九一	
卷煙草	五六	二〇、〇八六、二五二	三、二五三	一四、七四七	三三三	一八、三三三	
酒醸造	六	一二〇、〇〇〇	一〇六	—	—	一〇六	
清涼飲料	六	六〇〇、〇〇〇	九六	—	二	一五四	
調味品	一四	八八五、〇〇〇	四三二	一四四	三	五七九	
精鹽	一	二四〇、〇〇〇	一〇〇	—	—	一〇〇	
冷凍卵及卵粉	一	五〇〇、〇〇〇	一五〇	二〇〇	—	三五〇	
製氷	九	五六四、〇〇〇	一五〇	—	—	一五〇	

製紙	九	二、七一三、九八九	九六二	五五一		一	一、五九四				
印刷	二七一	一八、〇五三、八七六	八、五三三	六五八		一、四五六	一一、二一一				
紙製品	一一〇	六九五、四〇〇	一、〇二一	五三三		二〇五	一、七五九				
樂器	一六	二四五、〇〇〇	二三五	—		一〇	二四五				
教育用品	三六	五六一、〇〇〇	四八四	一四二		一〇二	七二八				
儀器	一一	二六八、五〇〇	三〇七	三五		七二	四一四				
置時計	六	一〇〇、〇〇〇	二一〇	—		—	二一〇				
玩具	二一	一四五、〇〇〇	二六〇	一〇三		五二	四一五				
蘭刷子	九	一七八、〇〇〇	二九九	三七四		七	六八〇				
鏡類製造	一二	一三四、〇〇〇	三二四	—		七三	三九七				
覺法瓶	三二	八八六、〇〇〇	九二七	四五		一〇六	一、〇七八				
合計	三、四八五	一九〇、八七〇、三一〇	九五、二一二	一二三、四一五		二〇、九七八	二四五、九四八				

（附註）（1）上海市社會局の工場名簿中には、銀冶業二百餘戸が登錄されてゐるが、僅に手工業の性質を出でないので、表中金屬品製造業には入れてない。

（2）車輛製造業中に入るべきものとして人力車製造工場も頗る多いが、規模が餘りにも小さく、計算の方法が無いので、この中には含まれてゐない。

（4）上海の綿織工場は普通タヲル・敷物（緞通）製造を兼ねてゐるが、これも又多く家内工業の性質を帶びてゐるので、計算可能のものは少ない。

（5）其他化學工業の項も大半は小規模にして多くの手工によるので、單にその比較的大なるものゝみに就いて計算したに過ぎない。

（5）職工數中性別不詳のものに左の諸項がある。

製糸及絹織	九七二人	綿糸紡織	四、六〇四人
靴下製造	四〇人	罐詰類其他	三〇人
清涼飲料	五六人	紙製	八〇人
印刷	五六四人	（總計	六、三四六人）

第一表　上海市（二）製品總額及び販路

業別	製品總額（元）	各地販賣百分率 上海	江蘇省	外省	外國	不詳
製材	二、三七七、二〇〇	五〇	三〇	二〇	—	—
鐵製家具	四、七四一、三五〇	四五	二〇	三〇	五	—
鑄造	二、二八四、八七〇	九〇	五	五	—	—

鎔煉	三五、〇〇〇	—	—	—	—	一〇〇
機械製造修理	一二、七八八、九九四	七〇	二〇	一〇	—	—
金屬品製造	一二、九六九、六八二	五〇	二〇	三〇	—	—
電氣機械及用品	一一、三一八、八二四	七〇	二〇	一〇	—	—
鑄造鐵工	一、一〇八、七三〇	七〇	一五	一五	—	—
造船	九、四五〇、〇一三	五〇	三〇	二〇	—	—
鐵道工場	一、〇八九、三九七	一〇〇	—	—	—	—
車輪製造	九七二、四四三	八〇	一〇	一〇	—	—
煉瓦・瓦・タイル	一、七七一、四五〇	六〇	三五	五	—	—
硝子	二、六七二、九五六	四〇	二〇	四〇	—	—
セメント	二、二八三、七五八	五〇	一〇	四〇	—	—
石粉バラス石灰等	八八一、六七五	六〇	二〇	二〇	—	—
坩堝	二九五、〇〇〇	六〇	五	三五	—	—
炭團	四、一四二、二〇〇	八〇	一〇	一〇	—	—
建築材料	二、二四四、八五五	八〇	一〇	一〇	—	—
水電	三、六二七　三〇一	一〇〇	—	—	—	—
燐寸	四、二八六、三二四	四〇	二〇	四〇	—	—

石鹼・蠟燭	一、六七三、一七三	五〇	二〇	三〇	—	—
琺瑯鐵器	五、〇七二、八〇〇	四〇	一五	四五	—	—
塗料・スタンプインキ・顏料	五、九七三、〇〇〇	五〇	一五	三〇	五	—
化粧品	八、三一二、五三八	四〇	二〇	四〇	—	—
藥品	七、二三四、二〇二	四五	一五	四〇	—	—
人造脂	一、七六三、八一三	三〇	二〇	四〇	一〇	—
曹達・製酸	一、六一三、七五〇	六〇	一〇	二五	五	—
炭酸マグネシウム カルシウム	一、一六四、三〇四	七〇	一〇	二〇	—	—
石炭瓦斯	一五三、六〇〇	八〇	五	一五	—	—
其他化學工業	一、〇一七、〇〇六	六五	一五	二〇	—	—
綿糸紡織	一六二、二七六、四〇九	四〇	一五	三〇	五	—
製糸及絹織	四八、二九七、〇六一	三〇	二〇	四五	五	—
毛糸紡織	八、九二七、三七六	四〇	二〇	四〇	—	—
屑糸紡織	二、六〇〇、〇〇〇	六〇	一〇	三〇	—	—
染煉	一〇、六三九、九九五	九〇	五	五	—	—
捺染	八四六、〇〇〇	九〇	五	五	—	—
綿糸製造	三、〇七〇、一四五	五〇	一〇	四〇	—	—

レース及平組	四、三六八、九五八	四〇	一〇	五〇	—	—
ネル地整理	六七三、四四〇	九〇	一〇	—	—	—
靴下製造	二〇、〇〇四、八八〇	五〇	一〇	四〇	—	—
帽子	二、七一七、六〇〇	三〇	二〇	五〇	—	—
日傘	一、三七一、〇〇〇	四〇	一〇	五〇	—	—
ハンカチーフ	一、六九九、四〇〇	四〇	一〇	五〇	—	—
下着類	八、一八一、〇二四	四〇	一〇	五〇	—	—
綿製敷物・タヲル	二〇七、二〇〇	八〇	五	一五	—	—
其他服用品	一、〇〇八、二〇〇	七〇	五	二五	—	—
製革	三〇、六六八、〇〇〇	四〇	一五	四五	—	—
護謨製品	三〇、一〇〇、九六七	五〇	一〇	四〇	—	—
護謨製造	一七八、八四二	八〇	五	一五	—	—
精米	一〇、三一七、七二〇	八〇	二〇	—	—	—
製粉	七四、一七二、一四〇	三〇	一〇	五〇	一〇	—
製糖	六、四七〇、五七〇	四〇	一〇	五〇	—	—
罐詰類及其他	五、七七一、六八〇	五〇	一〇	四〇	—	—
搾油	一三、七九五、〇九〇	五〇	二〇	三〇	—	—

製茶	一、四九三、四六六	—	—	—	一〇〇	—
巻煙草	一一八、〇〇〇、〇〇〇	六〇	一五	二五	—	—
酒釀造	三〇八、〇〇〇	六五	二〇	一五	—	—
清涼飲料	一、一〇四、〇〇〇	四〇	二〇	四〇	—	—
調味品	四、三九七、七二〇	三五	二〇	四〇	五	—
精鹽	六三〇、〇〇〇	五〇	二〇	三〇	—	—
冷凍卵及卵粉	二、八九〇、〇〇〇	—	—	—	一〇〇	—
製氷	四三一、八〇〇	九〇	一〇	—	—	—
製紙	五、六六七、二八〇	—	—	—	—	一〇〇
印刷	四三、八五九、三〇二	六〇	一〇	三〇	—	—
紙製品	二、八八〇、四四三	九〇	五	五	—	—
樂器	五七八、三〇〇	五五	一五	三〇	—	—
教育用品	二、〇二一、八八二	四〇	一五	四五	—	—
儀器	五二九、〇〇〇	四〇	一五	四五	—	—
置時計	四五七、二〇〇	六〇	一〇	三〇	—	—
玩具	五三二、一一一	三〇	二〇	五〇	—	—
歯刷子	一、五二四、三八〇	三〇	一五	五〇	五	—

鐵類製造	六一、二〇〇	五〇	一〇	四〇	—
魔法瓶	二、八九五、八八〇	二五	一〇	五五	一〇
合計	七二　七二五、七七九	—	—	—	—

第一表 上海市(三)主要製品數量

業別	製品名稱	數量	製品名稱	數量	製品名稱	數量
製材	材木	三、九二六、四三〇方呎	—	—	—	—
鐵製家具	未分類	四、七四一、三五〇元	—	—	—	—
鑄造	銑鐵原器	三、四六〇、五八〇封度	—	—	—	—
鎔煉	各種鋼鐵	五〇噸	—	—	—	—
機械製造修理	未分類	三、七八八、九九四元	—	—	—	—
金屬品製造	未分類	三、九六九、六八二元	—	—	—	—
電氣機械及用品	未分類	二、三二八、八二四元	—	—	—	—
鑄造鐵工	未分類	一、一〇八、七三〇元	—	—	—	—
造船	船舶製造修理	九、四五〇、〇一三元	—	—	—	—
鐵道工場	車輛製造	一、〇八九、三九七元	—	—	—	—
車輛製造	自轉車修理	一七、三二九輛	ガソリン車	二四輛	—	—
煉瓦・瓦・タイル	煉瓦	一八、六〇八、〇〇〇個	瓦	六、三〇〇、〇〇〇個	表裝煉瓦タイル	四九三、〇五〇元
硝子	硝子・器具	二、六七二、九五六元	—	—	—	—
セメント	セメント	四四〇、八八〇樽	—	—	—	—
石粉バラス石灰等	石粉	三三、〇七二噸	バラス	二、三五〇噸	石灰	五〇、〇〇〇擔
坩堝	坩堝	二九五、〇〇〇元	—	—	—	—
炭團	炭團	二、七〇〇、七二〇擔	—	—	—	—
建築材料	未分類	二、二四四、八五五元	—	—	—	—
水電	水	四、九五六、二〇五、八六〇ガロン	電力	四六、五一五、一七五キロワット	—	—
燐寸	マッチ	五二一、二〇〇箱	軸木	三七、一三五、八〇〇束	マッチ箱	一四〇、〇〇〇、〇〇〇個
石鹼・蠟燭	石鹼	三〇三、〇六二箱	蠟燭	三二、〇〇〇箱	シャンプ	七、〇〇〇封度
琺瑯鐵器	琺瑯器具	四、〇三四、八〇〇元	原鐵器	一〇八、〇〇〇元	未分類	七三〇、〇〇〇元
塗料・スタンプインキ・顏料	ペンキ	三、五四五、〇〇〇元	スタンプインキ	一、四五〇、〇〇〇封度	顏料	一、二〇〇、〇〇〇斤
化粧品	化粧品	四七〇、八五四元	未分類	七、八三三、六六四元	—	—
藥品	藥品	三、三四六、二〇二元	其他	三、八八〇、〇〇〇元	—	—
人造脂	セルロイド	九〇五、九二七元	エボナイト	八五七、八八六元	—	—

曹達・製酸	硫酸	四、七五〇 噸	鹽酸	二九、〇〇〇 箱	漂白粉	一三、〇〇〇 箱
炭酸マグネシウム・炭酸カルシウム	炭酸マグネシウム	五、〇〇〇、〇〇〇 封度	炭酸カルシウム	二七、八三二、〇六四 封度	其他	一〇〇、〇〇〇 元
石炭瓦斯	酸素	三三〇、〇〇〇立方米	炭化水素	八、四〇〇 瓩	―	―
其他化學工業	各種工業原料	一、〇〇九、八〇六 元	加工費	七、二〇〇 元	―	―
綿糸紡織	皮棉	三八、三〇〇 擔	綿糸	四九一、一四一 俵	綿布	七、六〇四、五八三 疋
製糸及絹織	工場糸	三一、八三四 擔	緞子	一、七四九、四三四 疋	代理製織費	七九五、一三三 元
毛糸紡織	毛織物	四、九〇〇、六〇〇ヤード	未分類	一、九九四、八五九 元	―	―
屑糸紡・織	羅紗	二一七、〇〇〇 疋	綿糸	七、二六三 擔	毛糸	一〇〇、〇〇〇 封度
染練	瓦斯糸	五、〇八〇 俵	加工費	五、一六四、一五九 元	其他	三、九六〇、〇〇〇 元
捺染	捺染費	八四六、〇〇〇 元	―	―	―	―
綿糸製造	蠟光糸	三一、二〇〇 包	綿糸球	一七三、六〇〇 個	經緯糸	二、七六七、六〇〇 兩
レース及平紐	絹レース	八七一、〇四〇 枚	紐類	九〇、〇〇〇 封度	未分類	三、七三三、三三〇 元
ネル地整理	起毛整理費	六七三、四四〇 元	―	―	―	―
靴下製造	絹靴下	三五五、七四四ダース	綿靴下	五、〇七二、九三九ダース	毛靴下	二六九、二二八ダース
帽子	ソフト	五一、〇〇〇ダース	麥藁	二七、九五〇ダース	未製品	三八、六〇〇ダース
日傘	傘骨	二四四、〇〇〇ダース	傘柄	二三四、〇〇〇ダース	日傘	五〇、四八〇ダース
ハンカチーフ	ハンカチーフ	一、二二四、六二七ダース	ガーゼ製	三六、〇〇〇ダース	其他	二、〇〇〇ダース

下着類	肌着類	一九一、〇六三ダース	毛及下着	一九二、九八〇ダース	未分類	三、八八九、九二八 元
綿製敷物・タヲル	緞通	五、八八〇 枚	メリヤスタヲル	一五〇、〇〇〇ダース	―	―
其他服用品	釦類	六八、〇六七 個	手袋ショール	六二、九六〇ダース	未分類	七二、二〇〇 元
製革	底皮	七〇六、四〇〇 封度	甲皮	八〇、九六六 枚	未分類	二、四九七、九五七 元
護謨製品	護謨靴	二八、九五〇、〇〇〇 元	未分類	一、八八三、六九三 元	―	―
護謨製造	護謨	三、〇〇〇 擔	サンドペーパー	九〇〇リンク	―	―
精米	白米	一、一七九、六〇〇 石	―	―	―	―
製粉	麥粉	三一、七九二、六四八 包	麩	三、六〇〇、六二一 擔	―	―
製糖	氷砂糖	七〇、六〇八 擔	赤砂糖	一四、四三三 擔	未分類	五、〇四二、八五〇 元
罐詰類其他	ビスケット	四六八、〇〇〇 封度	菓子	七三七、六八〇 元	其他罐詰	四、七八〇、〇〇〇 元
搾油	各種油	四三六、七〇〇 擔	油粕	一、六七六、七九八 擔	―	―
製茶	各種外國向茶	三一、三五〇 擔	―	―	―	―
卷煙草	卷煙草	五七一、八五三 箱	代理製成費	三四二、七二三 元	―	―
酒釀造	アルコール	七二、〇〇〇ガロン	各種酒類	二五、〇〇〇 擔	―	―
清涼飲料	サイダー	一、〇五七、七七八ダース	―	―	―	―
調味品	調味品	四、三九七、七二〇 元	―	―	―	―
精鹽	精鹽	五〇〇〇 擔	―	―	―	―

業別	原料名稱	原料數量	原料名稱	原料數量	原料名稱	原料數量
冷凍卵及卵粉製	冷凍卵	一〇、七五二、〇〇〇 封度				
氷製	氷	四五四、五六〇 擔				
紙製印刷	各種紙	五、一六三、二八〇 元	紙型	六、〇〇〇 噸	錫紙	九五、八七〇 封度
	未分類	四三、八五九、三〇三 元				
紙製品	紙型	一、八一九、二四三 元	加工費	六〇九、一〇〇 元	カード	四〇七、〇〇〇 元
樂器	レコード	三四五、〇〇〇 枚	蓄音器部分品	一八五、〇〇〇 元		
教育用品	萬年筆等	五九、〇〇〇 本	華文タイプライター	六八〇 臺	未分類	一、六三八、六八二 元
儀器	各種儀器	四六、九、〇〇〇 元				
時計	文具時計	二一六、〇〇〇 個	其他	三九、一〇〇 元		
玩具	玩具	五三、一一一 元				
齒刷子	齒刷子	九、六〇八、〇〇〇 本	其他	三六、〇〇〇 元		
鏡類製造	鏡	一七四、五〇〇 ダース				
覺法瓶	硝子瓶	三、三九二、〇〇〇 個	覺法瓶	一、七四〇、三二〇 個		

（附註）主要製品數量が記入不可能の場合は製品を記入した。但し大多數の工業に擧げてゐるものは全部ではないから、從つてその總數と製品總額とは必ずしも同じくない。

第一表　上海市（四）主要原料數量

業別	原料名稱	原料數量	原料名稱	原料數量	原料名稱	原料數量
製材	米松	九、六四〇、〇〇〇 方呎	支那產	一五、八四六、四二〇 方呎		
鐵製家具	鋼鐵板	二六、一〇〇 擔	鐵管	七四、四〇〇 尺	未分類	
鑄造	銑鐵	一六、一五〇 噸				
熔煉	廢鋼	七〇 噸				
機械製造修理	銑鐵	二〇、一三八、四八四 封度	鐵	一〇五、三二七 擔	未分類	
金屬品製造	未分類	六、六三〇、一八二 元				
電氣機械及用品	未分類	三、四三七、三七一 元				
鑄造	鐵	九六〇 噸	其他金屬	八〇〇 擔		
造船	未分類	四、三六七、〇一六 元	鐵	二、三四七、一〇〇 封度		
鐵道工場	未分類	四〇一、九〇三 元				
車輛製造	未分類	一〇四、三五〇 元				
煉瓦・瓦・タイル	泥	六二、六〇〇 元	白陶土	七一四 噸	長石	三五九 噸
硝子	硝子屑	四、三六六、六八〇 斤	曹達	二、七一五、五七七 斤	石粉・バラス	八、八一七、六二〇 斤
セメント	灰石	一〇八、〇〇〇 噸	粘土	三〇、〇〇〇 噸	石膏	四〇、三二〇 擔

石粉・ガラス・石灰等	石英	三七、〇五七 噸	石灰石	九、七〇〇 噸	未分類	三三、八四〇 元
坩堝	黒鉛	一三一 噸	粘土	五、七五五 噸	石膏	一〇、三三〇 擔
炭團	石炭屑	一四七、八〇〇 噸	黄泥	一六、三〇〇 噸	—	—
建築材料	鍛鐵	二、四一八 擔	銅	三〇、〇〇〇 斤	未分類	二七二、七七〇 元
水電	水	不詳	—	—	—	—
燐寸	木材	一、五九六、一九七 元	鹽酸加里及硫黄等	五六八、四三〇 封度	未分類	六二四、〇六一 元
石鹸・蠟燭	牛油	三、七五二、〇〇〇 斤	曹達	一、二〇〇、〇〇〇 斤	白蠟	八〇、〇〇〇 斤
琺瑯鐵器	鐵板	九三、四九八 擔	琺瑯粉	六二九、〇八〇 元	未分類	七三〇、四四〇 元
塗料・スタンプインキ・顔料	ペンキ原料	一、一六一、五四〇 元	スタンプインキ原料	四三〇、四四〇 元	顔料原料	二四六、二四〇 元
化粧品	未分類	三、二四七、一一〇 元	—	—	—	—
藥品	未分類	三、八二七、一六九 元	—	—	—	—
人造脂	未分類	九〇五、七二九 元	—	—	—	—
曹達・製酸	硫化鐵鑛	三、六〇五 噸	硝酸ナトリウム	七三 噸	鹽	一六、六〇〇 擔
炭酸マグネシウム・炭酸カルシウム	礦石	二〇、〇〇〇 噸	其他原料	三〇、〇〇〇 元	—	—
石炭瓦斯	石炭	一九八 噸	—	—	—	—
其他化學工業	青鉛	四、八〇〇 擔	各種礦石	一、二三〇 噸	其他	二五〇、〇〇〇 元
綿糸紡織	實棉	三九八、八〇〇 擔	綿糸	六〇、七三七 俵	棉花	二、二四一、八三七 擔

製糸及絹織	乾繭	六一、〇〇〇 擔	工場糸	一九、二六五 擔	人造絹糸	一四、八一三 箱
毛糸紡織	毛糸	一、九二四、三七六 封度	綿糸	五、六四四 俵	羊毛	一、〇八一、〇〇〇 封度
屑糸紡織	羊毛	五、四四五 擔	絹系屑	二、四七五 擔	綿糸	七、三〇〇 俵
染煉	顔料	一、一〇七、七五七 元	綿糸	五、〇八〇 俵	未分類	七、〇三三、八五六 元
捺染	顔料	一七四、四〇〇 元	澱粉	四七、三〇〇 元	未分類	六六、六七〇 元
綿糸製造	綿糸	二、一一三 俵	工場糸及人造絹糸	一、七八〇、一八九 元	未分類	九一、〇三八 元
レース及平紐	人造絹糸	八四二 箱	絹糸	五五〇 俵	未分類	二〇七、四八六 元
ネル地整理	不詳	—	—	—	—	—
靴下製造	工場糸及人造絹糸	七三七、九〇〇 元	綿絹糸	一、〇〇三、〇一〇 包	毛糸	五〇三、九六四 封度
帽子	羊毛	四三六、七〇〇 斤	未製品	一五、二五四ダース	麥桿眞田	二、三九四 俵
日傘	鋼條	五〇四 噸	捺染ジンス	三、二四〇 疋	未分類	三九、七六〇 元
ハンカチーフ	布地	七二、二六〇 疋	綿糸	三三 俵	—	—
下着類	毛糸	一二六、五〇〇 封度	綿糸	二〇、三八五 俵	未分類	二四七、四〇〇 元
綿製敷物・タヲル	毛糸	四、〇〇〇 封度	綿糸	一八〇 俵	—	—
其他服用品	貝殼及牛角等	五、五三〇、〇〇〇 斤	毛糸	五一、六〇〇 封度	綿糸	一六六 俵
製革	牛皮	一七八、五三二 擔	羊皮	五三、四〇〇 枚	未分類	一、一〇六、五〇〇 元
護謨製品	護謨	三五、三五七、四九〇 元	—	—	—	—

(附註) 主要原料數量が記入不可能の場合に於いては、原料價額を以てこれに代へた。

第一表　上海市(五)主要作業機

業別	作業機名稱	數量	作業機名稱	數量	作業機名稱	數量
鑄鐵製	切斷機	三六	鉋	八	鋸盤	一
製家具	旋盤	三三八	プレナー	一五九	ボール盤	三三〇
煉造	鑄鐵	二二八	送風機	一二二		
電氣	煉鐵	二	エアーハンマー	一		

業別	作業機名稱	數量	作業機名稱	數量	作業機名稱	數量
紙製印刷	反古紙パルプ・藁・破布モニア水	五〇五	錫	一	硝酸銀	一
製冷凍卵及卵粉	撹拌	八四五、二三六	鉛	一	硝子	一四00
精鹽	封度	五、四00	類	一	牛骨	一000
調味	個	一一、100、000	酸	一	プリキ	二、六三
清涼飲料	噸	三、三四	其他紙類	一	銀	一、二六
酒醸造	撹拌	七四、五00	類	一	封度	一、一六
卷煙	元	六、000	類	一	硝酸	四、〇九
製煙	封度	一〇七、三五二	類	一	箱撹	六四、二三六
草	噸	三、四四一	類	一	元	三六、七七
茶	元	二、二四、〇四〇	類	一	類	一、一七四、一四〇
油	撹	一、四二一	類	一	類	三、六六、七七
製	袋	三、一100	類	一	類	三00
糖	撹	九、九三一	類	一	類	一、六三、二九
粉	撹	五、五九、五六〇	類	一	類	一
米	元	100、000	類	一	類	一
玄米	石	一、三五、000	類	一	類	一
小麥	撹	五、五九、五六〇	類	一	類	一
和糖	撹	九、九三一	類	一	類	一
麥粉	撹	三、三一、〇四〇	類	一	類	一
米	元	一、三六、000	類	一	類	一
類	元	一、四九〇、000	類	一	類	一

業別	作業機名稱	數量	作業機名稱	數量	作業機名稱	數量
製鹽	大	一	豆	一	類	一
製藥	白	一	糖	一	類	一
毛	荒	一	糖	一	類	一
毛	砂	一	類	一	類	一
落花生	撹	三七一、八〇	類	一	類	一
粉	撹	一、四00	類	一	類	一
糖	撹	五0、四000	類	一	類	一
麥	撹	一、三六、000	類	一	類	一
米	元	二、四九〇、000	類	一	類	一
類	撹	一、四00	其他	一	類	一
類	封度	五〇、四000	未分類	一	類	一
類	元	三、七七、〇四〇	其他	一	類	一
類	元	三、六六、七三	未分類	一	類	一
類	元	九三、一〇五	未分類	一	類	一

機械製造修理	旋盤	一、三八四	プレナー	四一八	ボール盤	六三六
金屬品製造	旋盤	三七四	プレナー	七九	ボール盤	二一三
電氣機械及用品	旋盤	三二九	プレナー	六三	ボール盤	二二三
鑄造鐵工	旋盤	四九	熔鐵爐	一二	プナレー	一三
造船	旋盤	二五一	プレナー	六八	ボール盤	一一九
鐵道工場	旋盤	五五	プレナー	六	ボール盤	一四
車輛製造	旋盤	八	プレナー	四	ボール盤	八
煉瓦・瓦・タイル	煉瓦製造機	三七	瓦製造機	一三	燒窯	一一
硝子	磨口機	二五	坩堝	三四三	瓶吹機	一三四
セメント	回轉窯	二	―	一	―	一
石粉・バラス・石灰等	石灰窯	八	碎石機	七	研磨機	一二
坩堝	燒成窯	八	―	―	―	―
炭團	製球機	一四	石炭粉碎機	一〇	―	―
建築材料	不詳	―	―	―	―	―
水電	不詳	―	―	―	―	―
燐寸	軸刻機	二七	剝材機	一七	軸外し燒	四〇
石鹼・蠟燭	鹼化機	二七	壓搾機	二六	蠟燭製造機	一一五

琺瑯鐵器	燒窯	五二	琺瑯粉製造機	八一	電氣熔接機	五
塗料・スンプインキ・顏料	塗料製造機	四一	インキ調合機	一四	蒸汽罐	一九
化粧品	蒸汽罐	一四	混合機	四一	化粧品製造機	一六三
藥品	各種製藥機	一七六	―	―	―	―
人造脂	壓縮機	八一	抛車	二〇	ローラー	九
曹達・製酸	製酸機	六	鹽酸燃化爐	三	漂粉機	二四
炭酸マグネシウム・カルシュム	製造機	四	―	―	―	―
石炭瓦斯	空氣機	一	酸素機	一	炭化水素機	一
其他化學工業	ロール機	一〇	石粉機	二	其他機械	二四
綿糸紡織	打棉機	三六三	紡錘	一、一六一、九一四	織布機	一四、七九二
綿糸及絹織	繰糸機	一三、二五六	絹織機	七、九五六	―	―
毛糸紡織	毛織機	二四九	圓機	一六	平機	二四
屑糸紡織	精紡機	一九	毛織機	三〇	織布機	二一〇
染煉	染色罐	五三	シルケット機	六一	染機	二九二
捺染	脫水機	二二	乾燥機	七	整理機	五
綿糸製造	蠟光機	四六	玉造機	二二二	合糸撚糸機	七
レース及平紐	レース機	九一七	紐織機	二三九	錘織機	四九〇

ネル地整理	起毛機	四四	—	—	—	—
靴下製造	手動織機	六、二五五	電力織機	二、一九二	横織機	九五
帽子	粗製機	二八	水壓機	六三	夏帽編機	一〇三
日傘	製骨機	五〇	製柄機	三九	其他各機	二八
ハンカチーフ	絨縫機	一九五	—	—	—	—
下着類	縫合機	六一二	横織機	一二四	平機 圓機	二六七
綿製敷物・タヲル	織機	二〇	タヲル織機	四四〇	—	—
其他服用品	研磨機	五八	打抜器	四四	其他針織機	一一〇
製革	ローラー	一一四	艶出機	五四	—	—
護謨製品	ロール機	一二八	壓型機	八七	縫合機	八八
護謨製造	煮沸機	八	淨化機	一	濾過機	一
精米	精米機	一二六	—	—	—	—
製粉	製粉機	四四六	篩分機	四四六	—	—
製糖	煮沸機	三六	精製機	二一	—	—
罐詰類及其他	ビスケット製造機	一四	製飴機	五一	蒸煮鍋	七九
搾油	蒸窯	三四	搾油機	五四五	—	—
製茶	焙茶機	二三九	摘取機	三一	—	—

巻煙草	葉刻機	二一六	捲製機	三八九	—	—
酒釀造	蒸溜機	一	糖化器	二	蒸煮鍋	一
清涼飲料	サイダー製造機	二〇	—	—	—	—
調味品	製粉機	九	蒸溜機	八	排氣機	三一
精鹽	煮沸鍋	一二	温滷鍋	一二	—	—
冷凍卵及卵粉	冷凍機	一	—	—	—	—
製氷	冷却機	一一	—	—	—	—
製紙	製紙機	一一	紙型機	一	錫紙製造機	二
印刷	印刷機	一、六七五	石版機	三八八	其他	五六四
紙製品	製箱機	四七	切斷機	一四四	模様附機	三六
薬器	プレス機	四四	—	—	—	—
教育用品	顔料製成機	四	製筆機	五	其他	三六
儀器	旋盤	四〇	プレナー	七	ボール盤	一五
時計	旋盤	三〇	プレナー	三	ボール盤	一二
玩具	旋盤	一二	プレナー	五	ボール盤	二六
刷子	開孔機	二四	切毛機	二一	起槽機	九
鏡類製造	成形機	三一	抛光機	三一	—	—
魔法瓶	眞空機	八二	封口機	三〇	外筒製造機	三一

第二表　青島市（一）資本及び職工

業別	工場數	資本總數（元）	男工	女工	少年工	職工總數
鑄造	七	二二、五〇〇	六二	—	八	一四八
鐵工造船	四三	一二七、五五〇	三七三	六六	四三四	八七三
鐵道工場	一	六二、三一六	八二	—	—	八二
煉瓦及瓦	一二	二、二九一、三〇〇	一、四七〇	—	—	一、四七〇
水道	一	二九、七〇〇	三一二	—	—	三一二
燐寸	一二	四、五〇〇、〇〇〇	一五六	—	五七八	一五六
顏料	二	五〇九、〇〇〇	一、三〇七	三七〇	—	二、二五五
綿糸紡績	一	一三五、〇〇〇	六〇	—	—	六〇
綿織物	四	二、七〇〇、〇〇〇	一、七一九	一六八	八九	一、九七六
靴下製造	五	二六四、〇〇〇	一五三	一八	—	一七一
製革	二	二二、二〇〇	六四	四〇	四	一〇八
護謨	一	三〇、〇〇〇	四六	—	—	四六
製粉	二	二〇、〇〇〇	二五	四〇	—	六五
		五二五、〇〇〇	一〇〇	—	—	一〇〇

第二表　青島市（二）製品總額及び販路

業別	工場數	製品總額（元）	各地販賣百分率					
			青島	山東省	外省	外國	不詳	
鑄造	二五	一六九、〇〇〇	一〇〇	—	—	—	—	
鐵工造船	二	七〇〇、〇〇〇	八〇	二〇	—	—	—	
鐵道工場	一	八〇〇、〇〇〇	—	—	—	—	—	
煉瓦及瓦	二	四、六四九、四四六	—	二四六	三七九	—	—	
水道	一六	九二、七〇〇	—	三五〇	—	—	—	
合計	一四〇	一七、六四九、七一二	一、一九一	六、九九一	一、二七五	一、一九一	九、四五七	

第三表　青島市(三)主要製品數量

業別	製品名稱	數量
鑄造業	銑鐵	八三〇噸
	各種機械	三七三、〇〇〇元
	未分類船	一二九、一〇三元
鐵工業	機車	九〇輛
	煉瓦	九、〇〇〇、〇〇〇個
	水道	七、〇二七、〇〇〇噸
	箱材料	五〇、〇〇〇、〇〇〇斤
	硫化青	一八、七二〇箱
	綿糸	一九、九一八袋
	各種綿織物	二五、〇〇〇疋
	靴下	五二、七一〇打
	皮革	七、五六〇枚
	鞋類	九〇、〇〇〇足
	麥粉	九二〇、〇〇〇包
	製麵	一
	製靴下	一
綿糸紡織業	綿糸	一
	綿織物	一
	紡績料	一
	油粉	一
	護謨	一
	製革	一
	造靴	一
	鞋類	一
	皮革	一
	製麵粉	一
製油業	搾油	一
	精製	一
	卷煙草	一
	煙草	一
	冷凍	一
	印刷	一
合計		一

業別	製品名稱	數量
鑄造業	銑鐵	一
	各種機械	一
	未分類船	一
鐵工業	機車	一、九二〇輛
	煉瓦	一
	水道	一
	箱材料	六二、四〇〇箱
	硫化青	一
	綿糸	一
	各種綿織物	一
	靴下	一
	皮革	一
	鞋類	一
	麥粉	一
	製麵	一
	製靴下	一
綿糸紡織業	綿糸	一
	綿織物	一
	紡績料	一
	油粉	一
	護謨	一
	製革	一
	造靴	一
	鞋類	一
	皮革	一
製油業	搾油	一
	精製	一
	卷煙草	一
	煙草	一
	冷凍	一
	印刷	一
合計		一

業別	製品名稱	數量
鑄造業	銑鐵	一
	各種機械	一
	未分類船	一
鐵工業	機車	二四〇輛
	煉瓦	八、七〇〇、〇〇〇個
	水道	一
	箱材料	五九、六三六、七五〇擔
	硫化青	一
	綿糸	一
	各種綿織物	一
	靴下	一
	皮革	一
	鞋類	一
	麥粉	一
	製麵	一
	製靴下	一
綿糸紡織業	綿糸	一
	綿織物	一
	紡績料	一
	油粉	一
	護謨	一
	製革	一
	造靴	一
	鞋類	一
	皮革	一
製油業	搾油	一
	精製	一
	卷煙草	一
	煙草	一
	冷凍	一
	印刷	一
合計		一

業別	製品名稱	數量
鑄造業	銑鐵	一
	各種機械	一
	未分類船	一
鐵工業	機車	一
	煉瓦	一
	水道	一
	箱材料	六五
	硫化青	一
	綿糸	一
	各種綿織物	一
	靴下	一
	皮革	一
	鞋類	一
	麥粉	一
	製麵	一
	製靴下	一
綿糸紡織業	綿糸	一
	綿織物	一
	紡績料	一
	油粉	一
	護謨	一
	製革	一
	造靴	一
	鞋類	一
	皮革	一
製油業	搾油	六〇
	精製	一
	卷煙草	一
	煙草	一
	冷凍	一
	印刷	一
合計		一

業別	製品名稱	數量
鑄造業	銑鐵	一
	各種機械	一
	未分類船	一
鐵工業	機車	一
	煉瓦	一
	水道	一
	箱材料	一
	硫化青	一
	綿糸	一
	各種綿織物	一
	靴下	一
	皮革	一
	鞋類	一
	麥粉	一
	製麵	一
	製靴下	一
綿糸紡織業	綿糸	一
	綿織物	一
	紡績料	一
	油粉	一
	護謨	一
	製革	一
	造靴	一
	鞋類	一
	皮革	一
製油業	搾油	一
	精製	一
	卷煙草	一
	煙草	一
	冷凍	一
	印刷	一
合計		一

第二表　青島市（四）主要原料數量

業別	原料名稱	數量	原料名稱	數量	原料名稱	數量	原料名稱	數量
搾油	油	二二、四八〇擔	油	八七、八八八擔	—	—	—	—
卷煙	卷煙草	四、〇〇〇箱	葉煙草	五、四〇〇、〇〇〇封度	—	—	—	—
精鹽	精鹽	二〇八、三二〇擔	—	—	—	—	—	—
冷凍卵	冷凍卵	六、二九六噸	箱詰	九、一八〇箱	—	—	—	—
印刷	印刷費	一六七、〇〇〇元	—	—	—	—	—	—
鑄造鐵工場	銑鐵	八七〇噸	銀鐵	九、七〇〇擔	鋼條	二五〇、〇〇〇斤	鹽酸加量	四六八、〇〇〇封度
造船道	銑鐵分類	七一、九五五元	—	—	—	—	硫化燐	一五六、〇〇〇封度
鐵道工場	未分類	三一七、九〇〇元	—	—	—	—	—	—
煉瓦及泥土	不詳	—	—	—	—	—	—	—
水道	水道	七、〇二七、〇〇〇噸立方	硫黃	一、六八四、八〇〇〇封度	—	—	硫酸曹達	四六八、〇〇〇封度
燐寸	木材	四九五、五七四尺	—	—	—	—	—	—
顏料	酸	七四八、八〇〇封度	—	—	—	—	—	—

業別	原料名稱	數量	原料名稱	數量	原料名稱	數量	原料名稱	數量
綿糸紡績	棉花	六八、六五〇擔	—	—	—	—	—	—
綿織物	綿糸	四四〇俵	人造絹糸	二〇箱	—	—	—	—
靴下製造	綿糸	三二五俵	—	—	—	—	—	—
製革	生牛皮	七、五六〇枚	—	—	—	—	—	—
護謨製護謨	護謨	一八、〇〇〇封度	—	—	—	—	—	—
製粉	小麥	四六〇、〇〇〇擔	—	—	—	—	—	—
搾油	落花生	四一、九六八擔	大豆	六八、四〇〇擔	—	—	—	—
卷煙草	葉煙草	七、一八〇、〇〇〇封度	—	—	—	—	—	—
精鹽	粗製鹽	一三、九五〇噸	—	—	—	—	—	—
冷凍卵	生卵	一四、九四二、四二四封度	—	—	—	—	—	—
印刷	紙	八〇、〇〇〇元	インキ	一六、〇〇元	—	—	—	—

（附註）煉瓦及瓦業に於ける泥土は各自その工場敷地より採取してゐる。

第二表　青島市（五）主要作業機

業別	作業機 名稱	數量	作業機 名稱	數量	作業機 名稱	數量
鑄造・熔造	熔鐵爐	七				
鑄造鐵工	熔鐵爐	四	旋盤	一		
造船	旋盤	一二	プレナー	六	プレナー	一三
鐵道工場	鎔鐵爐	二	旋盤	六一	ボール盤	一二
煉瓦及瓦	煉瓦機	三	瓦機	三	燒窯	一二
水道	滷水機	三	抽水機	二二		
燐寸	軸刻機	二六	剝材機	三	軸木配列機	五九
顏料	鐵鍋	三	蒸汽釜	一二		
綿糸紡績	細絲紡錘	四三、五六四				
綿織物	織布機	一八二	染機	六	タヲル織機	八
靴下製造	製造機	二六				
製革	轉鼓	七	壓光機	二		
護謨	大ローラー	三	小ローラー	三		
製粉	製粉機	一八	篩分機	一七		

第三表　無錫縣（一）資本及び職工數

業別	工場數	資本總額（元）	男工	女工	少年工	職工總數
搾油	二八	一〇六、六〇〇	四一五	—	三七六	七九一
ローラー						
煙草乾燥機	一	一〇五、〇〇〇	八、六三八	一八〇	—	八、八一八
卷葉刻機	—	五〇、〇〇〇	四〇	—	—	四〇
精鹽碎鹽機	八	六、〇〇〇	三六	—	—	三六
冷凍卵冷凍機	七	八〇、〇〇〇	二七八	—	—	二七八
印刷印刷機	一〇七	八八四、一五〇	一、〇〇六	二三、三四八	七、四七二	三一、八二六
		一〇、六六〇、〇〇〇	二、二七八	一一、七七六	五七二	一四、六二六
		三七二、〇〇〇	三六一	一、七五四	九〇	二、二〇五
鑄造鐵工	五二	七、八〇〇	五一	—	一三	六四
煉瓦・瓦	六七					
石粉	一					
石鹼	六					
酸化マグネシウム						
酸化カルシウム	一					
製糸	四二					
綿糸紡織	七					
綿織物	一六					
染煉	三					

第三表 無錫縣（二）製品總額及販路

業別	製品總額（元）	各地販賣百分率 無錫	江蘇省	外省	外國	不詳
靴下製造	六〇	三〇一、五〇〇	八六〇	一、六〇〇	八〇	二、五四〇
精米	三一	一五七、五〇〇	一、〇三〇	—	—	一、〇三〇
製粉	四	一、〇二九、七二〇	六四八	—	—	六四八
搾油	九	一九八、一〇〇	三七八	—	—	三七八
製紙	一	三一、〇〇〇	三一	六	—	三七
印刷	一五	八一、〇〇〇	二七八	—	一六九	四四七
合計	三一五	一四、〇七〇、三七〇	一六、三二八	三八、六六四	八、七七二	六三、一六四
鑄造鐵工	一、〇六九、五〇〇	一〇〇	—	—	—	—
煉瓦・瓦	二四六、〇〇〇	—	—	—	—	—
石粉	二九六、〇〇〇	—	—	—	—	—
石鹼	一五七、四四〇	—	—	—	—	—
酸化マグネシウム	六九八、〇〇〇	—	—	—	—	—
酸化カルシウム		—	—	—	—	—
製糸	一六、〇七四、六一八	—	—	—	—	一〇〇

第三表 無錫縣（三）主要製品數量

業別	製品名稱	數量	製品名稱	數量
鑄造鐵工	各種機械	八七四、七〇〇元	修理費	一九四、八〇〇元
煉瓦・瓦	煉瓦	三一、二〇〇、〇〇〇個	瓦	二五、六二五、〇〇〇個
綿糸紡織		三三、七六〇、六九一		—
綿織物		四、二二〇、四二九		—
染煉		六一、二〇〇		—
靴下製造		三、四九二、〇〇〇		五〇
精米		二、四七〇、〇〇〇		七〇
製粉		一〇、六一三、二四九		—
搾油		三、七五七、七二四		—
製紙		八一、四二三		—
印刷		二六六、〇〇〇		八〇
合計		七七、二六四、二七四		—

業別	原料名稱	數量	原料名稱	數量	原料名稱	數量	原料名稱	數量
石粉	石粉	四〇八、〇〇〇擔						
石鹼	石鹼	三九、三六〇箱						
酸化マグネシウム酸化カルシウム製糸	工場糸	一二、五〇〇擔	炭酸マグネシウム副産物	一、六九五、三八八元	其他	三九五、〇〇〇擔		
綿糸織	綿糸織	二一、五六四擔	綿布	一、一五二、三六〇疋				
綿織物染煉	綿布染煉費	五七二、八四九疋						
靴下製造	靴下	六一、二〇〇元						
精米	代理精白費	二、〇三五、〇〇〇打						
製粉	麥粉	二、四七〇、〇〇〇元						
搾油	豆油	三、七〇八、九二四包	麩	六二〇、九六一袋				
製紙	紙	六三、四〇六擔	豆粕	六五九、九一〇擔				
印刷	印刷費	一三、〇八〇リン						
		二六六、〇〇〇元						

第三表　無錫縣（四）主要原料數量

業別	原料名稱	數量	原料名稱	數量	原料名稱	數量	原料名稱	數量
鑄造鐵工	銑鐵	二、三六九噸	鍛鐵	三、六八〇擔	銅	一四、三〇〇斤		
煉瓦・瓦	泥土	一八、一六二平方						
石粉	石	二五、五〇〇噸						
石鹼	牛油	三、九三六擔	其他酒	五九〇擔	苛性曹達	一、一八〇擔		
酸化マグネシウム酸化カルシウム製	石	三〇 〇〇〇噸						
製糸紡織	繭	一、六九五、三八八元						
綿織物	棉花	五四九 四四一擔						
綿糸	綿糸（細）	一三、三一五俵						
染煉顔料		二三、一五六元						
靴下製造	綿糸	六、八二〇俵						
精米	玄米	不詳	其他	不詳				
製粉	小麥	一、四八七、六六九石						
搾油	大豆	五四五、七〇〇石						
製紙	木分類	五、八八六擔	スタンプインキ	一五九二〇封度				
印刷	紙類	一七、七二〇ク						

（註）泥土の單位平方（又は單に方）とは一丈平方、深さ一尺の體積をいふ。

第二表　無錫縣（五）主要作業機

業別	作業機名稱	數量	作業機名稱	數量	作業機名稱	數量
鑄造鐵工	鎔鐵爐	二〇	旋盤	八七	ボール盤	二八
煉瓦・瓦	焼窯	九三	煉瓦製造機	一	瓦製造機	三
石粉	壓石機	二	研磨機	二		
石鹼	鹼化機	六	壓搾機	六		
酸化マグネシウム・カルシウム製造	窯	八	壓石機	一	研磨機	二
綿糸紡績	繰糸機	一三、〇三二	煮繭機	三七		
綿糸紡績	錘	二二一、六六四	織布機	三、四〇〇		
綿織物	織布機	一、五四〇				
染煉	整理機	三	蒸煮罐	三	染機	三〇
靴下製造	手動機	五、六七〇	電織機	八六		
精米	精米機	一五五	脫殼機	一一		
製粉	磨粉機	一三三	篩分機	七五		
搾油	蒸窯	三四	鐵製搾油機	二一六	木製搾油機	三三二
製紙	製紙機	一	糊付機	六	蒸煮機	一
印刷	石版機	二三	印刷機	六五		

第四表　武漢三鎮（一）資本及び職工數

業別	工場數	資本總額（元）	男工	女工	少年工	職工總數
		（漢口市）				
製材	一	二〇、〇〇〇	二〇	—	—	二〇
鑄造鐵工	八〇	一六〇、〇〇〇	八五〇	—	二五〇	一、一〇〇
鐵道工場	一	一、一〇〇、一八三	六〇六	—	一二	六一八
硝子	一五	三七、〇〇〇	二五九	—	一三六	三九五
石灰・バラス等	一	二〇〇、〇〇〇	三二	—	—	三二
水道	一	二、五〇〇、〇〇〇	三二二	—	—	三二二
燐寸	一	六〇、〇〇〇	一二八	四三九	九	五七六
石鹼	八	九五、〇〇〇	一五〇	—	—	一五〇
塗料	一	二〇、〇〇〇	八	—	—	八
黄丹	六	一五、〇〇〇	一一〇	—	—	一一〇
綿織物	一三	五〇、〇〇〇	六四〇	六〇〇	五六〇	一、八〇〇
毛糸紡織	一	五六、〇〇〇	三二	—	—	三二
染煉	一六	二九五、〇〇〇	三八六	—	—	三八六
綿糸球	一	六、〇〇〇	三	二〇	六	二九

軍靴製造	綿糸紡織	綿織物製造	鐵工場	鑄造	計	合計	包帽製造	印刷	精米	粉刷	皮革	軍服	帽子	靴	針織	計	合計
五〇〇	八〇	八	四	一	一	四九七	一	四九	二	一四六	三七	一五	二一	三〇	七〇	一一	二一七
五〇〇〇	二〇〇〇	七〇〇〇	一〇〇〇	三〇二六二二	四〇〇〇	八八一六一八三	（武昌縣）	一〇〇〇〇〇〇	二四五〇〇〇	一六五〇〇〇	七三〇〇〇	四五〇〇〇	三二〇〇〇	四五〇〇〇	二〇〇〇	一〇八六六七三〇	一一〇八六六七三〇
一六〇	四九五	七〇	七九八二	四八〇	三七	一二四九五		三六	八〇〇	二七八	一五〇	一三五	一三五	二五〇	一五六	九九〇七	九九〇七
一〇〇	五五〇	二〇	八八五六	一	一	九八五九		一	五〇〇	一	一	一	一	三〇〇	一	九四二六	九四二六
一一二	一〇	一〇	七二八	一	一二	二六三八		一	四〇〇	一	一	一	一	一五〇	六五	一〇三三	一〇三三
一〇〇	一〇〇	二〇〇	一七五六七	四八〇	四九	二四九九二		二八	一〇〇	二七八	一〇〇	五〇〇	二〇〇	八〇〇	二〇〇	一〇三六六	一〇三六六

鐵	計	合計	搾製精米	油粉	計	合計	印刷	皮革
七八七	七三	三七	一一四	三一一	二一二	二一七	三一	二二
二〇八六四七〇三	九六一七九〇	二四八六五	一六〇〇〇	三二〇〇〇	二五八〇〇〇	一一〇八六六七三〇	一五六	二五八〇〇〇
一九六七五	三九〇	二四六三	一四四三	五五一	一	九九〇七	一九九	一一五五
三七五一	八〇	一九三三	一	一	一	九四二六	一	一
四八二九一	二九三三	二四九九二	一四四三	五五一	五五一	一〇三三	一一二	三一一

第四表　武漢三鎮（二）製品總額及び販路

業別	製品總額（元）	各地販賣百分率 武漢三鎮	湖北省	外省	外國	不詳
（漢口市）						
製材	四八、〇〇〇	一	一	一	一	一〇〇
鑄造工	九六〇、〇〇〇	一	一	一	一	一〇〇
鐵道工場	九一五、九〇〇	一	一	一	一	一〇〇
硝子	一九四、一〇〇	一	一	一	一	一〇〇
石灰・ペンキ・ガラス等	八〇、四〇〇	一	一	一	一	一〇〇
水道	六、六〇〇、〇〇〇	一〇〇	一	一	一	一
燐寸	五九七、〇〇〇	一	一	一	一	一〇〇
石鹸	一、〇〇〇、〇〇〇	一	一	一	一	一〇〇
塗料	一一五、四五〇	一	一	一	一	一〇〇
黄丹	三六〇、〇〇〇	一	一	一	一	一〇〇
綿物	四二〇、〇〇〇	一	一	一	一	一〇〇
毛織	一一五、四五〇	一	一	一	一	一〇〇
綿糸紡績	一、五一四、五八〇	一	一	一	一	一〇〇
綿糸	三六、三〇八、六八〇	一	一	一	一	一
包帯	一、〇〇〇、〇〇〇	一	一	一	一	一〇〇
印刷	二、六五〇、〇〇〇	一	一	一	一	一〇〇
製粉	七、三九二、〇〇〇	一	一	一	一	一〇〇
精米	二〇〇、〇〇〇	一	一	一	一	一〇〇
皮革	一、一九二、〇〇〇	一	一	一	一	一〇〇
軍服	二六四、〇〇〇	一	一	一	一	一〇〇
更帽	三六〇、〇〇〇	一	一	一	一	一〇〇
針織球	三八、〇〇〇	一	一	一	一	一〇〇
綿糸						
靴下製造	三四、六三三、〇〇〇	一	一	一	一	一〇〇
綿糸紡績	三七四、四〇〇	一	一	一	一	一〇〇
鐵道工場	三一一、四七〇	一	一	一	一	一〇〇
造船鐵工	六九、五四六	一	一	一	一	一〇〇
鑄造	八、〇〇〇	一	一	一	一	一〇〇
（武昌市）						
合計	二六、三〇八、六八〇	一	一	一	一	一
製造物	三五〇、〇〇〇	一	一	一	一	一〇〇

軍服	皮革	精米	印刷	合計	煉瓦及瓦	靴下製造	タール	精米	製粉	搾油	合計	總計
七〇、〇〇〇	五四〇、五七三	一、五三〇、〇〇〇	一四九、九九〇	三七、七〇六・九七九	（漢陽縣）三四四、三四〇	一二三、二五五	一三五、〇〇〇	三二六、〇〇〇	二、〇五五、〇〇〇	六、三〇一、一〇〇	九、二八四、六九五	七三、三〇〇、三五四
—	—	一〇〇	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
—	一〇〇	一〇〇	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

第四表　武漢三鎮（三）主要製品數量

業別	製品名稱	數量	製品名稱	數量	製品名稱	數量
製材	木板	（漢口市）四、〇〇〇方	箱板	六、〇〇〇方	—	—
鑄造鐵工	銑鐵器具	九六〇、〇〇〇元	—	—	—	—
鐵道工場	各種部分品	一七一、六一五組	—	—	—	—
硝子	各種器具	一九四、一〇〇元	—	—	—	—
石灰・バラス等	石灰	六〇、〇〇〇擔	耐火煉瓦	一二〇、〇〇〇個	バラス	一五、〇〇〇方
水道	水道	五、四九〇、〇〇〇、〇〇〇ガロン	—	—	—	—
燐寸	燐寸	六、二二〇箱	—	—	—	—
石鹸	石鹸	二〇〇、〇〇〇箱	—	—	—	—
塗料	塗料	五〇四、〇〇〇封度	—	—	—	—
黄丹	黄丹	一八、〇〇〇擔	—	—	—	—
綿織物	工場布	六〇、〇〇〇疋	—	—	—	—
毛糸紡織	駱駝毛織	五五、〇〇〇ヤード	—	—	—	—
染煉	綿糸	二、一〇〇俵	代理染色費	九二六、五八〇元	—	—

綿糸球	綿糸球	五、〇〇〇個						
針織	綿靴下	二八五、〇〇〇ダース						
夏帽	夏帽	一〇〇、〇〇〇ダース						
軍服	冬服	二〇〇、〇〇〇着	夏服	四〇〇、〇〇〇着				
皮革	紋皮	六〇〇、〇〇〇方尺						
精米	白米	一、〇五六、〇〇〇石						
製粉	麥粉	八三四、〇〇〇袋	袋數	九六、〇〇〇袋				
印刷	印刷物	五〇〇、〇〇〇元	石版物	五〇〇、〇〇〇元				
包裝	包裝	五四、〇〇〇包						
鑄造鐵工	修理費	（武昌縣）六〇〇元						
造船	修理費	六九、五四六元						
鐵道工場	不詳	不詳						
綿糸紡織	綿糸	一一一、七六六俵	綿布	八七八、四六八疋				
綿織物	綿織物	一二、〇〇〇疋						
靴下製造	男物	七〇、〇〇〇ダース	女物	一八〇、〇〇〇ダース				
軍服	軍服	一〇、〇〇〇着	學生服	一〇、〇〇〇着	中山服	子供用	二五〇、〇〇〇ダース	一〇、〇〇〇着

皮革	各種鞣皮	三五、三三〇枚						
精米	白米	一七〇、〇〇〇石						
印刷	印刷費	一四九、九九〇元						
煉瓦及瓦	煉瓦	（漢陽縣）二六、七〇〇、〇〇〇個	瓦	二、六二〇、〇〇〇個				
靴下製造	靴下	八二、一七〇ダース						
タヲル	タヲル	一〇八、〇〇〇ダース						
精米	白米	四八、〇〇〇石						
粉製	麥粉	七〇〇、〇〇〇袋	袋數	七五、〇〇〇擔				
搾油	豆油	一四六、一二〇擔	豆粕	二、四九六、〇〇〇個				

（譯註）製材に於ける單位方は一般に幅一丈、長さ一丈、厚さ一寸の體積を言ふ。土石を量る際にはこの深さが普通一尺とされる。

第四表　武漢三鎮（四）主要原料數量

業別	原料名稱	數量	原料名稱	數量	原料名稱	數量
		（漢口市）				
綿絹毛麻黃塗石燐水石炭・ガラス等硝鐵鑄製	水材	一〇、〇〇〇方	銀鐵	一		一
綿糸織物丹料鹽酸加里道造工場工造	銑鐵	二一五、〇〇〇元	銅鐵	二一五、〇〇〇元	銅鐵	一
綿糸紡織鐵寸粉油粉料	鐵鐵	三六〇噸	硝子	六〇噸	鐵	八四噸
球煉毛各色大糸牛鉛鉛顏	碎石粉	一二、二五〇元	紅石	一八、六〇〇元	泥	一二、三〇〇元
綿糸羊各色細糸酸性曹達料	背石	六、〇〇〇噸	硝石	一、八〇〇方	白	七、〇〇〇擔
糸毛封度	水道	七、三二〇、〇〇〇、〇〇〇ガロン	丨	丨	丨	丨
蠟糸料	錫顏	一六、二〇〇擔	藥品	二〇、〇〇〇方	軸木	九九、〇〇〇元
綿糸	各色細糸	三五〇俵	苛性曹達	五、二五〇擔	泡花	五、〇〇〇擔
綿糸	顏料	一八〇、〇〇〇封度	顏料	一八〇、〇〇〇封度	油	一八〇、〇〇〇封度
糸	錫	六、一〇〇斤	錫	六、一〇〇斤	精鹽	六、〇七五斤
糸	各色細糸	三五〇俵	各色細糸	三五〇俵	丨	丨
糸	糸	一〇〇封度	糸	一〇〇俵	丨	丨
糸	糸	二、一〇〇俵	糸	二、一〇〇俵	丨	丨
糸	糸	六〇〇俵	糸	六〇〇俵	丨	丨

業別	原料名稱	數量	原料名稱	數量	原料名稱	數量
皮革服飾下駄製造糸織物造道工場工造		（武昌縣）				
畜皮色綾織糸	絹糸	二〇〇〇枚	白色粗布	二、〇〇〇疋	丨	丨
畜皮	絹糸	九五〇俵	丨	丨	丨	丨
畜皮	絹糸	一一二俵	丨	丨	丨	丨
畜皮	棉花	五五二、一一七擔	丨	丨	丨	丨
畜皮	銅鐵	四〇、二二四斤	鐵	一八〇噸	鋼	丨
畜皮	銑鐵	三〇噸	鐵	丨	鐵	丨
畜皮	未分類	二〇〇噸	鐵	丨	鐵	丨
畜皮	鐵紙	五〇〇、〇〇〇元	麻布	一五〇、〇〇〇元	丨	丨
畜皮	小麥	四三六、七二〇擔	丨	丨	丨	丨
畜皮	粃米	二、八五二、〇〇〇擔	丨	丨	丨	丨
畜皮	粗糠	四〇〇、〇〇〇方尺	乾皮	八〇〇、〇〇〇斤	丨	丨
畜皮	工場	七二、七六〇疋	棉花	不詳	丨	丨
畜皮	細糸	一、一八〇俵	細糸	六七〇束	丨	丨
畜皮	草布	七三〇束	草拔	丨	丨	丨

第四表　武漢三鎮（五）主要作業機

業別	作業機名稱	數量	作業機名稱	數量	作業機名稱	數量
精米	磨口機	一	耐火煉瓦燒窯	—	—	—
印刷	壓石機	二				
煉瓦及瓦	渣水池	三三				
靴下製造	抽水機	一四				
泥土	道	二〇、五五九方				
綿糸	寸	四一一俵	平列機	八	軸外し機	二
タオル	配列機					
綿糸	鱗	五四〇俵				
精米	石	一二〇、〇〇〇擔	熔解鍋	一五	壓搾機	一五
製粉	鹼	三〇〇、〇〇〇擔	研磨機	四	瀝	四
搾油	塗料	一、二一〇、七一六擔	調合機	二	機	二
印刷紙	黄丹製造機					
精米	綿織物織布機	三四〇、〇〇〇石				
印刷	石灰窯	九五、〇〇〇リンク	スタンプインキ	—	五、〇〇〇封度	—
製粉	硝子熔解爐	一五	磨口機	一		—

（漢陽縣）

業別	作業機名稱	數量	作業機名稱	數量	作業機名稱	數量
製材	鉋機	四	切斷機	四		—
鑄造鐵工場	旋盤	二五〇	ボール盤	一二〇	プレナー	五〇
鐵道工場	旋盤	三〇	ボール盤	九	プレナー	五

（漢口市）

業別	作業機名稱	數量	作業機名稱	數量	作業機名稱	數量
硝子	熔解爐	一五	磨口機	一		—
石鹼・バラス等	石灰窯	四	壓石機	二	耐火煉瓦燒窯	—
水	道	一四	渣水池	三三		—
鱗	寸	一二	平列機	八	軸外し機	二
石	鹼	一五	壓搾機	一五		—
塗	料	四	瀝	四	調合機	二
黄	丹製造機	六		—		—
綿織	織布機	三二〇		—		—
毛糸紡	織	四	紡績機	四		—
染	煉	三	壓光機	三	染機	一九
綿糸	球	三	製球機	六		—
針	織	八〇〇		—		—
軍	服	六、〇〇〇		—		—
夏	靴	一二〇		—		—
皮	革	不詳		—		—
精米	貯水槽	三〇〇		—		—
製粉	精白機	四八	篩合機	三三		—
印刷	印刷機	一四〇	石版機	一二五		—

包裝	壓縮機	一	—	—	—	—
（武昌縣）						
鑄造鐵工	旋盤	二	ボール盤	二	熔鐵爐	一
造船	旋盤	四	ボール盤	二	プレナー	二
鐵道工場	旋盤	二	ボール盤	一〇	プレナー	四
綿糸紡織	精紡機	一九七、一四四	織布機	二、六一〇	—	—
綿織物	手織機	九六	—	—	—	—
靴下製造	製造機	五〇〇	—	—	—	—
軍服	縫合機	二〇〇	—	—	—	—
皮革	壓搾機	二	艷出機	三	轉鼓	六
精米	精白機	二四	—	—	—	—
印刷	石版機	四五	印刷機	六九	—	—
（漢陽縣）						
煉瓦及瓦	燒窯	一七	煉瓦製造機	二〇	瓦製造機	一九
靴下製造	製造機	五〇〇	—	—	—	—
タヲル	製造機	三〇〇	—	—	—	—
精米	精白機	二五	—	—	—	—
製粉	製粉機	七	篩分機	七	—	—
搾油	搾油機	四二九	壓搾機	一〇	蒸窯	二一

第五表　天津市（一）資本及び職工數

業別	工場數	資本總數（元）	男工	女工	少年工	職工總數
鑄造	三三	二〇、〇〇〇	二〇一	—	三七〇	五七一
機械	六七	六八、〇〇〇	四八六	—	九五五	一、四四一
製罐	二	四二、〇〇〇	一〇〇	—	一一〇	二一〇
電氣器具	一四	六二、〇〇〇	二三六	—	一五九	三九五
鐵道工場	一	三六三、五九〇	四六六	—	—	四六六
自轉車	三二	一二、〇〇〇	一四〇	—	二八二	四二二
煉瓦及瓦	四	二、〇〇〇	五〇	—	—	五〇
硝子	二二	五〇、二〇〇	四八二	—	二〇三	六八五
磁器	一	八〇、〇〇〇	五四	—	二一	七五
燐寸	四	一、五五〇、〇〇〇	一、六〇〇	四三〇	三〇	二、〇六〇
石鹼蠟燭	三一	三一、六〇〇	二三七	—	一〇六	三四三
琺瑯鐵器	三	三〇、五〇〇	九七	—	八二	一七九
塗料	四	二三〇、〇〇〇	八七	—	—	八七
綿糸紡織	五	一五、二二一、九〇〇	九、〇三八	一、四一五	八二	一〇、五三五
綿織物	一三五	一五六、〇〇〇	七七〇	—	一、五八〇	二、三五〇

第五表　天津市（二）製品總額及び販路

業別	製品總額（元）	天津	河北省	各地販賣	外國	不詳
絹糸織物	二六四,〇〇〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇	一〇五,〇〇〇	一	一	一
絹糸織物	一六四,〇〇〇,〇〇〇	六〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇	一	一	一
塗料	二九八,〇〇〇,〇〇〇	一五,〇〇〇	一〇五,〇〇〇	一	一	一
琺瑯	五六二,〇〇〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇	一	一	一
石炭	五八五,〇〇〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇	一	一	一
煉瓦	四〇四,〇〇〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇	一	一	一
磁器	四〇〇,〇〇〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇	一	一	一
硝子	二四〇,〇〇〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇	一	一	一
煉瓦	九二一,〇〇〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇	一	一	一
自轉車	四五六,〇〇〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇	一	一	一
鍍金	二四〇,〇〇〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇	一	一	一
電氣器具	六四〇,〇〇〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇	一	一	一
製造機械	二九八,〇〇〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇	一	一	一
合計	二六四,〇〇〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇	一	一	一
置時計	二六〇,〇〇〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇	一	一	一
印刷	二〇八,〇〇〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇	一	一	一
製煙	一五〇,〇〇〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇	一	一	一
製菓	一〇〇,〇〇〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇	一	一	一
製食	一〇〇,〇〇〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇	一	一	一
製鹽	一〇〇,〇〇〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇	一	一	一
製紙	一〇〇,〇〇〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇	一	一	一
製造	一〇〇,〇〇〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇	一	一	一
製造	一〇〇,〇〇〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇	一	一	一
製造	一〇〇,〇〇〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇	一	一	一
製造	一〇〇,〇〇〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇	一	一	一
製造	一〇〇,〇〇〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇	一	一	一
製造	一〇〇,〇〇〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇	一	一	一
製造	一〇〇,〇〇〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇	一	一	一
製造	一〇〇,〇〇〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇	一	一	一
製造	一〇〇,〇〇〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇	一	一	一
製造	一〇〇,〇〇〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇	一	一	一
製造	一〇〇,〇〇〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇	一	一	一
製造	一〇〇,〇〇〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇	一	一	一
製造	一〇〇,〇〇〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇	一	一	一
製造	一〇〇,〇〇〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇	一	一	一
製造	一〇〇,〇〇〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇	一	一	一
製造	一〇〇,〇〇〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇	一	一	一
製造	一〇〇,〇〇〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇	一	一	一
製造	一〇〇,〇〇〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇	一	一	一
製造	一〇〇,〇〇〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇	一	一	一
製造	一〇〇,〇〇〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇	一	一	一
製造	一〇〇,〇〇〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇	一	一	一
製造	一〇〇,〇〇〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇	一	一	一
製造	一〇〇,〇〇〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇	一	一	一
製造	一〇〇,〇〇〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇	一	一	一
製造	一〇〇,〇〇〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇	一	一	一
製造	一〇〇,〇〇〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇	一	一	一
製造	一〇〇,〇〇〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇	一	一	一
製造	一〇〇,〇〇〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇	一	一	一
製造	一〇〇,〇〇〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇	一	一	一
製造	一〇〇,〇〇〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇	一	一	一
製造	一〇〇,〇〇〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇	一	一	一
製造	一〇〇,〇〇〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇	一	一	一
製造	一〇〇,〇〇〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇	一	一	一
製造	一〇〇,〇〇〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇	一	一	一
製造	一〇〇,〇〇〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇	一	一	一
製造	一〇〇,〇〇〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇	一	一	一
製造	一〇〇,〇〇〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇	一	一	一
製造	一〇〇,〇〇〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇	一	一	一
製造	一〇〇,〇〇〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇	一	一	一
製造	一〇〇,〇〇〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇	一	一	一
製造	一〇〇,〇〇〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇	一	一	一
製造	一〇〇,〇〇〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇	一	一	一
製造	一〇〇,〇〇〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇	一	一	一
製造	一〇〇,〇〇〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇	一	一	一

第五表　天津市（三）主要製品數量

業別	製品 名稱	製品 數量	製品 名稱	製品 數量	製品 名稱	製品 數量
鑄造	銑鐵	二六四、〇〇〇元				
機械	各種機械	六四〇、〇〇〇元				
製罐	各種罐箱	二九八、八五〇元				
電氣器具	電話機	四、〇〇〇個				
鐵道工場	車輛修理	不詳				
自轉車	自轉車輛	一二、〇〇〇輛				
磁性瓦及瓦	磁性瓦	一〇〇、〇〇〇個	洋煉瓦	三〇〇、〇〇〇個		
硝子器	各種器具	五八五、六五〇元				
磁器	各種磁器	一、五一二、五〇〇個				
燒寸	燒寸	六〇、〇九〇箱				
石鹼	石鹼	一五九、〇〇〇箱	化粧石鹼	四九六、〇〇〇ダース		
琺瑯鹼	各種琺瑯器具	三九六、三四七元				
蠟燭	蠟燭	五、五〇九、〇〇〇封度				
料器			漆	一、九〇〇、〇〇〇封度		
寸			布	八〇七、四三一疋		
絹織物						
糸						
紡織						
製造						
計	七四、五〇〇、五八七					

業別	製品 名稱	製品 數量	製品 名稱	製品 數量	製品 名稱	製品 數量
絹織物		四、〇〇〇、〇〇〇				
糸		一、〇六二、八六〇		二〇		
紡		三、七〇〇、〇〇〇		三〇		
製		二、四六三、八八〇		三〇		
造		四、八一〇、〇〇〇		七〇		
煉		七五〇、九〇〇		三〇		
瓦		一五〇、〇〇〇		二〇		
及		一一四、八〇〇		二〇		
瓦		一、三二八、七五〇				
車		二五、〇〇〇				
製		一六、四一一、八七四				
造		九〇、〇〇〇				
煙		三二四、〇〇〇				
草		二四五、〇〇〇				
食		一、五五八〇〇〇				
品		二二九、六二二				
計		七四、五〇〇、五八七				

綿織物	綿布	四一〇、〇〇〇疋	帆布	二一、五〇〇疋	—
絹織物	絹織物	四〇〇、〇〇〇疋	—	—	—
毛糸紡織	毛糸	一、〇〇〇俵	毛織物	四、四四〇ヤード	細糸
染煉	染煉費	三、七〇〇、〇〇〇元	—	—	八八、八〇〇封度
靴下製造	靴下	一、五〇九、八〇〇ダース	—	—	—
帽子製造	夏帽	三一、一〇〇ダース	毛皮帽	二一二、六〇〇個	ソフト
タヲル	タヲル	二三四、〇〇〇ダース	敷物	一九五、二〇〇枚	一七九、〇〇ダース
釦	釦類	一一〇、〇〇〇組	—	—	—
莫産	莫産	四一〇、〇〇〇枚	—	—	—
製革	革	一、四七二、五〇〇封度	—	—	—
護謨	護謨靴	四五、〇〇〇足	—	—	—
製粉	麥粉	五、八七九、四〇〇包	敷	五八七、九四〇包	—
罐詰食品	罐詰食品	九〇、〇〇〇元	—	—	—
卷煙草	卷煙草	一、八〇〇箱	—	—	—
製紙	紙型	四、七五二噸	紙	一〇、〇〇〇リンク	—
印刷	印刷費	一、五五八、〇〇〇元	—	—	—
置時計製造	置時計	二四、四八〇個	—	—	—

第五表　天津市（四）主要原料數量

業別	原料名稱	原料數量	原料名稱	原料數量	原料名稱	原料數量
鑄造	銑鐵	一、九四五噸	銀鐵	一二、四二三擔	—	—
機械	銑鐵	一、六二〇噸	印刷用インキ	一四、〇〇〇元	—	—
製罐	トタン板	一一、二〇〇箱	—	—	—	—
電氣器具	未分類	一九〇、〇〇〇元	—	—	—	—
鐵道工場	銑鐵	不詳	銀鐵	不詳	木材	不詳
自轉車	未分類	一八〇、〇〇〇元	—	—	—	—
煉瓦及瓦	陶土	一四〇噸	釉藥	七〇〇斤	セメント	五、六〇〇袋
硝子	曹達	四三三、九二〇斤	硝子片	二、七〇五、〇〇〇斤	石粉	九八〇、〇〇〇斤
磁器	陶土	九、二四〇擔	石材	一、一〇〇噸	—	—
燐寸	木材	二九八、七二二元	硫黄	八一、七四四元	鹽酸加里	四五〇、〇〇〇封度
石鹼蠟燭	油	二二、四〇〇擔	苛性曹達	四、四八〇擔	油脂	五、〇五五擔
琺瑯鐵器	鐵板	一四三、四九八枚	琺瑯粉	七六、六七〇元	—	—
塗料	油	九、四六〇擔	其他	不詳	—	—
綿糸紡織	棉花	四八四、六三〇擔	—	—	—	—

綿織物	綿糸	一〇、〇〇〇俵	綿糸	—	二、六七〇俵	—	—
絹織物	人造絹絲	五、七〇〇箱	綿糸	—	—	—	—
毛糸紡織	羊毛	七一二、四〇〇封度	綿糸	—	二、八一九俵	—	—
染煉	未分類	一、一八〇、〇〇五元	—	—	—	—	—
靴下製造	綿糸	六、〇〇〇俵	毛糸	—	一七一、〇〇〇封度	—	—
帽子製造	未分類	一、〇三〇、〇〇〇元	—	—	—	—	—
タオル	綿糸	二、二三二俵	—	—	—	—	—
釦	牛角類	五〇、〇〇〇斤	貝殼	—	一二二、〇〇〇斤	木材	二九〇、〇〇〇斤
莫蘭	蘆草	五三三、〇〇〇斤	—	—	—	—	—
製革	牛馬皮	一一、八七五擔	—	—	—	—	—
護謨製	樹護謨	九、四〇〇封度	炭酸石灰	—	一〇、五〇〇封度	—	—
製粉	小麥	二、八四七、三〇〇擔	—	—	—	—	—
罐詰食品	トタン板	三二、七六八元	食品	—	三一、五七〇元	—	—
卷煙草	葉煙草	七五、〇〇〇元	—	—	—	—	—
製紙	稻藁	一四八、五〇〇擔	石灰	—	二九、七〇〇擔	反古紙	二五〇噸
印刷	未分類	五七七、九〇〇元	—	—	—	—	—
置時計製造	銅片	四八、四五二斤	銅線	—	五、五八一斤	發條	四、八九六本

第五表　天津市（五）主要作業機

業別	作業機 名稱	作業機 數量	作業機 名稱	作業機 數量	作業機 名稱	作業機 數量
鑄造	熔鐵爐	三三	—	—	—	—
機械	旋盤	不詳	プレナー	不詳	ボール盤	不詳
製罐	製罐機	三九	印刷機	七	—	—
電氣器具	旋盤	不詳	プレナー	不詳	ボール盤	不詳
鐵道工場	旋盤	一五	プレナー	二	ボール盤	一〇
自轉車	滾瓦圓機	五	壓力機	一一	旋盤ボール盤	一一
煉瓦及瓦	燒窯	四	煉瓦製造機	二	瓦製造機	二
硝子	坩堝	四九	瓶吹機	三	磨口機	八
磁器	製造機	二〇	燒窯	二	—	—
燐寸	軸木並列機	二五	排列機	一一〇	軸外し機	五五
石鹼蠟燭	熔解鍋	四二	壓搾機	一一	蠟燭製造機	八九
琺瑯鐵器	琺瑯機	六	ハンマー	二六	電氣熔接機	五
塗料	煮油鍋	二〇	攪拌機	一二	仕上機	二六
綿糸紡織	精紡機	一八八、八〇〇	撚糸機	八、七〇四	織布機	一、三一〇

綿織物	織布機	一、三九〇	—	—	—	—
絹織物	絹織機	一、六五〇	—	—	—	—
毛糸紡織	紡糸機	五	毛織機	一六	合糸機	三
染煉	カレンダー	八四〇	伸幅機	四〇	染機	不詳
靴下製造	電織機	六四	手動機	一、五〇〇	—	—
帽子製造	縫合機	一、〇三二	ソフト機	二二〇	夏帽機	二九三
タヲル	タヲル機	四六八	敷物織機	一四〇	—	—
釦類	釦製造機	一〇	打抜機	一二	壓搾機	一三
莫蓙	製造機	二〇四	—	—	—	—
製革	艶出機	一九	ローラー	四九	—	—
護謨	ローラー	一	底付機	一	—	—
製粉	製粉機	一〇七	篩分機	七六	—	—
罐詰食品	製罐機	八	ビスケット機	二	—	—
卷煙草	葉刻機	一	捲製機	二	—	—
製紙	製紙機	二	紙型機	一	糊付機	七
印刷	印刷機	九九	石版機	八七	—	—
置時計製造	旋盤	一七	ボール盤	一〇	ハンマー	八

第六表 濟南市(一) 資本及び職工數

業別	工場數	資本總數(元)	男工	女工	少年工	職工總數
鑄造	七	九、〇五〇	九四	—	五九	一五三
提燈	一	二〇、〇〇〇	二五	—	二〇	四五
機械	二四	四四八〇〇	二八四	—	三六〇	六四四
鐵道工場	一	一、二三五、二六八	一、〇五一	—	五一	一、一〇二
煉瓦及瓦	九	一七二、五〇〇	七六九	—	三二二	一、〇九一
硝子	一	二、〇〇〇	八	—	二五	三三
燐寸	三	十二〇、〇〇〇	五七三	三二〇	一四〇	一、〇三三
石鹼蠟燭	五	二八、五〇〇	八五	—	—	八五
顏料	二	一二〇、〇〇〇	四八	—	—	四八
綿糸紡織	三	二、七五三、六九九	一、〇四四	一、七一七	二九五	三、〇五六
綿織物	一六	一二、五〇〇	一六〇	四五	一二五	三三〇
平紐	五	七、五〇〇	七一	—	一一七	一八八
靴下製造	三	一、九〇〇	四三	—	一八	六一
タヲル	三	四、六〇〇	二四	二	二五	五一
製革	三	五一、〇〇〇	三八	—	—	三八

第六表　濟南市（二）製品總額及び販路

業別	製品總額（元）	各地販賣百分率				
		濟南	山東省	外省	外國	不詳
鑄鐵提鑄	一〇〇、〇〇〇	一	一	一	一	一〇〇
煉鐵機械	四八、〇〇〇	一	一	一	一	一
瓦造及工場	二九三、四七〇	一	四〇	六〇	一	一
瓦場機械	一、〇二八、三五八	一	一	一	一	一
瓦場燈造	五一〇、〇三九	一	一	一	一	一〇〇
子	二〇、〇〇〇	一	一	一	一	一〇〇
合計	二、九〇六、三四四	八〇	二〇	八〇	一	一
包印製卷罐製	一八〇、〇〇〇	一	二〇	八〇	一	一
煙詰	二〇七、〇〇〇	一	二〇	八〇	一	一
食	二〇七、九〇〇	一	二〇	八〇	一	一
裝刷紙	四二三、〇〇〇	一	一〇〇	一	一	一
草品	一八〇、〇〇〇	一	一	一	一	一
粉	一九、〇五三、三七七	一	一	一	一	一〇〇
草	二八〇、〇〇〇	一	一	一〇〇	一	一
製ル	三〇、五〇〇	一	一〇〇	一	一	一
造	四九、七〇〇	一	一〇〇	一	一	一
紐	一三九、〇〇〇	一	一	一〇〇	一	一
物	三一六、〇〇〇	一	一〇〇	一	一	一
織	七八〇、〇〇〇	一	一〇〇	一	一	一
料	六〇〇、〇〇〇	一	三〇	七〇	一	一
燭	二九〇、〇〇〇	一	一	一	一	一〇〇
寸	一、一五〇、〇〇〇	一	二〇	八〇	一	一
合計	三二、九〇六、三四四					

第六表　濟南市（三）主要製品數量

業別	製品名稱	製品數量	製品名稱	製品數量	製品名稱	製品數量	製品名稱	製品數量
鑄造	鐵鍋	一、四三七、九〇一封度	火口	四五、〇〇〇ダース				
提燈	提燈	三、〇〇〇ダース						
機械	各種機械部分品	二九三、四七〇元						
鐵道工場	機關車	不詳	客車	不詳	貨車	不詳		
煉瓦及瓦	煉瓦	三〇、三〇四、〇〇〇個	瓦	七、九八〇、二〇〇個				
硝子	ランプ・ホヤ	四三、〇〇〇ダース						
燐寸	燐寸	二五、七八二箱						
石鹼蠟燭	石鹼	三九七、〇〇〇ダース	蠟燭	七、五〇〇箱				
顔料	硫化青	一三、〇〇〇箱						
綿糸紡織	綿糸	三八、四六二俵						
綿織物	綿布	四六、〇〇〇疋						
平紐	平紐	一三九、〇〇〇ダース						
靴下製造	靴下	二四、八五〇ダース						
タヲル	タヲル	二五、〇〇〇ダース						

第六表　濟南市（四）主要原料數量

業別	原料名稱	原料數量	原料名稱	原料數量	原料名稱	原料數量	原料名稱	原料數量
製革	鞣皮	八、〇〇〇枚						
製粉	麥粉	六、〇七一、三七三袋	穀	五五六、六四七袋				
罐詰食品	罐詰食品	一八〇、〇〇〇元						
卷煙草	卷煙草	四、〇〇〇箱						
製紙	紙	三七、九六六リンク						
印刷	印刷費	二〇七、九〇〇元						
包裝		一八〇、〇〇〇元						
鑄造	銑鐵	六六八噸						
提燈	未分類	四三、〇〇〇元						
機械	銑鐵	三八〇噸	鍛鐵	五、六二八擔				
鐵道工場	銑鐵	四〇〇噸	未分類	二五〇噸	木材	四〇、〇〇〇方尺		
煉瓦及瓦	泥土	七〇、九六六方						
硝子	未分類	一二、〇〇〇元						

燐寸	硫化燐	五五、五七四封度	鹽酸加里	三四三、三八七封度	軸木	一七、五三一、七六〇束	鋼鐵板	一八ヵ噸	麻袋	一五〇俵	
石鹼蠟燭	牛油	二、七七〇擔	苛性曹達	四四樽	洋蠟	一、〇〇〇擔					
顏料	酸	八九八、四八〇封度	曹達	八〇一、〇〇〇封度	硫黃	一七九、三三三封度					
綿糸紡織	棉花	一三八、七八二擔									
綿織物	綿糸	一、〇四〇俵									
平組	綿糸	二四八俵									
靴下製造	綿糸	一〇一俵									
タヲル	綿糸	九六俵									
製革	牛皮	八、〇〇〇枚									
製粉	小麥	三、五二二、六〇〇擔									
罐詰食品	トタン板	二五〇箱	食品	一一九、七五〇元							
卷煙草	葉煙草	四八〇、〇〇〇封度									
製紙	破布等	一、九六一、〇〇〇封度									
印刷	未分類	一一三、〇〇〇元									
包裝											

第六表　濟南市（五）主要作業機

業別	作業機名稱	數量	作業機名稱	數量	作業機名稱	數量	作業機名稱	數量
鑄造	熔鐵爐	七						
提燈	壓力機	八						
機械	旋盤	五七	ボール盤		三九	プレナー	一一	
鐵道工場	熔鐵爐	二	旋盤		三八	プレナー	九	
煉瓦及瓦	煉瓦機	二	瓦製造機		九	燒窯	三二	
硝子	坩堝	四	吹桿		三五			
燐寸	軸木排列機	三八	軸外し機		二五	並列機	六	
石鹼蠟燭	熔解鍋	八	壓搾機		一一			
顏料	原料爐	二						
綿糸紡織	紡錘	四四、四一六						
綿織物	織布機	一七二						
平組	組織機	一二〇						
靴下製造	製稱機	二七						
タヲル	タヲル機	二三						
製革	轉鼓	八	甑出機					

第七表　廣東市（一）資本及び職工數

業別	工場數	資本總額（元）	男工	女工	少年工	職工總數
麦粉製造	一	七、七〇〇	二四	三六	—	六〇
鐵製家具	三	七、七〇〇	三〇	—	—	三〇
鑄造	二五	七五、〇〇〇	三〇〇	—	七五	三七五
機械製造修理	八〇	一二〇、〇〇〇	六四〇	一五	四八〇	一、一三五
金屬品製造	一四	一九六、九六六	二四四	二〇〇	二八	四七二
電氣機械及用品	五六	二二〇、二二〇	三八五	九二四	一八八	一四九七
鐵道工場	三	一、三八〇、九四五	五六七	—	八五	六五二
煉瓦及瓦	二	一〇〇、〇〇〇	九四	二五	—	一一九
製粉	一一三	三六八	二五	五〇	—	—
製粉機	一一三					
罐詰食品	一	篩分機	五五	二	—	五五七
蒸汽釜	一	ビスケット機	一二	四	—	一六
卷煙草	二	葉刻機	四〇	—	—	四〇
搾製機	二		九九	—	六	一〇五
製紙	一	糊付機	一八四	—	—	一八四
製紙機	一		二八七	一、四七七	六七	一、八三一
印刷	三九	石版機	六五	一八	二	八五
印刷機	—	—	一〇八	二〇	五	一三三
包裝	一		二七〇	四八〇	—	七五〇
包裝機			三四三	—	一二〇	四六三
			不詳	不詳	不詳	一、四四四
硝子	一	三、〇八〇	九〇三	五、五五九	—	六、四六二
セメント	二	三、〇八九、三五六	五六	七六	—	一三二
石粉	一	一、五四〇	四一	二四九	一八	三〇八
炭團	八	三〇、八〇〇	四〇	一六〇	—	二〇〇
建築材料	三	三九、二七〇	三八二	二四	一二四	五三〇
水道	一	九六一、〇二五				
燒寸	八	二一四、八一〇				
琺瑯鐵器	二	九二、四〇〇				
塗料・顏料等	一〇	八一、九九八				
スタンプインキ						
化粧品	一八	七五七、五〇〇				
土法石油	一四四	二、一四二、九二五				
其他化學工業	五四	一一九、三五〇				
綿糸紡織	一〇五	四七三、四六六				
漂布・脫脂綿	八	不詳				
製絲及絹織	二	二六九、五〇〇				
綿毛紡織	一	九六、二五〇				
染煉	三一	不詳				

| | | |

第七表　廣東市（三）主要製品數量

業別	製品名稱	數量	製品名稱	數量	製品名稱	數量
麥楊枝製造	麥楊枝	一、五〇〇、〇〇〇箱		—		—
鐵製家具	鐵製鞋櫃	一二、八〇〇個		—		—
鑄造	鑄物鐵	四一、二五〇擔	鑄物銅	一、六五〇擔		—
機械製造修理	部分品	一、六〇〇、〇〇〇元		—		—
金屬品製造	未分類	一、七七〇、七九九元		—		—
合計		一〇一、五六九、〇二二				
印刷	刷氷	三、六三五、九四〇		五五		—
製清涼飲料	清涼飲料	五九四、五二五		—		—
搾油	搾油	一四、八九五、六〇〇		五〇		五〇
罐詰類其他	罐詰類其他	一、四六九、九〇〇		五		二〇
米糖	米糖	八、一〇五、〇七〇		一〇〇		—
麻製品	麻製品	二、七六二、二〇二		—		—
絲製品	絲製品	八〇二、九二〇		—		—
漂布及絲毛製品	漂布及絲毛製品	五六〇、〇四三		—		—
脫脂紡織	脫脂紡織	一、〇四四、一五〇		一五		四〇
絲綢紡織	絲綢紡織	三六、六二一、〇四二		一〇〇		—
絲綢紡織	絲綢紡織	二六五、〇五四		—		—
其他化學工業	其他化學工業	四、八二六、二二八		四〇		八〇
土法紡織	土法紡織	三三六、四八〇		二〇		二〇
化石灰	化石灰	一六三、四三二		—		—
塗料	塗料	三五二、二〇〇		—		—
珠子	珠子	二二五、六〇〇		一〇		—
鱗寸	鱗寸	二、七六二、二〇二		—		—
鞋料	鞋料	八〇二、九二〇		—		—
鐵器	鐵器	五六〇、〇四三		—		—
搪瓷製品	搪瓷製品	一、〇四四、一五〇		一五		四〇
玻璃製品	玻璃製品	三六、六二一、〇四二		一〇〇		—
玻璃製品	玻璃製品	二八五、〇五四		—		—
玻璃製品	玻璃製品	四、八二六、二二八		四〇		八〇
玻璃製品	玻璃製品	三三六、四八〇		二〇		二〇
玻璃製品	玻璃製品	一六三、四三二		—		—
玻璃製品	玻璃製品	三五二、二〇〇		—		—
玻璃製品	玻璃製品	二二五、六〇〇		一〇		—
玻璃製品	玻璃製品	二、七六二、二〇二		—		—
玻璃製品	玻璃製品	八〇二、九二〇		—		—
玻璃製品	玻璃製品	五六〇、〇四三		—		—
玻璃製品	玻璃

電氣機械及用品	懷中電燈	五六、四二〇ダース	電池	一、四六五、〇〇〇ダース	扇風器	三九六個	
鐵道工場	車輛製造修理	九〇〇、三六一元					
煉瓦及瓦	煉瓦	一五六〇八七八八個					
硝子	硝子器	一、〇〇〇、〇〇〇封度					
セメント	セメント	三八二、八九二樽					
石粉	粉	二、八八〇擔					
炭團	炭團	一三二、〇〇〇擔					
建築材料	鋼窓框	七五、〇〇〇方尺					
水道	水	七、六六、二四〇、〇〇〇ガロン					
燐寸	燐寸	五一、二〇〇大箱	燐寸箱	一九、〇〇〇、〇〇〇組	軸木	四一、二〇〇擔	
琺瑯鐵器	琺瑯器具	八〇三、九二〇元					
塗料・顔料・スタンプインキ等	未分類	五六〇、〇四三元					
化粧品	各種化粧品	一〇四四、一五〇元					
土法石油	石油	一五、三三七、六八〇罐					
其他化學工業	人造肥料	一四、〇〇〇擔	電氣鍍金費	二一一、七五〇元			
綿糸紡織	工場布	三六九、三一四疋	手織木綿	二三四、〇〇〇疋			
漂布・脱脂綿	脱脂綿	五三〇、〇〇〇封度	漂布	二一、〇〇〇元			

製絲及絹織	工場糸	二、七六〇斤	絹織物	三、六五二疋			
綿毛紡織	綿布	一二、〇〇〇疋	毛織物	六〇〇疋			
染	漂白染色費	二一五、六〇〇元					
煉		四〇、〇〇〇元					
平織	平織機						
綿糸製造	綿糸球	三、六八四個					
針織	シャツ	一〇五、八〇〇ダース	綿靴下	三九九、〇〇〇ダース			
タオル	タオル	一五〇、〇〇〇ダース					
製革	鞣革	八八、〇〇〇枚					
護謨製品	護謨靴	八、八〇〇、〇〇〇足					
精米	白米	八〇〇、〇〇〇擔	代理精白	五一一、五〇〇擔			
罐詰類其他	ビスケット	三、六三〇、〇〇〇封度	菓子	四九二、〇〇〇封度	各種食品	三、〇〇〇、〇〇〇罐	
搾油	落花生油	七二〇、〇〇〇擔	同油粕	一、〇八〇、〇〇〇擔			
清涼飲料	サイダー	七五五、〇〇〇ダース					
製氷	氷	四、〇〇〇噸			代理染色費	一八、〇〇〇元	
印刷	印刷物	三、六三五、九四〇元					

第七表　廣東市（四）主要原料數量

業別	原料名稱	數量	原料名稱	數量	原料名稱	數量	原料名稱	數量
妻楊枝製造	楊材	四六、二〇〇元	—	—	—	—	—	—
鐵製家具	角鐵	一、九二〇擔	鐵板	—	—	一、二八〇擔	—	—
鑄造	銑鐵	二七、五〇〇擔	屑鐵	一三、七五〇擔	屑銅	一八三、三三擔
機械製造修理	銑鐵	五七六、〇〇〇元	鍛鐵	三八四、〇〇〇元	—	—
金屬品製造	未分類	一、〇八三、九一二元	鐵片	三、九〇〇箱	—	—
電氣機械及用品	亞鉛板	三、八九二噸	鹽化アンモニウム	一九六噸	未分類	一七七、三四九元
鐵道工場	滿俺粉	四八六噸	鹽化亞鉛	一一三噸	—	—
煉瓦及瓦	未分類	四〇五、七三七元	—	—	—	—
泥土	硝子片	三四、二八〇元	—	—	—	—
硝子	硝子片	不詳	—	—	—	—
セメント	灰石	一二四、九九五噸	粘土	—	石膏	三二、三〇六擔
石粉	石英	三、三六〇擔	—	—	—	—
炭團	石炭屑	一三二、〇〇〇擔	黃砂	—	—	六、六〇〇擔
建築材料	鋼窓框	一〇五噸	鋼	—	—	七六擔 釘
水道	—	—	—	—	—	—

業別	原料名稱	數量	原料名稱	數量	原料名稱	數量	原料名稱	數量
燐寸	藥劑	三七九、六八〇元	楊材	四	一二〇、〇〇〇方尺	軸・木	三二、七二〇擔
琺瑯鐵器	鐵板	二〇一〇擔	琺瑯粉	—	一一四、〇〇〇擔	箒	二九六、六四〇、〇〇〇組
塗料・顏料・スタンプインキ等	未分類	三三八、七九八元	—	—	三一、一五五元	未分類	六四三、七四三元
化粧品	各種原料	六一七、三九〇元	—	—	—	—	—
土法石油	柴油	二六四、四八〇噸	—	—	—	—	—
其他化學工業	牛骨	一五、四〇〇擔	未分類	四七、三五五元	—	—	—
綿糸紡織	綿糸	一〇、七四二俵	毛糸	一、五〇〇封度	—	—	—
漂布脫脂綿	棉花	五三〇、〇〇〇封度	漂布	五、〇〇〇元	綿布	六、〇〇〇元
製糸及絹織	乾繭	一二、六五〇斤	工場糸	七、〇二三斤	人造絹糸	二、二四八封度
綿毛紡織	綿糸	二五〇、〇〇〇封度	毛糸	一五、〇〇〇封度	顏料	二〇、〇〇〇元
染煉	漂染原料	五三、九〇〇元	—	—	—	—
平織	木柴	四、五〇〇元	電力	一一、二五〇元	—	—
綿糸製造	綿糸	五六俵	—	—	—	—
針織	綿糸	二、四一八俵	—	—	—	—
タオル	綿糸	五三三俵	—	—	—	—
製革	牛皮	八八、〇〇〇枚	拷膠	六、一六〇擔	—	—
護謨製品	帆布	三四、〇〇〇疋	土布	三四、〇〇〇疋	護謨原料	二、〇三二、八〇〇元

第七表　廣東市（五）主要作業機

業別	作業機 名稱	數量	作業機 名稱	數量	作業機 名稱	數量	作業機 名稱	數量
精米	粃	一、二〇〇、〇〇〇 擔	代理精白	—	砂糖	—	一九七、二五〇 擔	—
罐詰類其他	未分類	六〇二、四三六 元	硫酸曹達	—	果實類	—	一、六二〇 封度	—
搾油	落花生	一、八〇〇、〇〇〇 擔	七四〇	七七五、〇〇〇 擔	糖	—	擔	—
清涼飲料	水道	七〇〇、〇〇〇 ガロン	七四〇 擔	—	—	—	—	—
製氷	水	四、〇〇〇 噸	—	—	—	—	—	—
印刷	紙インキ	二、三一七、四六 元	—	—	—	—	—	—
妻楊枝製造	製造機	三	木材切斷機	三	齊整削機	一	粗製原料磨機	一
鐵製家具	拉管床	三	ボール盤	三	板床	三	—	—
鑄造	火造爐	三二	鞴	二五	—	—	—	—
機械製造修理	旋盤	二四〇	ボール盤	一二〇	プレナー	八〇	—	—
金屬品製造	旋盤	四	ボール盤	一二	プレナー	一	—	—
電氣機械及用品	旋盤	三五	ボール盤	一三	プレナー	五	—	—
鐵道工場	熔鐵爐	六	エアハンマー	三	熔銅爐	三	—	—

煉瓦及瓦	製造機	三	燒窯	一四	—	—	—	—
硝子	熔解爐	二	精製原料磨機	一	粗製原料磨機	一	電氣鍍金機	五〇
セメント	回轉窯	一	精製原料磨機	一	粗製原料磨機	一	手動木製機	一、九五〇
石粉	磨粉機	三	研磨機	一	—	—	同手動機	一三四
炭團	製造機	八	—	—	—	—	打棉機	八
建築材料	ハンマー	八	カッティング	—	鋸機	五	梳棉機	九
水道	濾水池	七	—	—	—	—	蒸煮鍋	八
塗料	塗料機	一三	軸刻機	一一	配列	一二	電纖機	六〇
琺瑯鐵器	燒窯	五	琺瑯粉機	七	齊整機	一四	染色機	一
塗料・顏料・スタンプインキ等	研磨機	一七	壓搾機	二	煉油機	三	—	—
化粧品	クリーム製造機	一三	研磨機	五	磨粉機	一七	—	—
土法石油	製造機	二〇〇	—	—	—	—	—	—
其他化學工業	研磨機	五	拋光機	二六〇	電氣鍍金	五〇	—	—
綿糸紡織	鐵木合製機	一、六七八	同手動機	一三四	手動木製機	一、九五〇	—	—
漂布・脫脂綿	開棉機	八	打棉機	八	梳棉機	九	—	—
製糸及絹織	繰糸機	一四二	煮繭機	一	蒸煮鍋	八	—	—
綿毛紡織	織機	七二	合糸機	二	電纖機	六〇	—	—

染煉	染色機	一一〇	乾燥機	—	六	—	—	—	—	—	—
平織	平織機	七									
綿糸製造	蠟光機	一一	製造機	一	三五	—	—	—	—	—	—
針織	シヤツ製造機	一六九	靴下製造機	五	四四	—	—	—	—	—	—
タオル織	織機	三一〇		—		—	—	—	—	—	—
製革	ローラー	四〇	沙皮機	四	〇	鑄造版機	護謨版機	三〇	一二四
護謨製品	ローラー	六九	壓搾機	三	七	—	—	—	—
精米	脫殼機	二四	精白機	四	六	分穀機	二一	—	—
罐詰類其他	ビスケット製造機	五	飴製造機	四	汽罐	六	—	—	—
搾油	磨碎機	六八	油締木	一	〇〇〇	—	—	—	—
清涼飲料	サイダー製造機	八	出水機	一	一	—	—	—	—
製氷	冷却機	四	水汲機	四		—	—	—	—
印刷	印刷機	八四六	石版機	四	六	鑄造機	—	一二四	—

（附註）(1) 金屬品製造業に屬する計十四工場の原表不詳の爲、こゝに擧げた數量は單に以上を除く三工場の合計に過ぎない。

(2) 電氣機械及用品業に屬する計五十五工場の中五十工場の原表不詳の爲、この數量も以上を除く五工場の合計に過ぎない。

(3) 土法石油業作業機中には氣壓機・貯油機・冷却器等をも含む。

第八表　江蘇省（上海市及び無錫縣を含まず）

地別	工場數	資本總額（元）	職工人數 男工	女工	少年工	合計	製品總額（元）
南京市	六七八	七、四八六、〇〇〇	六、八二九	五八〇	二、四四四	九、八五三	三三、四三七、六一六
吳縣（蘇州）	二七九	三、八八六、〇〇〇	三、九五一	三、九〇五	五四三	八、三九九	一五、二三三、〇五四
鎭江縣	三三七	四、七一一、〇〇〇	二、五四〇	一、〇〇八	一、一九三	四、七四一	八、四九七、〇〇〇
武進縣（常州）	九八	三、一三六、〇〇〇	二、四二三	五、五四六	一、〇七一	九、〇四〇	二二、五九二、三八三
南通縣（通州）	六六	七、六六八、五五一	四一九〇	六、六三二	一、五九六	一二、四一八	二、四二六、九四二
南匯縣	四〇九	四、三一七、〇〇〇	二、五四九	一〇、六二一	四六二	一三、六三二	六、一〇七、六六〇
松江縣	六二	二〇二、五〇〇	七一八	四、六一三	八一四	六一四五	一、七三八、四六〇
銅山縣（徐州）	一二	二二七、二七〇	一七七	四	一〇八	二八九	一、一八〇、七〇〇
江都縣（楊州）	五二	二七二、〇〇〇	三四二	四〇〇	一七〇	九一三	一、八九四、七〇〇
丹陽縣	一八	九八、一〇〇	四一六	四〇〇	一四五	九六一	四二七、八五九
常熟縣	五七	三一六、〇〇〇	七二八	一、五九五	五四四	二、八六七	一、三四九、六〇〇
句容縣	三	二、八一二、二〇二		二五	—	五二五	二、五〇九、五三六
崑山縣	四〇	三九八、〇〇〇	一、一六〇	二〇〇	二〇	一、三八〇	四二九、八〇〇
淮陰縣	四	一六四、九四四	一五六	八〇	一	二三七	一、〇六三、二〇〇